

ドイツ語不変化詞に関する通時的・類型論的研究

—doch とその周辺—

津山 朝子

要旨

近年、コミュニケーション学の発達により、ドイツ語学においても「心態詞」(Abtönungspartikel)研究が盛んとなってきた。心態詞とは、本来それ以外の意味を持つ語の特別な用法で、話し手の心的態度を表す機能語のことである。その萌芽的研究となった Weydt(1969)以後、心態詞研究は詳細に行われてきたが、その多くは用法についての分類学的視点に立脚したものであり、心態詞というカテゴリーがどのようにして発生したのか、またなぜ心態詞という意味機能が生じたのかという点に関しては、いまだに十分な考察はなされていないように思われる。そこで本論は、従来の分類学的な用法列挙を超え、通時的な観点に立ち、心態詞の発生と機能の変遷をたどることを目的とする。

その際、中心に扱われるのは **doch** という語である。この **doch** は接続詞、接続副詞、心態詞、応答詞という 4 つの意味機能を持つ語であり、その多機能性は他の不変化詞には類を見ない。そこで、**doch** の全容を明らかにすることができれば、多くの不変化詞に通底するメカニズムの一つが解明できると推測し、本論の考察対象とした。

第 1 章において、現代ドイツ語における **doch** を考察した。**Doch** には逆接の接続詞、逆接の接続副詞、応答詞、心態詞の機能があり、それらには「対立性」という共通の意味基盤があることを示した。

第 2 章では、Hentschel(1986)を用いてゴート語、古高ドイツ語、中高ドイツ語における **doch** の意味機能を調査する中で、心的態度を表す用法は古代から存在していたことが確認された。また、*Grimm's Wörterbuch* における **doch** の例文を観察し、応答詞としての **doch** は最も後発の機能であることが認められた。

第 3 章では、ドイツ語において **doch** とその類似語を比較した。語源を同じくする **jedoch**、「対立」という意味内容を持つ接続詞という点で類似する **aber**、心態詞以外に応答詞としての機能を持つという点で類似である **ja** を考察した。その中で、**Jedoch** という強意形の存在があるゆえに **doch** に文法化が起こりえたことを主張した。また **aber**、**ja** との比較においては、不変化詞の連辞（複合形式）についても言及した。不変化詞は他の不変化詞と結合して使用されることがあり、結合した場合の意味機能は単独でのそれとは異なる。二つの応答詞が隣接した場合は弱－強という順序で結びつく。同様に心態詞も二つ以上連結して文中に現れることが可能であり、結合した場合は単独の場合と異なる意味機能を果たすことがある点を確認した。

第 4 章では、ドイツ語と同語族である英語とオランダ語における **doch** の相当語について

観察した。英語には心態詞に相当するカテゴリーはなく、副詞や法助動詞がモダリティの表出に貢献していた。とはいえ、譲歩の従属接続詞 **though** に「逆接」というよりは、発話の区切りを示す標識の役割をしている場合が見られ、英語の接続詞にも文法化 (Grammatikalisierung, grammaticalization) が起こっている可能性を示した。オランダ語の **toch** に関しては **doch** 以上に逆接の意味が希薄していると推測される例文が多く見られた。逆接機能としては **aber** に相当する **maar** との共起が頻出していたからである。また心態詞機能については **doch** が生起しない場面でも **toch** が用いられていたこともあり、より広範な機能性が看取された。さらに、時間副詞と接続詞・接続副詞が対応する文も散見された。

第 5 章では日本語の問題を取り上げた。助動詞「だ」終助詞「よ」「ね」に関して神尾の「情報のなわ張り理論」を用いて説明した。「よ」は命題が聞き手のなわ張りにないと話し手が想定している会話に、「ね」は命題が聞き手のなわ張りの中にある可能性を排除せずに話し手が発言する際に使用される。対立型の **doch** と「よ」、一致型の **ja** と「ね」がそれぞれ類似した機能を果たしていることが確認された。

第 6 章では文法化について論じた。再帰代名詞 **sich** と **bekommen**-Passiv を用いてドイツ語における文法化現象の一端を示したあと、**doch** の文法化について考察した。現代の心態詞は本来の意味機能が文法化して出現したもの、あるいは心態詞機能が文法化というプロセスを経て変容していったものと推測される。逆接の接続詞・接続副詞として機能する不変化詞 **doch** について言えば、アクセント喪失によって、その対立性が希薄化したことが契機となり、心態詞としての機能が生まれたと考えられる。また **aber** や **ja** の文法化についても概観した。**Ja** は「一致」という意味基盤に基づき、応答詞と心態詞として機能していること、**aber** は空間、時間的な意味を経て反復、逆接と意味を変容させたことが確認された。また、接続詞・接続副詞、応答詞以外の様態副詞や時間副詞も心態詞になり得る現象についても言及した。

結論として、心態詞への文法化には、命題のコネクターないしはオペレーターとしての機能がその基盤にあることを主張した。

目次

0.	序論	1
1.	現代ドイツ語における doch	3
1.1.	Duden(1996)における doch	6
1.2.	接続詞・接続副詞としての doch	9
1.3.	応答詞としての doch	15
1.4.	心態詞としての doch	17
2.	doch の歴史的観察	22
2.1.	Hentschel(1986)	22
2.2.	„DWB“における doch	26
3.	ドイツ語内での比較	33
3.1.	jedoch との関連	33
3.2.	aber との関連	36
3.3.	doch 再確認	38
3.4.	ja との関連	40
3.5.	応答詞の連辞	42
3.6.	心態詞の共起	45
3.7.	話法詞の応答機能	50
4.	英語・オランダ語との比較対照	52
4.1.	英語の副詞・心態詞対応物	52
4.2.	オランダ語の副詞・心態詞対応物	55
4.3.	doch と同語源の語の比較対照	57
4.3.1.	though	58
4.3.2.	toch	60
4.4.	『星の王子さま』における doch とその対応物の比較対照	65

4.4.1.	平叙文	66
4.4.2.	確認疑問文	81
4.4.3.	補足疑問文	83
4.4.4.	wenn による条件文	84
4.4.5.	応答詞	87
5.	日本語との比較対照	89
5.1.	日本語の助動詞「だ」	89
5.2.	日本語の終助詞「よ」	90
5.3.	日本語の終助詞「ね」	91
5.4.	日本語の終助詞の連辞	92
6.	文法化	93
6.1.	Traugott(1982, 1988, 1989, 1993, 1995, 1999)	93
6.2.	sich	94
6.3.	bekommen-Passiv	97
6.4.	doch の文法化	99
6.5.	その他の語彙の文法化	101
7.	結論	103
	参考文献	109

0. はじめに

近年、コミュニケーション学の発達により、ドイツ語学においても「心態詞¹」研究が盛んとなってきた²。その萌芽となったのは Weydt(1969)であり、この中で *Abtönungspartikel* という語が初めて用いられた。以後、ドイツではもちろんのこと、日本においてもこの心態詞³という不変化詞のカテゴリーに注目が寄せられた。その例として、ドイツでは Helbig(1990)、Thurmair(1989)、Helbig/Buscha(1991)、Hentschel(1986)など、日本では 岩崎・小野寺(1996)や岩崎(1998)、井口(2000)などが挙げられる。

このように詳細な研究が行われてきたが、その多くは用法についての分類学的視点に立脚したものであり、心態詞というカテゴリーがどのようにして発生したのか、またなぜ心態詞という意味機能が生じたのかという点に関しては、いまだに十分な考察はなされていないように思われる。そこで本論は、従来の分類学的な用法を列挙する方法のみならず、通時的な観点に立ち、心態詞の発生と機能の変遷をたどることを目的とする。

その際、中心に扱われるのは *doch* という語である。この *doch* は接続詞、副詞、心態詞、応答詞という四つの意味機能を持つ語であり、その多機能性は他の不変化詞には類を見ないものである。そこで、*doch* の全容を明らかにすることができれば、多くの不変化詞に通用するメカニズムの一つが解明できると推測し、本論の考察対象とした。

第1章において、現代ドイツ語における *doch* を考察する。不変化詞および心態詞に関する先行研究を観察し、その中で、従来の分類における問題点を指摘する *doch* という語自体が持つ意味機能を観察し、それぞれの機能が基盤となる意味を中心にネットワークをなしていることを論述する。ドイツ語の不変化詞は一つの語が多様な機能を持つことがあるが、その個々の機能には何らかの共通の意味基盤があることを示唆したい。

第2章では、*doch* に関して *Grimm's Wörterbuch* や Kluge(1989)、Behaghel(1924)、Paul(2002)などの記述から古い時代の用例を考察し、歴史的変遷をたどる。

第3章ではドイツ語における *doch* の類似語、すなわち、語源を同じくする *jedoch*、「対立」という意味内容を持つ接続詞・接続副詞という点で類似する *aber*、心態詞以外に応答

¹ Weydt, H. (1969)の術語である *Abtönungspartikel* の訳語である。心態詞とは心的態度を表す不変化詞であり、それ以外の機能を持つという特徴がある。

² 岡本(2013:243)は「語用論研究の進展にともない、心態詞と話し手の心的態度、発話行為、文タイプとの関係の研究がされはじめ、今ではさまざまな言語における談話詞(discourse particle)と比較研究されている」と主張している。

³ 「心態詞」という訳語が誰によって与えられ、いつから用いられているのかは定かではない。

詞としての機能を保持するという点で類似している **ja** を取り扱い、比較を行う。**Jedoch** との比較を通じて、強意形の存在と本来の語の意味機能の変容の可能性について考察する。さらに **aber** と **ja** に関連して、不変化詞のシンタグマについても言及する。不変化詞は他の不変化詞と結合して使用されることがあり、結合した場合の意味機能は単独でのそれとは異なる。例えば、応答詞はどのような不変化詞とどのような語順で結びつくのか⁴、各々の心態詞は結合可能な文タイプとそれぞれの場合にどのような心的態度を表すのかが定まっている。よって、本章では **aber**、**doch**、**ja** を取り上げ、これらが単独で生起する場合と共起する場合の比較を行い、不変化詞が並列して生起する際に、どのような意味機能を果たしているのか、またどのようなメカニズムで単独の場合と異なる意味機能を持ちうるのか、についても考察する。

第4章では同語源を持つ他言語との比較を行う。そこでは英語の **though** や **although**、オランダ語の **toch** を観察する。他言語における心態詞相当物を扱い、各言語の個別的特徴と各言語に通底する一般的特徴について論述する。特にドイツ語と同じ西ゲルマン語派族に所属するオランダ語において、ドイツ語 **doch** と同語源をもつ **toch** を観察し、元来同じ語であったものが、現代においてどのような共通点と相違点を持っているかを、同じ文学テクスト（とその翻訳）を用いて考察する。

第5章では日本語と比較する。助動詞「だ」と終助詞「よ」「ね」の機能について神尾の「情報のなわ張り理論」を用いて説明する。ドイツ語とは系統語族的にも地理的にも全くかけ離れた日本語においては、多くの場合、ドイツ語の心態詞が文中で果たす役割を終助詞や助動詞などが担っていることから、日本語の助動詞「だ」と終助詞「よ」「ね」を取り上げ、ドイツ語の心態詞との比較対照を行う。ドイツ語の **doch**、**aber**、**ja** は不変化詞(**Partikel**)であるが、それは語尾変化や活用がないということから日本語でこのように呼ばれると考えられる。ドイツ語の不変化詞が果たす機能は日本語では終助詞のほか、助動詞によっても表される。とりわけ、助動詞「だ」は断定や強調の機能を持つことから、本章では心態詞との比較の対象とする。

以上の考察を経て第6章では「文法化」における意味変化のメカニズムを観察し、語の意味機能の変容という現象に類型論的、一般言語学的立場から取り組む。

⁴ 例えば **ja doch**、**doch ja**、**aber ja**、**aber doch** などの語順があり、3.5.で論じる。

1. 現代ドイツ語における doch

ドイツ語では、動詞、名詞、形容詞、冠詞、代名詞、数詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞という 10 個の品詞が区別されている⁵。この中で副詞、前置詞、接続詞、間投詞は不変化詞とされ、これらは「品詞中、活用ないし語尾変化をしないものの総称」である⁶。Helbig(1990:19ff.)は、不変化詞という概念は少なくとも以下の意味で用いられると規定している。

Unter den Partikeln werden alle unflektierbaren, d.h. weder konjugierbaren noch deklinierbaren noch komparierbaren Wörter verstanden. Danach würden zu den Partikeln die Konjunktionen, die Präpositionen, die Adverbien, die Modalwörter, einige Negationswörter und die Partikeln im engeren Sinne gehören. Eine solche weite Auffassung der Partikeln (der Umfang des Begriffes „Partikeln“ ist bei dieser Interpretation am größten) basiert auf morphologischen Kriterien der Wortartklassifizierung, schließt hingegen semantische und syntaktische Kriterien weitgehend aus. Ein solches Verständnis der Partikel war in den traditionellen Grammatiken vielfach anzutreffen, findet sich aber auch noch in der Gegenwart (vgl. z.B. KLEINE ENZYKLOPÄDIE, Bd. 2, 1970, 896f.; DUDEN 1973, 62). Wie auf der einen Seite der Begriff „Adverb“ sehr weit gefaßt wird (so daß er die Modalwörter und Partikeln einschließt), so dehnt sich auf der anderen Seite die Bezeichnung „Partikel“ immer mehr aus (so daß sie Konjunktionen, Präpositionen, Adverbien und Modalwörter einschließt).

あらゆる非屈折つまり活用も語形変化も比較変化もしない語群が不変化詞と解釈される。これに従うと、不変化詞には接続詞、前置詞、副詞、話法詞、いくつかの否定詞、狭義の不変化詞が包含される。不変化詞に対するこれほどに幅広い見解は（不変化詞という概念の広がりはこのような解釈においてきわめて重要である）、品詞分類の形態論的基準に基づいており、反対に意味論的また統語論的基準は一般に除外される。不変化詞に対するこのような理解は伝統文法において何度も見いだされたが、現代においてもさらに見受けられる（例えば、„Kleine Enzyklopädie“, 第 2 巻、(1970:896)や

⁵ 浜崎 et al.(2000:5)

⁶ 相良(1990:107f.)

Duden(1973:62)を参照のこと)。一方で副詞という概念が広義に解釈されるように（その結果副詞に話法詞や不変化詞が含まれる）、他方で「不変化詞」という名称もますます拡大していくのである（接続詞・前置詞・副詞・話法詞を含む）。

In einem etwas engeren Sinne werden unter Partikeln nicht alle unflektierbaren Wörter verstanden, sondern nur (a) die Negationspartikeln, (b) die Modalwörter und (c) die „modalen“ bzw. „emotionalexpressiven Partikeln“:

- (a) Er arbeitet *nicht*.
- (b) Er arbeitet *hoffentlich*.
- (c) Er arbeitet *doch*.

Eine solche Gruppierung findet sich z.B. bei ERBEN(1964, 157), der dieser drei Gruppen als „Partikeln“ oder „Satzadverbien“ zusammenfaßt, sie also wortklassenmäßig nicht grundsätzlich von den Adverbien trennt. An anderer Stelle tauchen bei ihm „Rangier-Glieder“ auf (ERBEN, 1964, 265), die verstanden werden als „rangverleihende Partikeln der Hervorhebung oder Einschränkung“ (mit oft „appositiver“ Zuordnung zu Satzgliedern verschiedener Art):

- (d) *Allein* der Arzt konnte hier entscheiden.

狭義的には、全ての非屈折語が不変化詞と解釈されるのではなく、(a)の否定詞、(b)の話法詞、(c)の「話法的な不変化詞」または「感情を表出する不変化詞」のみである。このようなグループ化は、例えば ERBEN(1964, 157)に見られ、彼はこの3つのグループ「不変化詞」あるいは「文副詞」としてまとめており、したがって、それらを品詞的には原則として副詞とは区別していない。別の箇所では（しばしば様々な文成分への「同格的な」分類を伴う）、「強調や限定の仕事を与えられた不変化詞」として理解される「仕分け成分」が挙げられる。(ERBEN, 1964, 265)

In einem noch engeren Sinne werden unter Partikeln nach syntaktischen Kriterien nur solche unflektierbaren Wörter verstanden, die eine eigene Wortklasse darstellen und sich von den Adverbien und Modalwörtern, erst recht von den Präpositionen und Konjunktionen unterscheiden. Danach wären Partikeln solche morphologisch unflektierbaren Wörter, die über keine solchen syntaktischen Funktionen verfügen,

wie sie den Wörtern anderer unflektierbarer Wortklassen (z.B. den Adverbien, Modalwörtern, Präpositionen und Konjunktionen) zukommen (vgl. HELBIG/BUSCHA, 1972, 428ff.; vgl. auch ADMONI, 1972, 207f.).

さらに狭義においては、統語論的基準により、独自の品詞を成し、副詞や話法詞と、さらには当然ながら前置詞や接続詞とは区別されるような非屈折語のみが不変化詞と理解される。それに基づけば、不変化詞は他の非屈折の品詞（例：副詞、話法詞、前置詞、接続詞）の語群に帰属するような、統語的な機能を有さない形態論的に非屈折の語であろう。（HELBIG/BUSCHA(1972:428ff.)、ADMONI(1972:207f.)参照）

Schließlich werden die Partikeln im engsten Sinne verstanden als Restgruppe der unflektierbaren Wörter, die – im Unterschied zu den Interjektionen – keinen Satzwert, – im Unterschied zu den Adverbien – keinen satzgliedwert, – im Unterschied zu den obengenannten „Rangier-Gliedern“ – keinen Satzgliedteilwert und – im Unterschied zu den Präpositionen und Konjunktionen – keinen Fügteilcharakter haben (vgl. HEIDEOPH u.a., 1981, 490f., 683, 688f.). Auf diese Weise werden die Partikeln auf die „Modalpartikeln“ reduziert (die Grad- und Vergleichspartikeln werden aus den Partikeln ausgeschlossen und den Adverbien zugeordnet). Mitunter wird diese Gruppe sogar – mindestens in der Interpretation, wenn nicht auch im Umgang – weiter (vor allem unter stilistisch-kommunikativem Aspekt) eingeschränkt und zu „Würz-“, oder „Färbewörtern“ abgestempelt (vgl. SCHRÖDER, 1965, 31ff.), was nach dem heutigen Erkenntnisstand der Funktion auch dieser eingeschränkten Restgruppe nicht gerecht wird.

最後に、きわめて限定的な意味における不変化詞は、非屈折語の残余のグループとして理解されることがある。これは一問投詞とは異なって一文性がなく、一副詞とは異なって一文枝性がなく、一前述の「仕分け成分」とは異なって一文枝の部分としての価値を持たず、一前置詞や接続詞とは異なって一接続部分としての特徴を持つことはない（HEIDEOPH u.a.(1981:490f., 683, 688f.)参照）。このような方法によれば、不変化詞は「話法の不変化詞」へと限定されていくのである（「とりたて詞」や比較の不変化詞は不変化詞から除外され、副詞に組み込まれる）。時として、このグループはそれどころか、扱いにおいてとまではいかなくても、少なくとも解釈において、一さらに（とりわ

け様式的にコミュニケーション的な観点において) 限定され、「一種の薬味」や「彩り語」であるとされるが、これは機能についての今日の知見に従うと、この制限された残余のグループにも妥当なものではない。

以上の記述をまとめるなら、不変化詞は接続詞、前置詞、副詞、話法詞、一部の否定詞などを包含することもあるが、なかでも「話法の不変化詞」のことを制限的に指し示すこともあると言える。

個々の不変化詞をめぐっては、ドイツにおいては Helbig(1990)、日本においては岩崎(1998)により、詳細な用法研究がなされている。また Duden も不変化詞の意味機能の規定を行っている。まずはそれらをもとに現代ドイツ語における *doch* の機能分類ならびに意味機能を観察していく。

1.1. Duden(1996)における *doch*

Duden(1996:353)において、*doch* は接続詞、副詞、不変化詞の 3 つ機能分類がなされている。以下、例を観察しながらそれぞれの用法を確認する。

- (1) Ich habe mehrmals angerufen, *doch* er war nicht zu Hause. Duden(1996:353)⁷

何度も電話したが、彼は家にいなかった。

- (2) Er sagte es höflich und *doch* bestimmt. Duden(1996:353)

彼は丁寧だが、きっぱりとそう言った。

- (3) Er schwieg, sah er *doch*, dass alle Worte sinnlos waren. Duden(1996:353)

彼は黙っていたが、あらゆる言葉が無意味であるということをわかっていたからだ。

- (4) „Das stimmt nicht!“ – „*Doch!*“ Duden(1996:353)

「そうじゃない！」 – 「いや、そうだ!」

⁷ (1)から(9)の訳は筆者による。またこれ以後、例文中の斜体は特記のない限り、筆者による。

(5) Er blieb dann *doch* zu Hause. Duden(1996:353)

彼はそのときやっぱり家にいたのだ。

(6) Komm *doch* mal her! Duden(1996:353)

ちょっとこっちへおいでよ！

(7) Du musst *doch* immer zu spät kommen! Duden(1996:353)

君はいつも遅れて来ずにはいられないな！

(8) Du betrügst mich *doch* nicht? Duden(1996:353)

君は僕をだまさないよね？

(9) Wie heißt er *doch* gleich? Duden(1996:353)

彼の名前はなんだっけ？

Duden(1996:353)は接続詞の *doch* としては(1)を挙げ、*aber* に類似していると指摘している。この場合の *doch* は文頭に置かれ、文肢性はない。副詞の *doch* は 4 つの用法に分類される。第一のものは(2)のように常にアクセントがあり、*dennoch* と意味的に類似するものである。第二は(3)のように先行する動詞を倒置し、根拠づけをする発話を接続するもので、*doch* にアクセントは置かれない。第三は常にアクセントがあり、否定的に表現される発話あるいは否定疑問文への対立的応答である。これは肯定を導く疑問文における *ja* に対応するものであり、*nein* と意味的に対立する応答で例として(4)が挙げられている。第四は強いアクセントをもつもので、推測を正しいと認めたり、話し手がさしあたりありえると思っていない状況に注意を向けさせたりするもので、(5)がその例である。

次に不変化詞としての *doch* が区分されている。この *doch* はアクセントがなく、4 つの用法に分けられる。第一は疑問、発話、勧誘あるいは願望に対して一種の強調を与えるもので、(6)がこれに該当する。第二は(7)のように感嘆文において憤慨、不満、驚きを表現するものである。第三は疑問文で話し手が同意を求める気持ちを表現するもので、(8)がこれに当たる。第四は(9)に見られるように、話し手は本来知っているはずなのだが、その時に思い出せないことについて尋ねようとする疑問文で現れ、*noch* と類似する意味を持つもので

ある。

以上が Duden(1996)による doch の分類であるが、その中で応答機能は接続副詞とともに副詞に包含され、心態詞機能は不変化詞に含まれている。

また、旧版の Duden(1988:198)でも、doch は接続詞、副詞、会話の不変化詞という 3 つの機能が区別され、なかでも副詞は、接続副詞と応答詞としての役割があるとして、以下のような解説を加えている。

① 接続詞。Aber の意味。

② 副詞

[1]常にアクセントを持って、dennoch の意味を持つ。

[2]アクセントを持たず、先行する動詞形式の倒置を伴って、理由を述べる発話を接続する。

[3]常にアクセントを持って、否定的に表現された発話や疑問に対して反論する返事として用いられる。

[4]強いアクセントを持って、tatsächlich の意味を持つ。。

③会話の不変化詞。アクセントを持たない。

[1]質問や発話に対して特定の強調を与える。

[2]感嘆文において、憤慨、不満、驚きを表現する。

[3]疑問文において、話し手が同意を求めていることを表現したり、話し手が知人に、ちょうど思い出せないことを尋ねたりしていることを表現する。

以上のように Duden では doch の品詞として接続詞、副詞、不変化詞の 3 種類が区別され、意味機能として接続機能、応答詞機能、心態詞機能の 3 種類があるとされている。一方、井口(2000:120)では(4)に見られるような応答機能は応答詞、(5)から(9)に見られるような心態詞機能は心態詞として、個別のカテゴリーが用いられ、意味機能による分別がなされることが場合もある。

本論では、以上の Duden(1988)と Duden(1996)、井口(2000)に基づき、以下の 4 つの分類を行う。

1. 接続詞

(10) Ich wartete lange, *doch* er kam nicht.

私は長く待っていたのだが、彼は来なかった。

2. 接続副詞

(11) Ich wartete lange, *doch* kam er nicht.

私は長く待っていたのだが、彼は来なかった。

3. 応答詞

(12) Hast du kein Geld bei dir? – *Doch*.

君はお金の持ち合わせがないのか? – いや、あるよ。

4. 心態詞

(13) Es stimmt *doch*, dass Schafe Stauden fressen?

羊がチシャナを食べるというのは本当かい?

(10)は「逆接の並列接続詞」である。文頭に置かれ、文肢性は認められない。(11)は「逆接の接続副詞」であり、(10)とは異なって文肢性がある。(12)は「応答詞」で、それ自体が文の役割を果たしているので文肢性がある。(13)は「心態詞」で文肢性はなく、アクセントも基本的には置かれない。

岩崎(1998: 287-304)はさらに詳細に用法をまとめており、以下、それを参考に *doch* の意味機能を観察し、そこに見られる共通点を考察する。その際、素材として『グリム童話』(„*Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*“)を用いる。この童話は家庭において大人が子供に読み聞かせをすることを念頭にまとめられており、比較的話し言葉に近い形での表現が多いと推測される。よって、心態詞の用例を確認する素材として相応しいと考え、採用することとした。

1.2. 接続詞・接続副詞としての *doch*

まずは接続機能を果たすものとして、接続詞と接続副詞の例を観察する。

(14) Als sie nun ans Land kamen, da geschah es, wie die Rabe vorher gesagt hatte,

und es sprengte ein prächtiger fuchsroter Gaul daher. »Wohlan«, sprach der König, »der soll mich in mein Schloß tragen«, und wollte sich aufsetzen, *doch* der treue Johannes kam ihm zuvor, schwang sich schnell darauf, zog das Gewehr aus den Halftern und schoß den Gaul nieder. Grimm(B.1, S.70, Z.7)

さて、陸に着くと、カラスが言ったようになりました。見事な、きつね色の馬が走ってきました。「よし、これで城まで運んでもらおう」と、王様は乗ろうとしましたが、忠実なヨハネスが先回りして、素早く飛び乗り、鞍の鞆から鉄砲を引き出して、馬を打ち倒しました⁸。

- (15) In der folgenden Nacht kamen die Teufel und fingen ihr Spiel aufs Neue an; sie fielen über den Königssohn her und schlugen ihn viel härter als in der vorigen Nacht, daß sein Leib voll Wunden war. *Doch* da er alles still ertrug, mußten sie von ihm lassen, und als die Morgenröte anbrach, erschien die Jungfrau und heilte ihn mit dem Lenenswasser. Grimm(B.2, S.289, Z.32)

次の夜、悪魔どもはやって来て、また勝負事を始め、王子に襲いかかり、前の晩よりずっとひどく王子をぶったので、彼の身体は傷だらけになりました。それでも王子は一切構わず黙って我慢していたので、悪魔どもは出ていくほかありませんでした。東の空が赤くなりだすと、乙女が現れて、命の水で王子の傷を治してくれました。

(14)の *doch* はその後に主語、動詞が続き、語順に影響を与えていないことから、逆接の意味を持つ並列接続詞⁹である。(15)も *doch* の後に *da* という副詞、定動詞が続いており、語順に影響を与えていないため、同様の例である。

次に接続副詞として機能する副詞の例を観察する。まずは単独で生起する *doch* の例文を挙げる。

⁸ 『グリム童話』の翻訳は矢崎 et al.(1997)を利用した。

⁹ ドイツ語では主文と主文をつなぐ並列接続詞 (*koordinierende Konjunktion*)は動詞の位置に影響を与えないが、主文と副文をつなぐ従属接続詞 (*subordinierende Konjunktion*) は定動詞を後置する。

(16) Der König erschrak, als er hörte, daß er seine Liebsten Kinder selbst töten sollte, *doch* dachte er an die große Treue, und daß der getreue Johannes für ihn gestorben war, zog sein Schwert und hieb mit eigener Hand den Kindern den Kopf ab. Grimm(B.1, S.72, Z.10)

王様は、何よりもかわいがっている子供を、自分で殺さなければならないということを聞くと、ぎょっとしました。けれど、ヨハネスの大きな忠義ぶりを思い出し、忠実なヨハネスが、自分のために死んだことを考え、剣を抜いて、自分の手で子供達の首を切りました。

(17) Da ward das Gold heraufgebracht und die Hochzeit gefeiert, aber der junge König, so lieb er seine Gemahlin hatte und so vernügt er war, sagte *doch* immer: »wenn mir nur gruselte, wenn mir nur gruselte.« Das verdroß sie endlich. Grimm(B.1, S.60, Z.25)

そこへ、金が運び上げられてきて、結婚式が祝われました。若い王様は、后をたいそう愛し、至って楽しそうでしたけれど、あいかわらず、「ぞっとしさえしたら、ぞっとしさえしたら」と言っていました。それで、しまいには、后は、嫌気が差しました。

(16)では *doch* は動詞の前の第一位を占めており、文肢(Satzglied)と見なすことが可能であるので、接続副詞である。(17)では *doch* はアクセントを持ったまま文中に置かれているので、この場合の *doch* にも文肢性があり、接続副詞として機能している。また接続詞の場合と同様に逆接の意味を持っている。

続いて、他の接続詞や副詞と共起する場合を観察する。まずは *aber* との共起関係を挙げる。

(18) Es wußte lange Zeit nicht einmal, daß es Geschwister gehabt hatte; denn die Eltern hüteten sich, ihrer zu erwähnen, bis es eines Tags von ungefähr die Leute von sich sprechen hörte, das Mädchen wäre wohl schön, *aber doch* eigentlich schuld an dem Unglück seiner sieben Brüder. Grimm(B.1, S.174, Z.13)

女の子は長い間、自分に兄弟のあることを、ちっとも知りませんでした。両親が、

男の子達のことを言わないように、気をつけていたからです。けれども、ある日、ふとしたことで、「あの女の子は、なるほどきれいだけれど、七人の兄さん達を不幸にしたのは、あのこのせいだからな」と、人が話しているのを聞きました。

- (19) Der alte Schneider wollte nicht recht trauen, brachte *aber doch* die Verwandten zusammen. Grimm(B.1, S.228, Z.16)

年寄りの仕立て屋は、ほんとに信じようとしませんでしたが、それでも親類を集めました。

- (20) Da zogen sie alle drei miteinander aus, und wie sie vor das Dorf kamen, sagten die zwei zu dem albernen Hans: »du kannst nur hier bleiben, du kriegst den Lebtage keinen Gaul.« Hans *aberging doch* mit, und als es Nacht war, kamen sie an eine Höhle, da hinein legten sie sich schlafen. Grimm(B.2, S.212, Z.8)

さて、三人それって一緒に出かけました。村はずれに來ると、二人は馬鹿なハンスに向かって言いました。「お前は、ここに残っている方がいいぜ。お前は一生かかっても、馬の一頭だってもらえやしないよ。」しかし、それでもなお、ハンスは一緒に行きました。夜になると、三人は洞穴のそばに來ました。三人は中に入り、横になって寝ました。

- (21) Sie empfing den König, als wenn sie ihn erwartet hätte, und er sah wohl, daß sie sehr schön war, *aber* sie gefiel ihm *doch* nicht, und er konnte sie ohne heimliches Grausen nicht ansehen. Grimm(B.1, S.280, Z.20)

娘は、待ちかまえてでもいたように、王様を迎えました。見ると、なるほどたいそうきれいな娘でしたが、王様は、人知れず、ぞっと身震いせずにはいられませんでした。

- (22) Da bat ihn die Braut, was sie konnte, und sprach: »er ist einmal mein Mann, und ich habe ihn von Herzen lieb«, bis er sich endlich besänftigen ließ. *Doch aber* kam's ihm nich aus den Gedanken, so daß er am adnern Morgen früh aufstand und seiner Tochter Mann sehn wollte, ob er ein gemeiner und verlumpter Bettler

wäre. Grimm(B.2, S.107, Z.6)

花嫁は一生懸命に頼んで、言いました。「あの人は私の夫です。私は心からあの人を愛しています」と言ったので、最後には父親は心を和らげました。しかし、そのことを忘れてしまったわけではなかったので、あくる朝、早くおきて、娘の夫がぼろを着た卑しい男かどうか、見ようと思いました。

上記の例のように、**doch** は同じく「逆接」の意味を持つ接続詞・接続副詞である **aber** と共起することが可能である。(18)と(19)は **aber doch** という語順で隣接しており、(18)では両者が文頭に、(19)では中域に出現している。他方、(20)と(21)では、**doch** は **aber** と並立してはいない。この場合、いずれも **aber** は動詞の前の位置を占め、**doch** は中域に置かれている。ちなみに **aber** と **doch** が中域で隣接せずに共起する用例は見られなかった。また(22)のように、周辺的な現象であると思われるが一般的な語順である **aber** (…)**doch** という語順とは逆の **doch aber** というシンタグマも確認された。

次に **und** との共起について観察する。

(23) Da er aber sein Handwerk von Grund aus gelernt hatte, so dauerte es nicht lange, er ward gerühmt, und jeder wollte seinen neuen Rock von dem kleinen Schneider gemacht haben. Alle Tage nahm sein Ansehen zu. »Ich kann in meiner Kunst nicht weiter kommen«, sprach er, »*und doch* geht's jeden Tag besser.« Grimm(B.2, S.222, Z.28)

彼は仕立屋の仕事をみっちり身につけていたので、いくらも経たないうちに、名が知れて、誰もかれも新しい服をちびの仕立屋に作ってもらいたがりました。日ごとに評判が高まりました。「俺の腕はもう上がらないんだが、毎日よくなっていくわい」と、彼は言いました。

(24) Und weil es schön war, hatte der Jäger Mitleiden und sprach: »so lauf hin, du armes Kind. – Die wilden Tiere werden dich bald gefressen haben«, dachte er, *und doch* war's ihm, als wär' ein Stein von seinem Herzen gewälzt, weil er es nicht zu töten brauchte. Grimm(B.1, S.302, Z34)

姫があまりに美しかったので、狩人は哀れに思って、言いました。「じゃ、走って逃

げなさい。かわいそうに。』『おそろしい獣が、すぐお前を食べてしまうだろう』と、狩人は考えました。しかし、姫を殺さずにすんだので、心の重荷がとれたような気持ちでした。

(25) Da hieß es aufpassen, daß er nicht zwischen die Zähne kam und zermalmt ward, und hernach mußte er *doch* mit in den Magen hinabrutschen. Grimm(B.1, S.233, Z.32)

それで、歯の間にはさまれて、もみ潰されないように、気をつけなければなりませんでした。が、それから彼は胃袋の中に滑り落ちていくことになりました。

(26) Sie weinte die ganze Nacht und rief: »ich habe dich erlöst aus dem wilden Wald und aus einem eisernen Ofen, ich habe dich gesucht und bin gegangen über einen gläsernen Berg, über drei schneidende Schwerter und über ein großes Wasser, ehe ich dich gefunden habe, *und* willst mich *doch* nicht hören.« Grimm(B.2, S.320, Z.34)

彼女は一晩中泣きあかし、「私はあなたを、おそろしい森と鉄のストーブの中から救い出しました。私はあなたを捜して、ガラスの山を、鋭い三本の剣を、大きな川を越えて、やっとあなたを見つけました。それでも、私の言うことをきいて下さいませんか」と大声で言いました。

(23)と(24)は *und* と *doch* が隣接して共起している。これらの文では *und doch* のシンタグラマが文の第一位を占めており、動詞より前の領域に *und doch* 以外の文成分は置かれていない。また(25)と(26)は両者が距離をもって出現している。ここでも *aber* (…)*doch* の非直接的な連辞の場合と同様、*und* が中域に含まれるものを見い出すことはできなかった。さらに *doch* (…)*und* という語順での配列パターンも今回の調査では確認することはできなかった。

岩崎(2013)は「*und doch* は *doch* に強いアクセントを置くことによって、先行する発話との違いを強調している」¹⁰と主張している。また「*und doch* は単なる「しかし」よりは、そ

¹⁰ 岩崎(2013:1632)

れでも」という感じではないだろうか」¹¹とも述べている。

最後に(wenn) auch / obgleich / wiewohl …, (so) doch …という形で現れる doch も観察する。いわゆる譲歩文のタイプである。

(27) Nun war es eine Zeitlang bei der Frau Holle, da ward es traurig und wußte anfangs selbst nicht, was ihm fehlte, endlich merkte es, daß es Heimweh war; ob es ihm hier *gleich* viel tausendmal besser ging als zu Haus, so hatte es *doch* ein Verlangen dahin. Grimm(B.1, S.169, Z.30)

さて、しばらくの間、ホレおばさんのところにいると、娘は恋しくなりました。はじめのうちは、どうしたことか、自分でも分かりませんでした、しまいには、うちが恋しくなったのだ、ということが分かりました。ここの方が、うちより何千倍も良かったのですけれど、やっぱりうちへ帰りたくなりました。

(28) Das Vöglein anderes Tages wollte aus Anstiftung nicht mehr ins Holz, sprechend, es wäre lang genug Knecht gewesen und hätte gleichsam ihr Narr sein müssen; sie sollten einmal umwechseln und es auf eine andere Weise auch versuchen. Und *wiewohl* die Maus und auch die Bratwurst heftig dafür bat, so war der Vogel *doch* Meister: es mußte gewagt sein, spielten derowegen, und kam das Los auf die Bratwurst, die mußte Holz tragen; Grimm(B.1, S.167, Z.3)

あくる日、小鳥は、そそのかされたので、自分は今さんざん下男を務めた、ひとつ取りかえてみてもいいじゃないか、やり方を変えてみよう、といって森に行こうとしました。はつかねずみと、焼きソーセージがどんなに強く頼んでも、小鳥にかないませんでした。やってみなくちゃ、と言うので、くじを引きました。くじは焼きソーセージに当たったので、薪運びをさせられました。

(27)と(28)に見られるように doch は(wenn) auch / obgleich / wiewohl …, (so) doch …などの形で先行する譲歩の副文と呼応することもある。この場合は、譲歩で表される条件に対

¹¹ 岩崎(2013:1646)

する対立を表現していると推測される。

1.3. 応答詞としての doch

応答詞は「応答の不変化詞」(Antwortpartikel)と呼ばれ、一語で文に相当することが可能である。応答詞 ja と doch の比較、応答詞の連辞については第 3 章にて詳述するので、ここでは単独の応答詞の機能について確認するにとどめておく。

ドイツ語において決定疑問文に対する肯定あるいは否定の返答として用いられるのは、ja、nein、doch の三種類である。

(29) Haben Sie Durst? – *Ja*, ich habe großen Durst. 岩崎(1994:338)

あなたはのどがかわいていますか?—ええ、とてもかわいています。

(30) Haben Sie Kinder? – *Nein*, ich habe keine Kinder. 岩崎(1994: 403)

お子さんはおありですか?—いいえ、子供はおりません。

(31) Haben Sie keinen Hunger? – *Doch*, ich habe Hunger. 岩崎(1994:180)

おなかはすいていませんか?—いいえ、すいています。

(32) Haben Sie keine Kinder? – *Nein*, ich habe keine Kinder. 岩崎(1994:403)

お子さんはおありにならないのですか?—ええ、子供はおりません。

(29)のように ja は肯定疑問文に対する肯定の応答詞として使用され、nein は(30)と(32)のように肯定疑問文に対する否定の応答詞、否定疑問文に対する否定の応答詞の両方として用いられる。それに対して doch は(31)に見られるように、否定疑問文に対する肯定の応答詞として用いられる。つまり、doch は先行文中の否定に対する「対立」を示し、そのことによって強い肯定を表出するのである。また応答詞というのはそれ一語で文の代わりを果たすことが可能であることから、決定疑問文に対する「肯定」の役割は明確で、アクセントを持って発音される。

ちなみに、英語では yes が、オランダ語では ja が肯定疑問文と否定疑問文の両方の肯定の答えとして用いられるが、フランス語ではドイツ語の ja と doch の場合と同様に、oui と

si の二種が見られる。

(33) Do you know him? – *Yes*, I do.

彼を知っていますか？－はい、知っています。

(34) Don't you know him? – *Yes*, I do.

彼を知らないのですか？－いいえ、知っています。

(35) Heeft hij een boek? – *Ja*, hij heeft een boek.

彼は本を持っていますか？－はい、彼は本を持っています。

クレインス et al.(2005:35)

(36) Ga je niet? – *Ja*, ik ga.

君はいかないの？－いや、行くよ。

(37) Avez-vous bien dormi? – *Oui*.

よく眠れましたか。－はい。 天羽(2003:1072)

(38) Avez-vous des frères? – *Non*, je n'en ai pas.

兄弟はありますか？－いいえ、ありません。 天羽(2003: 1028)

(39) Tu ne fumes pas? – *Si*, mais j'ai mal à la gorge.

たばこ吸わないの？－いや、吸うけど、のどが痛いので。 天羽(2003:1443)

(40) Vous ne fumez pas? – *Non*, je ne fume pas.

たばこは吸いませんか？－ええ、吸いません。 天羽(2003:1028)

フランス語においても、ドイツ語と同じように肯定疑問文への肯定は(37)のように *oui* を用い、否定疑問文への肯定は *si* が(39)のように用いられ、肯定疑問文、否定疑問文のいずれに対する否定も(38)や(40)のように *non* で表される。ドイツ語の応答詞が系統的に近しい英

語とオランダ語ではなく、語派の異なるフランス語と類似する点があることは、地域類型論 (areale Typologie) の観点からも興味深い。

1.4. 心 態 詞 と し て の doch

「心 態 詞」という用語の原語である *Abtönungspartikel* は Weydt(1969)によって初めて用いられた術語である。その語の成り立ちを見れば自明であるように、本来、ニュアンスを与える不変化詞という意味である。Weydt(1969:68)は心 態 詞 を 以 下 の よ う に 規 定 し て い る。

Abtönungspartikel sind unflektierbare Wörtchen, die dazu dienen, die Stellung des Sprechers zum Gesagten zu kennzeichnen. Diese Wörtchen können in gleicher Bedeutung nicht die Antwort auf eine Frage bilden und nicht die erste Stelle im Satz einnehmen. Sie beziehen sich auf den ganzen Satz; sie sind im Satz integriert. In anderer syntaktischer Stellung oder anders akzentuiert haben sie alle eine oder mehrere andere Bedeutung. In dieser anderen Verwendung gehören sie dann anderen Funktionsklassen an.

心 態 詞 は、発話に対する話し手の態度を明らかにするために用いられる語形変化しない語群のことである。このような語群は疑問に対する返答を作ったり、文の第一位を占めたりすることはできない。心 態 詞 は 文 全 体 に 関 連 し、文 に 統 合 さ れ る。他 の 統 語 的 位 置 あ る い は ア ク セ ン ト を 置 か れ た 場 合 は、ど れ も 別 の 意 味 を 持 つ こ と に な る。こ の 異 な る 使 用 の 際 に は、そ れ ら は 他 の 機 能 分 類 に 属 す る。

つまり、心 態 詞 は ア ク セ ン ト を 持 た ず、文 の 中 域 に 現 れ、話 し 手 の 感 情 の マー カ ー と な る も の で あ る。命 題 内 容 に 直 接 作 用 す る こ と は な い が、心 態 詞 の 有 無 に よ っ て、コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 中 に 受 け る 印 象 に 相 違 が 生 じ る。ま た ヘ ン チ ェ ル / ヴ ァ イ ト (1996:293) は 「心 態 詞 は つ ね に、心 態 詞 と し て の 機 能 以 外 の 機 能 を ま ず 第 一 に 持 つ 語 の 特 別 な 用 法 の こ と で あ り、こ の こ と に よ っ て 心 態 詞 と い う ク ラ ス は ほ か の 品 詞 か ら 区 別 さ れ る の で あ る。」 と 述 べ て い る。ド イ ツ 語 に お い て 心 態 詞 と み な さ れ る 語 は、さ ら に 接 続 詞 や 接 続 副 詞、応 答 詞、副 詞 な ど と し て の 機 能 が 見 ら れ る。心 態 詞 は こ れ ら の 機 能 が 意 味 漂 白 な ど の 文 法 化 を 経 て、現 在 の 心 態 詞 機 能 を 持 つ こ と が で き た と い う 可 能 性 が 示 唆 さ れ て い る の で あ る。

これまで、心 態 詞 に 関 す る 研 究 は、ド イ ツ 国 内 は も ち ろ ん の こ と、日 本 に お い て も 豊 富 に

行われてきた。日本のドイツ語学においては、各々の心態詞の用法が詳細に論じられたり、ドイツ語の心態詞とそれの日本語における対応語について、対照言語学的な考察¹²がなされたりしている。本節では多種多様な副詞に関して詳細な記述を行い、多くの用法を持つ *doch* に関してもその機能を細かく分類している岩崎(1998)をもとに例文を観察する。その際、元来の意味が心態詞としての意味機能にも何らかの影響を与えている点に留意しながら、文タイプと *doch* の意味機能の関連という観点から、例を観察していく。

それぞれの心態詞は、生起する文タイプが決まっており、*doch* は以下の場合で許容される。まずは平叙文を観察する。

- (41) »Davon«, sprach er, »ist ein Teil den Armen, der andere dem König, der dritte dein.« Indem schlug es zwölf, und der Geist verschwand, also daß der Junge im Finstern stand. »Ich werde mir *doch* heraushelfen können«, sprach er, tappte herum, fand den Weg in die Kammer und schlief dort bei seinem Feuer ein. Grimm(B.1, S.60, Z.12)

「このうち、一つは、貧しいものたちのもので、もう一つは王様のもので、三つ目はお前のものだ」と言いました。十二時が打つと、幽霊は消えて、少年は暗闇に立っていました。「どこから出られるだろう」と、少年は言い、手探りして、部屋へ行く道を見つけ、そこで火に当たって眠り込みました。

(41)において *doch* は話し手の不安な気持ちを表している。「出られる」という前提があるものの、「出られないかもしれない」という反対の気持ちが脳裏をかすめ、それを打ち消して「やはり出られるだろう」という心の迷いのようなものである。平叙文で用いられる心態詞 *doch* は「先行する発話や場面に対して、話し手の反論あるいは抗弁しようとする気持ち、また怪訝・不満・不快・釈然としない気持ち」を表出することが可能である¹³。

次に決定疑問文に関しても言及する。*Doch* は動詞が文の第一位を占める決定疑問文には用いられず、岩崎(1998)にもそのような例文は挙げられていない。„*Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*“においても決定疑問文による用例は

¹² 例えば幸田(1985)などが挙げられる。

¹³ 心態詞 *doch* が表出する話し手の感情の文タイプ別による相違は、岩崎(1998)を参照した。

見いだされなかった。

一方、平叙文と同じ語順で疑問文を形成する確認疑問文においては、*doch* は生起することが可能である。

(42) Sie kam herzu, ging aber zu nahe ans Feuer stehn, daß ihre alten Lumpen anfangen zu brennen, und sie ward's nicht gewahr. Der Junge stand und sah das, er hätt's *doch* löschen sollen? Grimm(B.3, S.69, Z.1)

おばあさんはやってきましたが、あまり火の近くに立ったので、古いぼろ服が燃え出しました。おばあさんはそれに気づきませんでした。男の子は立って、それを見ていました。火を消すのが当然でしたでしょう。

確認疑問文では、相手の肯定の返事を期待する話し手の気持ちを反映されている。すなわち、自分の考えに対する同意を求めていると換言することも可能である(42)の *doch* がこれに該当する。

疑問詞を用いる補足疑問文では以下のような例文が挙げられる。

(43) Wohin gehst du *doch*?

どこへ行くんだっけ?

補足疑問文で用いられる *doch* は、その時点で失念した事柄に関して、「自分はたしかに知っていたはずなのに」という、話し手の気持ちを反映しており、自問自答する場合にも用いられる。

続いて要求文を観察する。

(44) »sag' Sie mir *doch*, Frau Gothel, wie kommt es nur, Sie wird viel schwerer heraufzuziehen als der junge Königssohn, der ist in einem Augenblick bei mir.« Grimm(B.1, S.101, Z. 30)

「ゴテルおばさん、若い王子様より、あなたを引き上げる方がずっと重いのは、いったいどういうわけだか、教えて下さい。王子様は、あっという間に、私のそばに、いらっしゃるのに」

要求文においては *doch* により、話し手の要求の実現が強く求められている。話し手の要求が実現していない現状と、要求が実現されるべきという話し手の想定の間を対立を通じて、要求が強調されていると考えられる。

さらに願望文の例を示す。

(45) »Gottes Wunder!« rief er aus, »so ein kleines Tier hat so eine grausam mächtige Stimme! Wenn's *doch* mein wäre! Wer ihm doch Salz auf den Schwanz streuen könnte!« Grimm(B.2, S.238, Z.6)

「大したものだ！」と、彼は叫びました。「あんな小さい生き物があんなに途方もなく高い声を出している！あれが俺のものだったら！あれを捕まえることが出来たら！

接続法Ⅱ式を用いた条件文形式の願望文に用いられる *doch* は、実現の見込みのない、あるいは少ない事柄に関して、話し手の愚痴に似た気持ちを反映している。つまり、ここでは想定内容と現実の乖離あるいは対立が表出されていると言える。
最後に感嘆文の例である。

(46) »Ach, Brüderschen im tiefen See,
wie tut mir *doch* mein Herz so weh!
Der Koch, der wetzt das Messer,
Will mir mein Herz durchstechen.« Grimm(B.3, S.48, Z.12)

「ああ、深い池の中のお兄ちゃん、
私の胸の切ないこと！
お料理番が包丁を研いでいるの。
私の胸を突き刺そうっていうの。」

Doch は様々な形式の感嘆文に用いられ、話し手の驚き・驚嘆・賛嘆、場合によっては不快・怒りなどのさまざまな気持ちを反映することが可能である。

以上のように、*doch* は平叙文、確認疑問文、補足疑問文、要求文、願望文、感嘆文に生

起することが可能であった。これらに共通するのは、話し手の中にある想定や前提と現実の間にある乖離・対立が看取されるという点である。すなわち、これらには **doch** という語の持つ「対立性」(Adversativität)が通底しているということである。

2. doch の歴史的観察

本章では“*Deutsches Wörterbuch herausgegeben von Brüder Grimm*”による doch の記述を中心に扱う。

そもそも現代ドイツ語の doch はゴート語¹⁴の þauh、古高ドイツ語¹⁵の thoh、thō、doh、中高ドイツ語の doch を由来に持つ単語である。古インド語では tú、tū に母音交替している þau (doch、nun、aber の意味)と、ラテン語の接語的不変化詞 que に相当する-uh、-u (und の意味)から成り立っていると推測されている¹⁶。

古いドイツ語における doch (とその元の語) の用法については Hentschel(1986)が詳述している。まずはその内容を確認し、doch の意味機能の変遷を見ていきたい。

2.1. Hentschel(1986)

Hentschel(1986)は ja、doch、halt、eben の機能に関して通時的な観点から考察している。Doch の意味機能の変容については(表 1)に概観されている。

本節では Hentschel(1986)に基づき、さらに doch の時代別の用法を観察していく。

まず、ゴート語の thau については以下のような機能があるという¹⁷。

比較を表すギリシャ語¹⁸の e の再現 (als に相当)

比較表現のための原級の後 (swa - thau で用いられ、so - wie に相当)

疑問文で二者択一の二つ目の成分を並べるため (oder に相当)

一つ目の要素が欠けた省略的な二者択一疑問文で

¹⁴ ヴァンダル語、ブルグンド語とともに消滅した東ゲルマン語の一つである。西ゴートの司祭ヴルフィラ (Wulfila, 311-382?) による聖書のゴート語訳が文献として残っている。ロックウッド (1998: 48) によれば、16 世紀にクリミア半島のある地域でゴート語と感ぜられる語彙が収集されたという。

¹⁵ 本稿でのドイツ語の歴史的区分は相良(1992:8f.)に従って、古高ドイツ語 750-1050 年、中高ドイツ語 1050-1500 年、新高ドイツ語 1500 年以降と規定しておく。

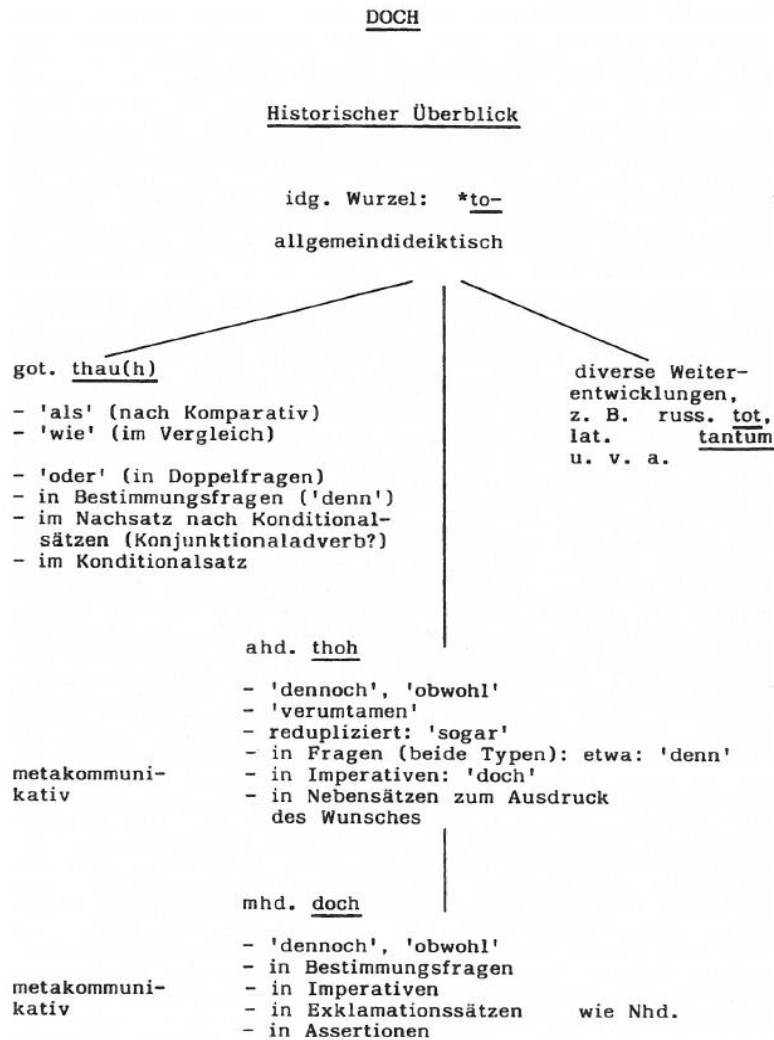
¹⁶ 多くの言語と同様に、ドイツ語においても語源を確定するのは容易なことではない。Paul (2002: 226)、Kluge (1989: 148) の両方に上記のような記述があるが、Kluge (ebd.) は「古インド語の tú は今では二人称単数代名詞に帰するとされており、これが正しければ、doch との関連は放棄されるべきである」と述べている。

¹⁷ Hentschel(1986:71)参照。

¹⁸ ゴート語の聖書がギリシャ語から翻訳される時に、ギリシャ語の比較不変化詞 e がゴート語では thau で表された。

表 1 「doch の機能の通時的発展」 (Hentsche(1986:119))

- 119 -



Tab. 4

また denn の意味でニュアンスを与える機能を持つとされ、次のように説明されている¹⁹。

Der Gebrauch von thau ist also mit an Sicherheit grenzender Wahrscheinlichkeit “original“ gotisch und wurde nicht durch die Wortwahl der Übersetzungsvorlage,

¹⁹ Hentschel(1986:72)

sondern durch den hohen Grad an Rhetorik, den diese Textstelle beinhaltet, ausgelöst.

つまり *thau* のこの用法はほぼ確実に「オリジナル」のゴート語であり、ギリシャ語のことばの選択ではなく、このテキスト箇所が含んでいる高いレベルの修辞によって引き起こされたものである。

また条件文の後続文において用いられるとされ、以下のようにまとめられている。

Das gotische *thau* war somit zum einen in einer Funktion gebräuchlich, die als metakommunikativ bezeichnet werden muß, und bildete zum anderen einen wohlintegrierten und ausgesprochen polyfunktionalen Bestandteil dieser ostgermanischen Sprache – ganz ähnlich, wie dies in Bezug auf das Neuhochdeutsche bei der Partikel *doch* der Fall ist.

それゆえにゴート語の *thau* は、一方ではメタコミュニケーション的と呼ばれるべき機能においてよく用いられ、他方ではこの東ゲルマン語の十分に統合され、きわめて多機能な構成要素を形成したのである。－新高ドイツ語での不変化詞 *doch* の場合ときわめて類似している。

Hentschel(1986:73)はこのように述べ、ゴート語の時点ですでに心態詞のようなメタコミュニケーション的な機能が見いだされると主張している。

続いて古高ドイツ語の *thoh* には、ラテン語の *verumtamen* の意味、新高ドイツ語の *dennoch* や *doch(wahrlich)* の意味²⁰、*entweder - oder* や *selbt*、*sogar* といった意味²¹を認めている。願望文や目的文、命令文にも用いられ、やはりすでに心態詞としての機能があったとして、Hentschel(1986:98)は次のように述べている。

Demgegenüber ließen sich sowohl für *ja* als auch für *thoh* eindeutig abtönende Vorkommen nachweisen. Unter den letzteren finden sich sogar solche, die in unveränderter Form bis ins Nhd. erhalten geblieben sind.

²⁰ Hentschel(1986:88)参照。

²¹ Hentschel(1986:90)参照。

それに対して ja と thoh に関してはどちらも明らかに心態詞的な生起事例が認められた。それどころか、後者においては元のままの形で新高ドイツ語まで保たれ続けたものまで見られる。

現代の心態詞と同等な機能が古高ドイツ語時代から存在したという Hentschel の主張はドイツ語不変化詞の発達が相当古代から進んでいた論拠となると考えられる。

続いて中高ドイツ語の用法には以下のようなものがある²²。

逆接の副詞としての doch

疑問文における doch

命令文や願望発話における doch

不定関係文²³における doch

関係文における doch

断定文（主文）における doch

またその意味機能に対しては次のような評価がなされている。

Die Partikel tritt als Konjunktion und Adverb in der Bedeutung ‘dennoch‘ und ‘obwohl‘ auf, in der sie zwar nicht immer wörtlich, stets aber sinngemäß mit nhd. betontem doch übersetzt werden kann. Ferner kann sie – ebenfalls ähnlich oder gleich dem nhd. Gebrauch – in Bestimmungsfragen, Imperativen, Exklamationsätzen und Assertionen beobachtet werden, wobei sie stets einen metakommunikativen Verweis zum Ausdruck bringt. ²⁴

この不変化詞は接続詞と副詞として‘dennoch‘や‘obwohl‘の意味で表れているが、常に文字通りというわけではなく、常に意味を汲んで、新高ドイツ語のアクセントを持った doch で翻訳されうるものである。さらに言うと、これは新高ドイツ語での使われ方と類似あるいは同様であり、決定疑問文、命令文、感嘆文、主張文で観察され、常にメタ

²² Hentschel(1986:110-113)

²³ 古期ドイツ語における人称代名詞を先行詞とする不定関係文のこと。

²⁴ Hentschel(1986:115)参照。

コミュニケーション的な指示を言葉に表現するのである。

つまり、中高ドイツ語の *doch* は新高ドイツ語とほぼ同等の機能をすでに持ち合わせていたとみなすことができる。

Hentschel の主張をまとめると、話し手の心的態度を表す機能としての *doch* はすでにゴット語の時代から存在した。加えて、(図 1) で記されているような、現代ドイツ語には認められないものの古高ドイツ語や中高ドイツ語には存在した逆接接続以外の意味機能が喪失したり、心態詞の *doch* が出現できる文タイプが拡大されたりして、*doch* の文法化が進行していったということである。

2.2. „*DWB*“における *doch*

ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムが編纂した„*Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*“²⁵は、「ドイツの二十世紀の詩人たちにとって尽きることのないことばの泉になっており、ドイツ語の最後の抛り所となっている点で、また深い意味をもっていることを忘れるわけにはいかない」²⁶との絶大な評価を得ている。この辞典は 1838 年に着手されてから 1961 年に最後の第 32 巻が出るまで、123 年を費やした。着手して最初の配本が開始されるまでにも 14 年を費やし、全 16 巻 32 冊を完成するのに 380 回の配本を重ねた。またこの辞書に引用されている数万の書物を記録する別巻が編集され、1966 年から 71 年にかけて 7 分冊、5 回配本で完成している。現在は F までの改訂に取り掛かれており、改訂版の第一回配本は 1964 年に刊行され、現在もなおその作業は続行されている。

この„*DWB*“で扱うドイツ語についてグリムは、『ライプツィヒ一般新聞』²⁷1838 年 241 号 8 月 29 日 2924 ページの„*zum Wörterbuch*“という告知文で以下のように述べている。

„es soll von Luther bis auf Goethe den unendlichen reichthum unserer väterlandischen sprache, den noch niemand übersehen und ermessen hat, in sich begreifen. alle edeln schriftsteller sollen vollständig eingetragen, die übrigen

²⁵ 以下„*DWB*“と省略する。

²⁶ 高橋(1984:298)参照。

²⁷ „*Leipziger allgemeine Zeitung*“の記事は、Jacob Grimm: *Kleinere Schriften* 8, 1. S.542, Z.12. In: Jacob Grimm und Wilhelm Grimm Werke. Forschungsausgabe Abteilung I. Band 8, 1.に掲載されている。

ausgezogen werden; das ergebnis wird überraschend sein. alle wörter mit ihren bedeutungen, alle redensarten und sprichwörter sind aus den quellen zu belegen; die alphabetische ordnung ist hier die angemessenste und bequemste.

これはルターからゲーテに至る、未だ誰も見通すことも推し量ることもない、我々の祖国の言語の尽きることのない豊かさを包含するものである。すべての優秀な作家は完全に取り入れられ、それ以外のものは抜粋されている。その成果は驚くべきものとなるであろう。その意味を備えたすべての語群、あらゆる慣用句や格言はその典拠から裏付けられている。この際、アルファベット順になっていることはきわめて適切で快適なものとなる。

„Deutsch ist demnach nichts als hochdeutsch,---“²⁸

「したがって、ドイツ語は標準ドイツ語のみである…」

これらのことから、グリムは 16 世紀から 19 世紀の高地ドイツ語の語彙を様々な文学作品からアルファベット順に集めることを目的とし、辞典で扱うドイツ語を新高ドイツ語に規定していることがわかる。しかし実際にはそれ以前の作品からも引用されたり、低地ドイツ語の対応語などが挙げられたりもしている。その規模の大きさや非実用性に強い批判が突きつけられたものの、豊富な例文と歴史的叙述が大きな特徴を成す、*„DWB“*を資料として考察を行うことは、現代においても価値があると言えよう。

さて、*„DWB“*における見出し語 *doch* には 355 個の例文が挙げられている²⁹。そこでは以下のように 8 つの用法に分類されている。

- ①はっきりとした対立を指し示したり、対立を抑えたりして。
- ②対立するものに異論を唱えたり、訂正したり、抑えたり、調整したりして。
- ③対立するものへの明確な関係があるわけではないが、一般的には前提とされており、それゆえに *doch* は単に後続する文の強調を含意し、生起しなくても文の意味を乱すことはない。通常、文の中域に現れる。とりわけ非難を含む疑問文によく付加される。感嘆文においても同様に好んで用いられ、命令文においてはしばしば懇願を含むこ

²⁸ Ebd. S.318, Z.47

²⁹ ここでは *doch doch* という重ね型での用例は 1 つとカウントしている。

とがある。

④肯定として用いられ、単独で生起する *doch* は 18 世紀によく用いられ始めた。

強調のために重複されることもある。

⑤上記の④と同時期に、*ja freilich* という表現が用いられるような親密な会話においてのみ、応答詞 *ja* にアクセントを持った *doch* 付加した *ja doch* が用いられ始めた。

⑥*nein* においても同様である。中高ドイツ語の *neinâ* はほぼ *ach nein* と同程度の穏やかさで、単に反対を拒絶するものである。

⑦*nicht doch* は断り、拒絶を表すが、*nein doch* ほどははっきりしていない。

⑧他の先行する不変化詞と結合して。a) *aber doch*、b) *nun doch*、c) *so doch*。

上記の用法を大別するなら、やはり現代と同じく接続機能、応答詞機能、心態詞機能の 3 つの意味機能に分けられる。以下に、それぞれの用法の例を確認する。

(47) *Du magst sagen was du willst, du hast doch unrecht.*³⁰

お前は自分のしたいことを言うのだろうが、やはりそれは間違っているよ。

(48) *Man kann ihn tadeln, doch nicht mit h rte.*

人々は彼を叱責するだろうが、それは非情なものではない。

(49) *Ich habe doch kein bl ttchen meiner collectanee, keine zeichnung, nichts habe ich bei mir.*

私には自分の作品集の一葉も、スケッチもないのだよ。手元に何もないのだ。

(50) *Willst du mit deinen zarten h nden die arbeit thun? Doch, ich will es versuchen.*

君はそこが弱い手で仕事をしようと言うのかい？ ええ、努力してみるつもりよ。

(51) *Ist es nicht der rechte? Ei ja doch!*

それは直角ではないのかい？ ええ、直角ですとも！

³⁰ (47)から(56)の訳は筆者による。

(52) Gib zu, daß du daran schuld bist! – *Nein doch*, ich bin überhaupt nicht schuld.³¹

君にその責任があることを認めろよ。―とんでもない、僕には責任なんかまったく
ないさ。

(53) (die mutter ruft dem kind zu) ‘*nicht doch!* Tritt nicht auf die blumen.’

(母親が子供に対して)「だめよ！花のところにはいらないで。」

(54) Ich glaub dasz dirs ein ernst sei, *aber doch*, wenn jemand so oder so vil gelts
brächt, so wurd sichs wol schicken.

思うに君は真面目だよ。でもね、誰かがそんな大金をもたらしたら、きっと馴染ん
でしまうよ。

(55) Was ist es *aber doch*?

それは何でしたっけ？

(56) Es wird friede sein bei euch, *so doch* das schwert bis an die seele reicht.

君たちは仲直りをしたが、やはり剣は魂まで届いてしまった。

①として(47)、②として(48)、③として(49)、④として(50)、⑤として(51)、⑥として(52)、
⑦として(53)、⑧として(54)と(55)と(56)が挙げられている。(47)は接続副詞、(48)は接続詞、
(49)は心態詞、(50)、(51)、(52)、(53)は応答詞、(54)は接続詞、(55)は心態詞、(56)は接続副
詞である。

このように分類された *doch* に関して、見出し語 *doch* のところに挙げられた例文を分析
すると次ページ(表 2)のような分布になった。この(表 2)を観察する限り、接続詞と接
続副詞を合計した接続機能による例文は 153 例、心態詞によるものは 148 例である。心態
詞は新高ドイツ語以来急激に発達した意味機能であるという意見があるにもかかわらず、
接続機能と肉薄した統計結果が得られたということは、Hentschel が指摘するように、新高

³¹ *nein doch* に対する例文が、*„DWB“*には挙げられていなかったのもので、岩崎(1998:301)から引用した。

ドイツ語の初期、あるいはそれ以前の古いドイツ語において、心態詞としても活発に使用されていた可能性が高いと言える。

表 2

接続詞		43
副詞	逆接	47
	譲歩	34
	条件	15
	その他	14
	合計	110
応答詞	単独	12
	doch doch	8
	doch ja	1
	doch wohl	1
	ja doch	8
	nein doch	8
	nicht doch	10
	合計	48
心態詞	平叙文	61
	確認疑問文	3
	補足疑問文	23
	要求文	36
	感嘆文	18
	願望文	7
	合計	148
分類不可		6

また応答詞機能において、nein doch や nicht doch などの現代ではほとんど観察されない用例も挙げられている。これらの用例における doch は先行する否定詞 nein、nicht を強

調する機能を果たしており、心態詞よりもさらに中心的意味である「対立性」を喪失した強調詞³²とも呼ぶべき機能が 19 世紀以前にすでに存在していたと考えられる。ただし、*nein* や *nicht* との共起が現在ではほとんど見受けられない理由については明らかでない。また心態詞機能と文タイプとの関連性は、新高ドイツ語の時代から現代にいたるまで大きな変化はなかったように見受けられた。

さらに(表 3)において、年代別の用法の頻度をまとめた。„*DWB*“は 19 世紀前半に着手された事業であり、それゆえに *doch* には 19 世紀の作品からの例文がほとんど挙げられていない。しかしながら、それ以前の用例は年代による不均衡はあるものの、相当数を収めており、用法別の頻度を確認するには十分であるとみなすことができる。„*DWB*“は単独で生起する応答詞の *doch* に関して、18 世紀になってようやく用いられ始めたと主張している。(表 3)において 17 世紀にも 3 例があるとなっているのは、その出典が 17 世紀後半から 18 世紀前半の作家に由来しているためであり、18 世紀頃から応答詞としての *doch* が機能し始めたということには疑義がないと考えられる。さらに詳細に観察すると、すでに後期中高ドイツ語の時代である 15 世紀にも心態詞としての意味機能が見られることが明らかである。また 16 世紀以降になると、心態詞が用いられる頻度は *doch* の用例全体における割合の中で相当高まったように見受けられる。新高ドイツ語時代に入って心態詞が豊富に用いられるようになったのは、それぞれの時代の文学スタイルに相違があることと関連すると推測される。つまり中世文学はリズムを重んじた韻文形式のものが多数を占めていたのに対し、近世、近代文学では技巧を凝らした散文形式が多くを占めたという点との関連が示唆されるのである。韻律によって表現されていた情緒的な部分を散文で表現するには、モダリティの標識となる心態詞の出現に依存せざるをえず、その使用頻度が増加したのではないかと考えられるのである。とはいえ、これらの用例はすべて文字によって表されたものであり、実際の会話において、中世の人々がどれほどの頻度で心態詞を用いていたのかについては、残念ながら確認するすべがない。

³² 強調詞については 3 章で述べる。

表 3

	15Jh.	16Jh.	17Jh.	18Jh.	19Jh.	年代不詳
接統詞	0	13	1	16	2	11
副詞	13	36	3	22	3	33
応答詞	0	0	3	42	0	3
心態詞	7	41	10	49	4	34
分類不可				5		4
合計	20	90	17	134	9	85

3. ドイツ語内での比較

ドイツ語の不変変化詞にはいくつかの意味機能を持つものがある。これまでに *doch* に接続詞、接続副詞、応答詞、心態詞という四つの意味機能があることを観察したように、例えば、*aber* には接続詞、接続副詞、心態詞という三つの用法があり、*ja* には応答詞と心態詞という二つの用法が挙げられる。そしてそれらの機能を見分ける際は、一般に語順やアクセントの有無が基準とされている。

本章では、各語彙における多様な意味機能には何らかの根源的な共通特徴があるという観点に立ち、特に文タイプと意味機能の関連に注目して *aber*、*doch*、*ja* の三つの不変変化詞について考察する。それに先んじて、*jedoch* についてまずは観察する。ドイツ語には *doch* と語源を同じくする *jedoch* という単語があり、両者の働きは多くの点で類似している。しかし *doch* には *jedoch* にはない意味や機能があり、その相違を確認することはドイツ語の副詞の歴史的変遷を理解するうえできわめて有益な足がかりとなると推測される。そこでここでは *doch* から *jedoch* が発生した様子を考察し、副詞の意味機能変化の一モデルを提示することを目標とする。その後、応答詞の連辞の可能性をアクセントの問題とともに論じ、心態詞の結合についても考察する。

3.1. *jedoch* との関連

(57) Nun durften die Eltern das Geheimnis nicht länger verschweigen, sagten *jedoch*, es sei so des Himmels Verhängnis und seine Geburt nur der unschuldige Anlaß gewesen. Grimm(B.1, S.174, Z.18)

すると、両親はもはや秘密を黙っていらなくなりました。しかし、「それは天の決めた不運であって、お前が生まれたことは関係ないんだよ」と言いました。

(58) Wenn mir das nicht passte, musste ich den Beruf wechseln. Das hatte ich *jedoch* nicht vor. Murakami(S.132)

それが気に入らなければ、計算士を廃業するしかない。私には計算士を廃業するつもりはない。村上(P.228)

Paul(2002:508f.)によれば、*jedoch* は古高ドイツ語の *iodoch*、中高ドイツ語の *iedoch* に由来し、*doch* に *je* が付加された形態である。Je はゴート語では *ewig* という語から導き出

された名詞の対格で「ある時」を意味する *aiw*、古高ドイツ語の *io*、中高ドイツ語の *ie* に由来し、音節アクセントの移動による中間形態の *ié* を通じて、まず低地ドイツ語に生じた。また *ie* が比較の *mēr* (*mehr*) と融合して *iemer* が発生し、新高ドイツ語で *immer* という形になった。中高ドイツ語においては、*ie* と *iemer* はいずれも新高ドイツ語の *je* と *immer* の意味を併せ持っていたが、*ie* は過去を、*iemer* は未来を向いているという区別がなされていた。というのは、*iemer* の中にある *mēr* は「今後、未来」という意味を持っているからである。この違いは新高ドイツ語で失われたが、*immer* は「すべての実際の時間 (zu jeder wirklichen Zeit)」、*je* は「すべての任意に仮定された時間 (zu jeder beliebigen angenommenen Zeit)」という別の違いが新たに導入されたということである。つまり *ie* は *immer* の意味を持っていたが、時間的な意味が弱まって、初期新高ドイツ語期に「どんな状況においても」という意味へと広がったのである。「常に」という意味はまた強調するためにも用いられることから、*je* は後に述べるように強意の造語要素としても機能する。

このように、強調の働きを持つ *je* を付加することで生まれた *jedoch* はどんな状況においても対立していることを表し、その対立性が *doch* よりもいっそう強調された語彙である。それゆえに *jedoch* は対立性を希薄化することのできた *doch* とは異なり、心態詞としての機能は認められないのだと考えられる。また *jedoch* は譲歩関係を表す複合文の主文に置かれることはなく、(60)は非文となる。

(59) Das Wetter war schön, er war *jedoch* den ganzen Tag zu Hause.

天気は良かったが、彼は一日中家にいた。

(60) *Obwohl das Wetter schön war, war er *jedoch* den ganzen Tag zu Hause.

(61) Obwohl das Wetter schön war, war er *doch* den ganzen Tag zu Hause.

天気がよかったにも関わらず、彼はやはり一日中家にいた。

Jedoch が(60)のように用いられないのは、*obwohl* に導かれる副文が譲歩による対立を表し、それにさらに *jedoch* による逆接が含意される対立が加えられると、対立が二重化して文の整合性が失われるからであると考えられる。それに対して *doch* は(61)のように *doch* 自

体が *obwohl* のように譲歩の条件を表す副文で接続機能を果たす³³ことも、あるいは条件を受けた主文で生起することも可能である。ではなぜ *doch* にはそれが可能であるのか。それは *doch* が対立性に関して意味漂白³⁴を起こしているからである。*Doch* は対立の意味を放棄して、先行する譲歩の条件を強調する役割を担っていると考えられるのである。再び *jedoch* に戻れば、それが譲歩文で用いられない理由は、*jedoch* が *doch* と同様の意味漂白を受けていないということによる。対立という性質を明確に表しうる環境でしか、強意された対立性を含意する *jedoch* は生起しない。つまり *jedoch* はきわめて制限された意味と用法しか持っていないのである。

以上のように *doch* と *jedoch* の成り立ちや用例を観察して、語の「合成」あるいは「再生産」によって本来の意味内容が明確になる例を確認することができた。その際に明らかとなったのは、*jedoch* は *doch* より後に生まれた語彙であり、*doch* に *immer* の意味から派生した強意の *je* を付加することで作られた語彙であるということである。*jedoch* は語源的には古高ドイツ語までしか遡られていないが、*immer* 「常に」という *je* の意味を確認することによって、*doch* との関係を明確にすることができた。相良 (1992: 101) も「*Je* は『常に、かつて、いつか』の意の副詞、転じて『何らかの』すなわち *irgend* という普遍化の意味の合成語となる」と述べている。*Je* は「常に」という意味から強意を表すようになり、*jedoch* は *doch* の諸用法のうち、「対立」の意味が漂白された特殊機能である心的態度 (モダリティ) の表出とは結びつかず、元来、すべての *doch* に共通であった「対立」の意味を残したまま、「逆接」の意味機能のみを強調したものであると考えられる。これに加えて、逆接接続として機能する *doch* は *aber* などの並列接続詞と共に生起するが、*jedoch* ではそれが不可能である。このことから、*doch* は *jedoch* よりも逆接の意味機能を失っていると考えられる。これは *doch* に関して(61)に見られた現象と平行している。つまり、*jedoch* が強意された対立性を持つのに対し、*doch* はその対立性を保持しながらも多様な接続機能、さらには

³³ 岩崎(1994:178f.)に「*Er verfocht eifrig seine Meinung uns gegenüber, die wir doch alle seiner Ansicht waren.* 彼はむきになって私たちに対して自説を弁護した。私たち全員が彼と同意見だというのに。」という例がある。副文中の *doch* はある種の譲歩性を表出していると解釈することができる。

³⁴ 河上 (1996: 179ff.) によれば、もともと名詞、動詞、形容詞などの内容語であったものが次第に文法的に文を構成する役割を果たす機能語としての文法的な特質、役割を担うようになる現象を文法化という。そのような意味変化の一つに「意味の漂白化」(semantic bleaching)がある。これは内容語としての意味が希薄になり、喪失されることであり、機能語としての新たな意味機能を獲得する現象である。

心態詞機能への展開を示したと言える。

その一方で、「意味的には *jedoch* よりも *doch* の方が強い対立を表す」という村上 (2005: 42) の主張がある。しかし、それは *doch* が先行する発話への対立を表す応答詞として、*ja* や *nein* と同様に単独で用いられることに関連すると思われる。一語で対立を表す応答詞としての *doch* は、上記で示された応答詞のようにきわめて独立性が強く、この特徴から *doch* には対立性の極度に高められた一面もあるという解釈が成り立つのではないかと推測される。また確かに、*doch* [dɔx] は 1 音節、*jedoch* [je'dɔx] は 2 音節であり、前者の強意形としての後者という関係を貫くならば、村上(2005:42)の見解と一見矛盾を示している。しかし、*doch* の語頭音である *d* [d] が有声歯音閉鎖音、*jedoch* の語頭音である *j* [j] が有声硬口蓋摩擦音³⁵であることも考慮すべきであろう。つまり、*d* [d] のほうが *j* [j] よりも鋭い音質を保持し、その音響的な印象が強いことも、対立性の強さと何らかの関連がある可能性があると推測されるのである。これは Gabelentz が「文法化は、楽に発音する傾向(*ease of articulation*) とはっきり区別して発音する傾向(*distinction*)が競い合った結果である」³⁶と示唆していることとも関連すると思われる。

3.2. *aber* との関連

続いて、*doch* と同様に逆接の接続機能を果たす *aber* を観察する。両者はいずれも心態詞機能も持ち合わせており、その働きにどのような差異があるのかを考察するためである。

(62) »du hast zwar das Wasser des Lebens gefunden, *aber* du hast die Mühe gehabt und wir den Lohn; ...« Grimm(B.2, S.178, Z.5)

「なるほど、お前は、命の水を見つけたが、骨折り損、と言うやつで、儲けはこちらがいただいた。…」

(63) Riese nahm den Stamm auf die Schulter, der Schneider *aber* setzte sich auf einen Ast, ... Grimm(B.1, S.146, Z.18)

巨人は肩に幹を担ぎましたが、仕立て屋は枝に座っていました。

³⁵ 有声硬口蓋摩擦音を[j]、硬口蓋接近音を[j̥]と表記したり、[j̥]を非円唇硬口蓋接近音として半母音と規定したりするものもある。無声硬口蓋摩擦音は[ç]である。

³⁶ ホッパー／トラウゴット(2003:27)

(64) *Aber* hüte dich, daß du nichts davon verrätst, der Vater glaubt dir doch nicht, ...

Grimm(B.2, S.178, Z.5)

だが、こんなことは、人に言わないように、気をつけろよ。お父様は、お前の言うことなんかは、信じやしない。

(65) Du bist *aber* gewachsen!

君は何て大きくなったんだ！ 井口(2000:121)

不変化詞 *aber* はゴート語で *afar*、古高ドイツ語で *afar*、*avar*、*avur*、*aber*、中高ドイツ語で *aver*、*aber* という形態を持ち、「非常に古い不変化詞で、高地ドイツ語方言の特徴がおおよそ見られる」³⁷とされる。もと「再び、更に」の意味の副詞で、それが転じて「変更、訂正」の意味をあらわす「しかし」の意の接続詞になった³⁸とされる。現代ドイツ語に見られる用法は Duden(1988: 20f.)によると以下の通りである。

①接続詞

[1] *dagegen*、*jedoch*、*doch* の意味。対立、対照、矛盾などを示し、予想や期待に反するようなことを表現する。

[2] *jedoch*、*allerdings* の意味。制限、条件や補足、補充を示す。

[3] 反論、矛盾や返答、異義を導く。

[4] (古) 話の糸口をつけたり、話を進展させたりするのに用いる。

②会話の不変化詞

wirklich の意味。強調に用いられる、話し手の感情的な関与のマークになる。

③副詞、いくつかの語との結合において用いられる。

(62)と(63)の *aber* は動詞の位置に影響を与えていないことから文肢性を持たず、接続詞として機能している。(64)の *aber* は文頭の第一位を占めており、文肢性を保持しているこ

³⁷ Grimm(2004:Digital)

³⁸ 相良(1994: 112)。現在でも *abermals* が *nochmals* 「もう一度」の意味で用いられており、元来の意味が *aber* に残る形式もある。

とから、接続副詞であると考えられる。これらは、品詞は異なるもののいずれも逆接の接続機能を果たしており、(62)から(64)が上記の①に該当している。ところが(65)の *aber* は(62)(63)(64)の *aber* とはまったく異なり、接続という役割を持たず、心態詞として機能している。井口(2000:141)は *aber* を感嘆文で用いられる心態詞として挙げ、「話し手はその命題を想定はしていたが、それは現実世界と大きく異なっている。*aber*³⁹はこの違いが大きいことを表現する。同じく感嘆文に用いられる *vielleicht* に対して、*aber* は量的な対立(思ったよりも多いなど)に用いられることが多いと言われる」と規定している。またヘルビヒ／ブッシャ(1998:231f.)は非文肢類の *aber* の「客観的な意味特徴」として「限定」、「強めおよび増強」、「主観的な意味特徴」として「驚き、怒り、腹だち」の意味を持つと主張している。これらのことから、心態詞としての *aber* は「想定との対立」という話者の感情を表出し、それゆえに心態詞の *aber* は「怒り」や「驚き」を表す平叙文や感嘆文に現れるのである。(65)においても、話し手は相手がこんなにも大きくなっていないと想定していたが、実際には想像以上に成長しており、その意外性を *aber* が表現していると考えられる。

したがってこれらの点を鑑みると、*doch* も *aber* も「想定との対立」という意味基盤を持っていると見なされる。ただし、*aber* は想定との違いの大きさに焦点を当てているのに対し、*doch* は想定との違いがあるということ自体に焦点を当てているように推測された。いずれにせよ、ここで関心が持たれるのは「対立性」と「心的態度の表出」には何らかの関連があるのかという点である。想定との対立はそれとの一致と比較してみると、話し手の感情としてはより強い印象を与えるものである。想定との対立を表現することは、現状を受け入れようとしたり、想定の実現を目指そうとしたりする話し手の心情・姿勢の表出に他ならないからである。つまり、対立性を持った感情をアピールする機会が多く、それゆえに、元来、相当の対立性を表出するような語句が心態詞として機能しているのではないかと推測されるのである。この点については、今後の考察が必要である。

3.3. *doch* 再確認

ここで今一度、*doch* の用法について確認しておきたい。

(66) *Doch, wie er etwa hundert Schritte gegangen war, hörte er über sich in den*

³⁹ 井口(2000)ではある語について言及する際、その語が文頭にあっても小文字表記をしており、引用箇所についてはそれに従う。

Ästen ein Geschrei und Gezwitscher, daß er aufschauete: ... Grimm(B.2, S.291, Z.25)

ところで、百歩も行くと、頭の上の枝の中でギャアギャア、ペチャペチャ言ってるのが聞こえたので、見上げました。

(67) ... so lieb er seine Gemahlin hatte und so vernügt er war, sagte *doch* immer: ... Grimm(B.1, S.60, Z.25)

こうして若い王様はお妃様を愛して、とても満足していましたが、やっぱり相変わらずこう言っていました。…

(68) »nun hat mich der Spitzbube von König *doch* hinter Licht geführt! ...«

Grimm(B.1, S.76, Z.25)

「王様のならず者め！おれをだましやがったな。…」

Doch も *aber* と同様に、逆接の接続詞と接続副詞として機能し、また心態詞としても機能する。井口(2000)によれば、心態詞の *doch* は、平叙文では「話し手が想定した命題に反する事態が現実世界に認められたり、あるいは話し手がそれを想定したりしているが、その命題が現実世界でまちがいなく実現しているという話し手の認識を表現する。それだけにその命題を強く肯定する意味合いも含む」⁴⁰とされる。また決定疑問文に関しては、「平叙文の語順をした確認疑問文の中で使われる。話し手は自分の想定が現実世界と一致すると思っていたが、現実世界においてそれに反するような事態が認識されたので確認している。結果的に相手に同意を求める表現となる。次のように⁴¹定動詞が文頭に置かれた決定疑問文に用いられた場合には文アクセントを持ち、『それでも』という意味が前面に出てくるので、接続副詞と扱われるのがふつうである」⁴²としている。さらに補足疑問文に使われる場合として、「補足疑問文で尋ねるということは、本来は話し手が疑問詞に対応する内容を知らないということである。しかし、話し手にそれを本当に知っているという想定がある場合、知っているにもかかわらずそれを尋ねていることを表すために *doch* が用いられる。現在のこ

⁴⁰ 井口(2000:129)

⁴¹ „Ist Peter *dóch* verreist?“

⁴² 井口(2000:133)

とであっても過去形が用いられることがある。前は知っていたという話し手の意識が働くためであろう」⁴³と述べている。命令文における *doch* については、「相手の現実の態度などから相手がそれをしないという事態が想定され、それに反してぜひさせなければという気持ちが表現される。しないことへの対立という観点から *doch* が用いられる」⁴⁴とされる。また願望文に用いられる *doch* は「想定世界の命題が現実世界に対立することを表す。それにもかかわらずその実現を願っていることになり、結果的に強い願望を表す」⁴⁵とされる。感嘆文に用いられる *doch* は「想定世界では表現された命題と完全に対立する内容が想定されている。結果的に表現された命題の事実性を強調する働きとなる」⁴⁶という。

つまり *aber* は「想定との対立」を話し手が認識した際に持つ「怒り」や「驚き」の感情を示すが、*doch* は命題を強く肯定する気持ちを表現し、それだけに強い要求を示すことになるのである。

3.4. ja との関連

不変化詞 *ja* はゴート語では *ja*、断固として主張する際には *jai* が用いられ、古高ドイツ語では *jâ*、中高ドイツ語では *jâ*、強調する際には、*r* の挿入を伴って、*jârâ*、*jâriâ* という形態で現れる。また新高ドイツ語では、*ja* は時に短く、時に長く発音され、長く発音されるときはたいい強調された肯定を表している⁴⁷。Duden(1988: 389)において、現代ドイツ語の用法は次のように記述されている。

[1] a) 質問に対して同意する発話。

b) 叫びにおいて。

[2] 疑いをもったときの発話や自分自身の発言の用心深い強化。

[3] a) *doch* の意味。

b) *wirklich* や *tatsächlich* の意味。

c) *zwar* の意味。

[4] *auf jedem Fall* の意味。

⁴³ 井口(2000:135)

⁴⁴ 井口(2000:138)

⁴⁵ 井口(2000:141)

⁴⁶ 井口(2000:141)

⁴⁷ Grimm(2004:Digital)

[5]強調していることを主張する。

[6]文のつなぎとして。

[7]電話の受話器を取る時や、自分自身の名前が呼ばれる場面で。

[8]誰かの発話に対する反応として怪訝な気持ちを表現して。

以下、特に心態詞の ja の機能に注目しながら例を観察する。

(69) Da sprach die Frau Füchsin: »hat der Herr rote Höslein an, und hat er ein spitz Mäulchen?« — »*Ja*«, sagte die Katze, »das hat er.« (Grimm, B.1, S.239, Z.7)

そこで、奥様ギツネが言いました。「その方は赤いズボンをはいていて、とがったお口をしているかしら？」 — 「はい、その通りでございます」と女中ネコは言いました。

(70) »ach, was gruselt mir, was gruselt mir, liebe Frau! *Ja*, nun weiß ich, was Gruseln ist.« (Grimm, B.1, S.60, Z.34)

「ああ、ぞっとしたぞ、ぞっとしたよ、お前！ああ、ぞっとするとはどういうことかやっとわかったよ」

(71) »Ei, Herr Fuchs«, rief's Schneiderlein, »ich bin's *ja*, der in Eurem Hals steckt, laßt mich wieder frei.« (Grimm, B.1, S.146, Z.18)

「おやおや、キツネさん。ぼくですよ。あなたの喉に引っかかりますよ。離してくださいよ！」

(72) Arbeite *ja* fleißig!

一生懸命働くんだよ！

(69)の ja は疑問文に対する肯定の返答として用いられており、応答詞とみなすことができる。(70)では ja は文のつなぎとして埋め草的な働きを果たしており、間投詞的である。(71)と(72)の ja は文肢性を保持しておらず、心態詞と解釈することができる。井口(2000:130)は平叙文に用いられる心態詞 ja は「話し手が想定していた命題が現実世界では

疑うべからざる事柄であることを表現する。ここではその命題と平行する他の命題は考慮されておらず、ひたすらその命題が事実であるということを主張するものと考えられる。*doch* と異なり *ja* は先行する発話への反応という側面は弱く、事実性の主張が前面に出る。否定された命題が先行し、それに対する事実性をさらに強調しようとするときには文アクセントが置かれる」と述べている。また、命令文に使われる *ja* は「常に文アクセントを持つ。想定世界での命題が現実世界と一致することを強く要求する。結果的に警告、脅しなどになることが多い」⁴⁸としている。

つまり *ja* は命題と現実世界の一致を要求する際に用いられており、この点では日本語の終助詞「ね」と類似した意味内容と持っている。(71)においては、話し手が「あなたの喉にひっかかっているのは疑う余地もなく自分であり、そのことを聞き手である「あなた」にも同意して欲しい」という感情が、*ja* によって表出されている。また(72)では「勤勉に働く」という想定と現実が一致することを要求しているため、命令文で *ja* が用いられていると考えられる。応答詞 *ja* の「肯定」という機能は、先行する発話内容が事実と一致していることを話し手が主張するときに用いられるものであるが、「命題との一致を表す」という内在的意味が心態詞 *ja* にも残存していると考えられる。異なる機能に共通する内在的意味が貫かれている点は、対立型の *doch*、*aber* の場合と同様である。

さらにここで注目すべきは、従来、心態詞はアクセントを持たないものと規定されてきたが、命令文に用いられる *ja* のようにアクセントが付与された用法も認められることである。話し手の心的態度が強く前面に出る際には、心態詞でもアクセントを付与されうる。この点は心態詞（あるいは応答詞）の共起現象と大きく関連しており、心態詞以上に内在的意味を希薄化させた強調詞の存在を示唆するものである。この点については以下で考察していく。

3.5. 応答詞の連辞

応答詞はそれ一つで疑問文に対する答えとして機能することが可能であるが、応答詞が二つ以上結合したり、不変化詞と応答詞が共起したりする形で、疑問文への答えとなることもある。

(73) Sind Sie damit einverstanden? – *Ja doch*, ich bin vollkommen einverstanden.

⁴⁸ 井口(2000:139)

あなたは、それに同意してくださいますか？—もちろん、完全に同意します。

岩崎(1998:301)

(74) Kann ich mitkommen? — *Doch ja*, wenn es sein muß.

いっしょに行ってもいいかな？—まあね、どうしてもと言うのなら。

岩崎(1998:293)

(75) Du hilfst uns doch bei der Vorbereitung? — *Aber ja*.

準備のとき、私たちの手伝いをしてくれるね？—ああ、もちろんさ。

岩崎(1998:684)

(76) Sind Sie nicht dagegen? — *Aber doch*, ich bin sehr dagegen.

あなたは、それに反対ではないのですか？—とんでもない、大反対です。

岩崎(1998:4)

上記のように決定疑問文の答えになりうる *doch* と *ja* の前に *ja* や *doch* や *aber* が付加される場合がある。このように応答詞が二つ並んでいる場合、後者の応答詞がメインの機能を果たすと推測できる。というのは(75)や(76)に見られるように応答詞ではない *aber* が応答詞の前に付加されている形態が確認されるからである。答えになりうるのは *aber* ではなく、*ja* や *doch* であり、また逆の形式である *ja aber* や *doch aber* の用例が確認できないことから、二つの応答詞が直接並べられる場合や不変化詞と応答詞が連辞して機能する場合は、後者が主要な役割を果たし、前者は後者を補助的に強調するのだと解釈しうる。

また応答詞の連辞における意味機能に関して、ヘンチェル／ヴァイト(1996:308)は *ja doch* という共起について『分かってるよ、そりゃそうさ』という、いらだちをあらわす応答の不変化詞どうしの組み合わせが見られる」と述べている。上述のように、後者の応答詞が主要な意味役割を果たしているので、(73)では *doch* がメインの返答となっている。(73)の例の先行文には否定詞がないが、それに対する否定の返答の可能性を否定することで、強い肯定を示している。このように強い肯定を表す *doch* に肯定の *ja* が付加されることによって、さらに強められた肯定を表現することができるのである。このようなきわめて強い肯定を表しうることにより、いらだちを伴うくらいの強い肯定を表出することも説明可能で

あろう。また(74)のような *doch ja* という逆の範列も周縁的に認められる。この場合は、*doch* によって *ja* の肯定を強めていると考えられる。

加えて、二つの応答詞が連辞して生起する際にその意味機能を主役的に果たすものと補助的に果たすものに区別できるという点は、発音を考慮すると明らかである。通常、応答詞はそれ一語で疑問文への返答として機能することが可能であることから、重要な役割を持ち、発音する際に強いアクセントが付与される。しかし応答詞が二つ並んだ場合、後者のほうがより強いアクセントを持つ。それには直接隣り合う二語に同じ強さのアクセントが付与されると、円滑な発声が妨げられることが要因の一つであると考えられる。また、前述のように、二つの応答詞が連辞される際に補助、主要という機能の順序で配置されていることが、アクセントの弱、強という順序に表出していると見るのが妥当であろう。

このように応答詞に不変化詞が付加された強意形の存在はドイツ語に限ったことではなく、例えばフランス語においても観察することができる。

(77) *Vous le savez? – Mais oui!*

ご存知ですか。—もちろんですとも。 天羽(2003:1072)

(78) *Mais non.*

いえいえ。 天羽(2003:1028)

(79) *Tu n'es pas content? – Mais si.*

うれしくないの?—いや、うれしいさ。 天羽(2003:1443)

フランス語の場合はたいてい、*aber* の意味を持つ *mais* が応答詞の前に付加されて、その応答詞の意味を強めている。

(80) *Sie entschuldigen, wenn ich so etwas erzähle... – Aber bitte, es ist ja so interessant.*

こんなことをお話ししてもよろしいでしょうか…?—どうぞどうぞ、とてもおもしろいですよ。 岩崎(1994:4)

さらに(80)の *aber* も *bitte* という間投詞を強める補助的な役割を果たしており、*aber* が果たしうる強意機能は応答詞のみを対象とするのではないことが確認できる。

このようにドイツ語の *aber* とフランス語の *mais* がいずれも「逆接」や「対立」の内在的意味を持ち、強意機能を持つことから、「対立」と「強意」には何らかの関係があるとも推測できるが、この点に関しては今後の検討が必要である。

またドイツ語にはかなり古風な言い方であるが、(81)のような特殊なケースも見られる。応答詞が三つ結合した *aber ja doch* という形式である。この場合は最後の *doch* ではなく、*ja* が中心的な意味を持っていると考えられる。その理由は、一般に文においては主要な意味役割を果たすものが最も強く発音されるが、*aber ja doch* では *ja* がもっとも強く発音されるからである。つまり *ja* の強意形である *aber ja* に *doch* が付け足されることで後ろから再度強意が行われていると考えられる⁴⁹。

(81) Gelegentlich sprach er Herrn Settembrini von seinen Vorhaben. Herr Settembrini hätte ihn vor Freuden beinahe umarmt. „Aber ja, *aber ja doch*, Ingenieur, um Gottes willen, tun Sie das! Fragen Sie niemanden und tun Sie's [...].(Th. Mann)

折を見て彼は、彼の意図についてゼッテムブリーニ氏に話した。ゼッテムブリーニ氏は、よろこびのあまり彼を抱擁せんばかりだった。「そうですよ。そうですとも、技師さん、ぜひともそれをおやりなさい。誰にも聞いたりせずに、おやりなさいよ。
[...] (マン) 岩崎(1998:684)

このように応答詞の連辞が起こる場合は、その意味機能が強調されるときであり、その際は直前に他の応答詞や不変化詞が付加される形式を取ることが確認された。

3.6. 心態詞の共起

続いて、心態詞における共起現象について論じる。応答詞のシンタグマを考察することで、補助的に用いられる応答詞や不変化詞は強調する機能を果たしており、一種の強調詞とみなすことが可能であると思われた。よって、心態詞においても同様の現象が起こりうるのか

⁴⁹ このような形態は英語の *very good indeed* にも観察されうる。

を確認すべく、以下の例を観察していく。ここで扱う心熊詞の共起関係に関しては岩崎／小野寺(1994)と岩崎(1998)の例文を観察対象とした⁵⁰。

一つの文に心熊詞が複数共起することがある。その場合、心熊詞は隣接したり、中域に隣接せずに現れたりする。井口(2000:142)は「心熊詞は一つの文に二つ以上使われることがある。前に見たように心熊詞によっては特定の文タイプにしか現れないという制限があるので、そのような制限が相反するような心熊詞同士は原則として一緒に現れない。そして、心熊詞が二つ以上使われる場合にはある一定の順序に従って並べられる」として、Thurmair(1988:282)による二つの心熊詞の結合の例を次のように挙げている。すなわち、平叙文における *denn doch*, *doch einfach*, *doch mal*, *doch ruhig*, *doch schon*、命令文における *doch bloß*, *doch einfach*, *doch mal*, *doch nur*, *doch ruhig*, *doch schon*、願望文における *doch bloß*, *doch nur*、感嘆文における *doch bloß*, *doch nur* である。

以下、*doch* と類似した意味機能を持つ不変化詞 *aber*、*ja* と *doch* の連辞について、特に直接並んで生起する場合に限定して考察することにする。ここでは心熊詞の結合によってどのように意味機能が複合化しているのかを考察することを目的としており、複数の心熊詞が離れて生起する場合は、個々の心熊詞が別々に機能している場合もあるので、考察の対象から除くこととする。

まずは *aber doch* / *doch aber* の結合について観察する。

- (82) „Gehen Sie denn nicht gern ins Gymnasium?“ „Kennen Sie jemand, der gern hineingeht?“ „Sie wollen *aber doch* studieren?“ „Nun ja, ich will schon.“ (Hesse)
- 「あなたは、ギムナージウムに通うのが好きではないのですか?」「好きで入学する人なんて、御存知ですか?」「でもあなたは、大学に進むつもりなんでしょう?」
- 「まあ、それはそうですが」(ヘッセ) 岩崎(1998:300)

前述のように *aber* は「想定世界と現実世界の対立」を表し、*doch* は「想定世界と現実世界の対立」に加えて、「想定の実現を要求する強い気持ち」が含まれている。このことから *aber doch* という語順においては、「想定」と「現実」のギャップが二つの心熊詞によって

⁵⁰ 岩崎／小野寺(1994)の *aber* の項目には 18 文、*doch* の項目には 79 文、*ja* の項目には 66 文、岩崎(1998)の *aber* の項目には 47 文、*doch* の項目には 247 文、*ja* の項目には 207 文の例文が挙げられている。

表されており、そのギャップがきわめて大きいことをアピールしたいという話し手の趣旨が明白である。(82)においては、「ギムナージウムに通うのが好きではない」のだから「大学に進学しないのがふつう」という話し手の想定があるのに、聞き手は進学しようとしていることを話し手は知っており、「進学しないのがふつうという想定」と「進学しようとしている現実」との対立に対する話し手の反駁の気持ちが表現されている。しかしこのような心的態度は *doch* 単独でも表出可能であり、*aber* との結合は *doch* が表す心的態度の拡大・強調とみなされるべきである。*Aber* と *doch* は「対立」という類似する内在的意味を持つが、両者が共に生起することによって、「対立」に対してさらなる「対立」は起こっていない。つまり両者のうちのいずれかはその対立性を失い、もう一方を強調するマーカーになってしまっているのである。あるいは前述のように *aber* は「もと『再び、更に』の意味の副詞で」機能しているとみなし、前者の *aber* が後者の *doch* の強調詞になっていると考えられる。日本語の助動詞と終助詞の連辞「だよね」⁵¹においても、助動詞「だ」には断定の意味は与えられていない。応答詞の連辞を考察したときにも *aber doch* という形式のみで、*doch aber* という語順はありえず、前者が後者を補助的に強調するという枠組みが観察された。心態詞においても *aber doch* という語順の連辞は確認されたが、*doch aber* という連辞は見い出されず、後者が実質的な意味を表出するという点も共通しているとの推測が可能である。

続いて *doch ja* / *ja doch* の例文を見てみる。

(83) Und warum wollen Sie mich noch mit dieser häßlichen Medizin quälen, da ich
ja doch so bald sterbe! (Heine)

なぜあなたは、私をこんないとわしい薬で苦しめようとなさるの？私は、どうせじきに死ぬ身だとういうのに。(ハイネ) 岩崎(1998:295)

(84) Wie es jetzt in Rom mit den sogenannten Ciceronen, mit den Künstlern und dem Kunsthandel aussieht, schreiben Sie mir *doch ja* und [...]. (Goethe)

いまローマでは、いわゆるチチェローネ（観光案内人）たち、芸術家たち、そして美術品の売買の様子がどうなっているのか、ぜひ手紙でお知らせください。それか

⁵¹ 日本語の問題については第 5 章で論じる。

ら[…]。(ゲーテ) 岩崎(1998:299)

Thurmair(1989:208)は「話法の不変化詞 ja は最もよく使用されるものの一つである。その比較的個性的ではない意味(単に「既知である」という意味特徴)に基づいており、非常に頻繁に結合させられる」と述べている。またアクセントのない ja、つまり心態詞 ja による連辞については、「アクセントのない ja は平叙文に生起し、そこでほとんどすべての話法の不変化詞(halt⁵²以外)と結合しうる。すべての場合で実証されるのは、ja が結合された場合においても『既知である』という意味特徴を付加するということである。Ja は結合において常に前の位置で見い出される(mir と結合される場合は除いて)」と主張している。しかし(84)に見られるように実際には doch ja という ja が先行しない形式での結合も周辺的ではあるが観察される。

また Thurmair(1989:209f.)は ja が先行する形式である ja doch という語順での結合に関しても、きわめて似通った意味を持つ「話法の不変化詞」⁵³はそれほど頻繁に結合されないので、例外的であると主張し、ja doch という語順が例外的とはいえ認められるのはこの doch がアクセントを持つからであると考えている。というのは ja も doch も「話法の不変化詞」、つまりアクセントを持たない通常的心態詞としては「既知である」という意味を表すが、アクセントを持った断定の副詞 doch は、既知性ではなく、「想定が実現されていない現実」を「訂正」しようとするマーカーとして用いられていると考えられるからである。つまり、Thurmair は ja doch という語順が可能であるのは、doch にアクセントが付与された場合は ja と doch の意味機能に差異が生じ、それによって類似した意味を持つ心態詞が結合しにくいという制限に抵触しないためだと考えている。

このような Thurmair の考察に関しては、応答詞の連結の際に、強いアクセントを持つ応答詞同士の連結では両者にアクセントを付与されるものの、後者のほうがより強く発音されるという上述した本稿の観察と同様の状況が心態詞の連辞においても起こる可能性を考慮すれば、一定の理解を示すことが可能である。心態詞は元来アクセントを持たないものと

⁵² 井口(2000:130)は halt について「話し手が想定した命題が現実世界では既成事実となっており、変えることができないことを表す。結果的に、その命題が明白な事実であり、受け入れざるをえないことを意味する。eben とほぼ同じ機能だが、halt の方は南部で用いられることが多いとされる」と述べている。Thurmair の主張に基づけば、類似した意味の不変化詞の結合が起きにくい点が、ja と halt の結合が起きない理由と考えられる。

⁵³ Abtönungspartikel と同義で Modalpartikel (話法の不変化詞) という術語が用いられることがある。

されているが、命令文に生起する **ja** のようにアクセントを付与されて機能する心熊詞の存在も確認された。そして発話においては直接隣り合う二語の発音に多少の強弱がつくのは自然であり、その場合は後者が比較的強く発音される。これは心熊詞同士が直接隣り合って生起する場合にも当てはまるであろう。**Ja doch** という語順において、**doch** の方が多少は強く発音されるという点では **Thurmair** と類似する考えである。(83)では先行する **ja** が後続の比較的強いアクセントを付与された **doch** の「非難」という意味機能を強調しており、(84)では先行する **doch** が後続する **ja** の「要求」を強意している。ここでの **doch** がより弱いアクセントで補助的な役割を果たしていると解釈することは、命令文の **ja** にアクセントが付与されることが可能であったことも論拠となると考えられる。

ただし、3.5. で考察したように **aber** と **doch** という内在的意味の類似した不変化詞のシンタグラマが確認されており、類似した意味を持つ不変化詞が結合されにくいかどうかという議論に関しては異議を唱えることができよう。

さて、**aber ja / ja aber** についても少し論じたい。応答詞においては **aber ja** という語順のみが確認され、その際は応答詞の **ja** を **aber** が強調していると考えられた。しかし心熊詞の結合においては **aber ja** も **ja aber** も見つけることができなかった。これは心熊詞としての **aber** と **ja** の意味が逆であり矛盾が生じるからだと推測される。つまり、心熊詞 **ja** は先行する発話への反応という側面は弱く、事実性を主張するものであるが、心熊詞 **aber** は、事実性の主張ではなく、その命題を想定はしていたが、それは現実世界と大きく異なっていることに対する話し手の反応を表現することから、両者が結合して用いられることは難しいと考えられる。ただしこの点に関しては今後、コーパスなどを用いたより広範囲な分析が必要である。

ところで **Grimm (2004)** は単独で生起する応答詞の **doch** は、18 世紀になってようやく用いられ始めたと主張し、また心熊詞としての **doch** については 16 世紀以降からの例文を豊富に挙げている。つまり **doch** の意味機能変容の可能性は (表 4) 「**doch** の機能の発展」のようにまとめることができよう。

この拡大の様子からも **doch** においては、心熊詞がそれ以前から存在する接続詞と接続副詞という意味機能で発生したものであるということ、また応答詞が接続詞・接続副詞あるいは心熊詞から発生したものであると主張されよう。

(表 4) 「doch」の機能の発展

	6-11Jh.前半	11Jh.後半-15Jh.	16Jh.-	(18Jh.)	現代
	got.	ahd.	mhd.	nhd.	
接続詞	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
接続副詞	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
心懸詞	(心懸詞)	(心懸詞)	心懸詞	⇒	⇒
				応答詞	⇒

3.7. 話法詞の応答機能

続いて付随的ではあるが、文副詞の応答機能の発達についても考えてみたい。文副詞とは発話の蓋然性の程度を表したり、命題に関して価値評価的・感情的な判断を表現したりする語のことである。多くの場合、心懸詞はそれ一語で文の代わりを果たすような機能は持ち合わせていないが、話法詞の多くはそれが可能であり、決定疑問文の応答として用いられる。

(85) A: Haben Sie dafür ein Interesse?

B: *Selbstverständlich!*

A: あなたはそれに興味がありますか?

B: もちろんです!

(85)のように、文副詞の多くはそれ一語で決定疑問文に対する応答として機能することができる。では、なぜこのようなことが許容されるようになったのであろうか。これには2つの可能性が考えられる。1つ目は文の縮小と考える立場である。

(86) A: Kommst du mit?

B: Ja, ich komme *freilich* mit.

A: 一緒に来るかい?

B: ああ、もちろん行くとも。

(87) A: Kommst du mit?

B: Ja, *freilich*.

A: 一緒に来るかい？

B: ああ、もちろん。

(88) A: Kommst du mit?

B: *Freilich*.

A: 一緒に来るかい？

B: もちろん。

完全な応答としては(86)のように文の形式によるものが念頭に浮かぶが、(86)Bの発話は、先行するAの疑問文の繰り返しとなっている部分がほとんどで、新情報のみでの応答となれば(87)Bの発話となる。また(87)Bに残されたjaと*freilich*はいずれもBが肯定の返答をしていることを示しており、同じ意味を担っている。そこで、形態が小さく、磨耗しやすいjaが消失して、(88)Bのような*freilich*単独での発話が可能になったと推測されるのである。ここでは、*selbstverständlich*や*freilich*のように文副詞としての機能と心態詞としての機能の両者を持ち合わせる語が、文副詞からではなく、独立性と内在的意味が比較的弱い心態詞から、独立性と内在的意味がきわめて強い応答詞へと文法化を起こすことは考えられにくいということも併せて考慮されていると言える。

また2つ目の立場としては、元来の意味機能から直接応答詞への文法化が起こった可能性が挙げられる。(85)Bの*selbstverständlich*や(86)から(88)のBにある*freilich*は元来、事実主張の副詞として「もちろん、自明のことである」という意味を保持するものである。これらの副詞が本来の意味内容を基盤として保持しつつ、応答詞としても発達し、文相当語句として独立した機能を果たしうるようになったと考えられるのである。

本章は不変化詞の中間的アクセントの存在を認め、その意味機能の再分類を提案し、またドイツ語の不変化詞の共起関係を発話意図との関連で説明しようという点では新しい試みを行うことができたといえよう。しかしながら、不変化詞が直接隣り合わずに一つの文に共起する場合に複合された意味機能を持ちうるのかという点や、心的態度を表出する不変化詞以外の語と不変化詞の結合などには言及できておらず、それらの考察は今後の課題としたい。

4. 英語・オランダ語との比較対照

本章では、ドイツ語と同じくインドヨーロッパ語族、なかでも西ゲルマン語派に属し、系統的にきわめて近い存在である英語とオランダ語における、*doch* とその周辺語の対応物を観察し、ドイツ語との比較を行う。その中で、それぞれの言語における用法の相違を確認していきたい。まずは英語における話し手の心的態度を表す現象を考察する。その後、ドイツ語と地理的にも近く、形態もよく似ているオランダ語の *toch* の用法を考察し、*doch* の周辺領域について論じていく。

4.1. 英語の副詞・心態詞対応物

英文法において「心態詞」というカテゴリーは存在しない。ただし法助動詞によるモダリティ表出や、談話標識やディスコースマーカ―などの術語を用いて発話における論理展開を考察する研究は近年、語用論や認知言語学などの分野において盛んに行われている。

ここでは命題あるいは情報と話し手の距離に注目して例を観察し、ドイツ語との比較を行うこととする。

(89) ??That lady is your mother.

あの女性はあなたのお母さんだ。 神尾／高見(1998:54)

(90) That lady is my mother.

あの人はわたしの母よ。 神尾／高見(1998:55)

(91) Isn't that lady your mother?

あの女性はあなたのお母さんじゃないの？ 神尾／高見(1998:55)

(92) I think that lady is your mother.

あの女性はあなたのお母さんだと思うよ。 神尾／高見(1998:55)

(93) I believe that lady is your mother.

あの女性はあなたのお母さんだと思うよ。 神尾／高見(1998:55)

神尾／高見(1998:54ff.)は上記のような例を用いて説明している。そこでは(89)が会話として不自然であるのに対し、(90)は問題ない発話である理由が、「話し手と情報との関係」に起因すると主張されている。つまり情報やその対象が話し手のテリトリーに含まれるかどうかが重要になる。これはドイツ語心態詞が「話し手の想定」と「現実」の関係についての大きな標識になっている点と関連する部分があると考えられる。前述したように、例えば *doch* の場合は話し手の想定と現実の対立（あるいは乖離）を表出し、*ja* の場合は想定と現実が一致しているという話し手の認識が表現されている。同様に英語では *I think* や *I believe* のようなフレーズで話し手の心的態度が表出されたり、話し手と命題の距離が縮められたりしているのである。

また澤田(2006:422)は法助動詞について次のような例を挙げている。

(94) *May* God grant you happiness!⁵⁴ 澤田(2006:422)

神様があなたに幸せを授けて下さいますように！

(95) Let us pray that peace *may* return to our troubled land. 澤田(2006:422)

私たちの荒れた祖国に平和が戻ってくるように祈りましょう。

(96) We hope everybody *may* find this proposal acceptable. 澤田(2006:422)

みんながこの提案を受け入れ可能なものだと思ってくれるように願っている。

(97) It's astonishing that she *should* say that to you. 澤田(2006:422)

彼女がそんなことをあなたに言うなんて（信じ難い）。

(98) It strikes you as odd that Ackroyd *should* have flown into a rage about so trivial a matter. 澤田(2006:422)

アクロイドがそんなささいなことで激怒したなんてあなたにはおかしいと感じられる。

⁵⁴ 例文(94)から(99)の斜体は澤田による。また日本語訳も澤田による。

(99) “Why the hell *should* he stick his neck out?” 澤田(2006:422)

「一体なぜ彼は余計なことをして面倒を起こすんだ」

また、これらの例と関連するものとして、ドイツ語の例を以下に挙げる。

(100) Wenn er *bloß* bald käme! 井口(2000:140)⁵⁵

彼が早く来さえすればなあ。

(101) Wenn *doch* nur Michael hier wäre! 井口(2000:140)

ミヒャエルさえここにいてくれればなあ。

(102) Hätte er *nur* etwas gesagt! 井口(2000:140)

彼が何か言ってさえすればなあ。

(103) Das kann *doch* nicht wahr sein! (アクセス和独辞典)

まさかそんなことはありえないよ！

(104) Warum benimmt sie sich so schlecht, wo sie *doch* so viel Bildung hat?⁵⁶

彼女は、あれほど教養があるというのに、どうしてあんなに行儀がわるいのだろうか？ 岩崎(1998:295)

英語では助動詞によってモダリティを表出するというのは一般的に知られていることであるが、澤田はなかでも *may* と *must* について詳述しており、(94)から(96)には願望的モダリティ、(97)から(99)には評価的モダリティが表れていると言う。まずは願望的モダリティについて考えてみたい。上記(94)から(96)は、話し手が命題が実現化されることを望んでいることはすぐに理解できようが、その実現化が可能であるかどうかという見通しのようなものはもちろん読み取ることができない。ドイツ語の例文(100)から(102)においても同様のことが言えると考えられる。ドイツ語の接続法Ⅱ式は非現実の願望文に用いられ、英語の

⁵⁵ (100)から(102)の日本語は井口による。

⁵⁶ 斜体は岩崎による。

法助動詞と類似する機能を果たしている。さらにドイツ語の場合は接続法に加えて心態詞によるモダリティの強化も行われていると見受けられるのである。井口(2000:140f.)によれば、*bloß* と *nur* を用いた文は「話し手はさまざまなことを想定している、あるいは想定され则认为しているが、実際に願っているのはそのことだけであることを表す」ものであり、*doch* を用いた文は「想定世界の命題が現実世界に対立することを表す。それにも拘わらずその実現を願っていることになり、結果的に強い願望を表す」ものである。これらの話法性は英語の法助動詞の機能と一致すると考えられる。

続いて評価的モダリティについてである。ドイツ語心態詞と同様、英語においても命題内容に対する話し手の評価・認識が表出されている。その感情は(97)においては「話し手にとって心理的・感情的に受け入れ難い」⁵⁷というものであり、(98)においては「聞き手にとって不可思議である」⁵⁸というものであり、(99)においては「話し手にとって理解し難い」⁵⁹というものである。同様に(103)と(104)では話し手にとって信じがたいという態度が表されている。また英語、ドイツ語いずれにおいてもモダリティの標識となる *should* や *doch* は副文の中に生起することも可能である。

4.2. オランダ語の副詞・心態詞対応物

オランダ語の不変化詞研究については、例えば、Abraham(1981)や Wenzel(2002)などが挙げられるが、日本語で記述したものはほとんど見当たらない。その中で朝倉(1983:157)は副詞について述べているところの注釈で以下のような例を挙げている。

(105) Doe *wel* en zie niet om.⁶⁰

邁進せよ、左顧右盼するな。 朝倉(1983:157)

(106) Is het *toch* waar?

それは真に本当か。 朝倉(1983:157)

⁵⁷ 澤田(2006:423)

⁵⁸ 澤田(2006:423)

⁵⁹ 澤田(2006:423)

⁶⁰ (105)と(106)の斜体は朝倉による。

これらの例文に用いられている斜体の不変化詞はいずれも心態詞に相当する機能を果たしているとみなすことが可能であるが、そのような機能についての言及はなされておらず、詳細は触れられてはいない。とはいえ、独蘭辞典や蘭独辞典の例文を観察していくと、やはり以下のようにオランダ語にも心態詞機能があることは明らかである。

(107) Du weißt *doch*, was du mir versprochen hast.

Je weet *toch*, wat je me beloofd hebt Van Dale. (2008b:348)

君が私に約束したこと、分かっているだろうね。

(108) Es ist *sowieso* schon spät.

Het is *toch* al laat. Van Dale(2008b:348)

いずれにせよ、もう遅いよ。

(109) Pass *doch* auf!⁶¹

Let *toch* op! Van Dale(2008a:96)

気を付けてよ！

(110) Hör *doch* endlich auf!

Hou *toch* eindelijk eens op! Van Dale(2008b:348)

いい加減にやめなさい！

(111) Der war *vielleicht* wütend!

Hij was me *toch* kwaad! Van Dale(2008b:348)

その人のなんと激怒していることか！

(112) Wären wir *doch* zu Hause!⁶²

Waren we *maar* thuis! Van Dale(2008a:96)

⁶¹ (107)から(114)の斜体は筆者による。

⁶² オランダ語にはドイツ語の接続法に相当するものはなく、過去形を用いて現在の現実と理想の乖離を表出する。

家にいられたらなあ！

(113) Wäre er *nur* da.

Was hij er *maar*. Van Dale(2008b:200)

彼がここにいればなあ。

(114) Es gibt schon zu viele Autos, *nicht wahr*?

Er zijn al te veel auto's, *ja toch*? Van Dale(2008b:155)

すでに車が多すぎないかい？

(107)と(108)は *toch* が平叙文で用いられている。(107)で話し手は聞き手に対して約束の実現を要求し、(108)では諦めのような感情が表出されている。(109)と(110)は *toch* が命令文で用いられており、要求の実現が求められている。(111)は感嘆文での用例で、*toch* によって話し手の驚きが表出されている。(112)と(113)の *maar* はいずれも願望文で用いられている。(114)は付加疑問文的な用例で、*ja toch* によって同意を求めている。これらの例を見ただけでも、ドイツ語とほぼ同様な機能をオランダ語の不変化詞が果たしていることが明らかである。オランダ語 *toch* とドイツ語 *doch* の機能の比較については後に論じる。

4.3. ドイツ語 *doch* と同語源の語の比較対照

英語の *though* は古英語では *pēah* や *pāh* であり、ゴート語の *pauh*、オランダ語とドイツ語の *doch* と関連がある⁶³。寺澤(1997:1430)によれば、「古英語 *pēah* や中世英語で *thei*、*thagh* などに発達するが、1200 年ごろから古ノルウェー語 *pó* の影響による異形 *boh*、*thogh* が生じ、次第に古英語以来の発達形を駆逐して、1500 年以後 *though* が完全に標準形となった。*laugh*、*cough*、*tough* と同じ音の発達を示す *thof* という形は 18C 半ごろまでの文献に散見されるほか、方言には現在も残る」という。また、ゲルマン語の *p* すなわち *th* という子音はドイツ語では *d* に推移する現象⁶⁴があることから、オランダ語の *toch* には大きな

⁶³ オランダ語にも *doch* という綴りはあるが、筆者が行った調査対象では *toch* という綴りでしか用いられていなかった。

⁶⁴ 相良(1992:47)によれば「ゲルマン語の *p* (すなわち *th*) が *d* となったが、これはひとり高独語に限らず全ドイツ語にわたる推移現象であった」という。

子音推移は現れず、むしろドイツ語の *doch* のほうが変化した形であると推測される。

まずは *though* と *toch* それぞれの用法を確認し、その後、同じテキストを用いてドイツ語、英語、オランダ語で実際にどのように表現されるのかを考察していく。

4.3.1. *though*

(115) a shabby *though* comfortable sofa

座り心地はよいがみすぼらしいソファー 小西／南出(2001:2234)

(116) The browser is free, *though* downloading could take an hour or more over a slow modem connetion.

ブラウザーは無料である。もっともダウンロードするには遅いモデムだと 1 時間かそれ以上かかる場合がある。 小西／南出(2001:2234)

(117) Late *though* [as, 《まれ》although] it is, we'll stay a little longer.

遅くなったが、もう少しいます。 小西／南出(2001:2234)

(118) *Even though* I've been acting for years, I still get a thrill out of going on stage.

何年も役者をやっているが、舞台に出るのは今でもわくわくする。 小西／南出(2001:2234)

(119) *Although* she's a beginner, she played with great enthusiasm.

彼女は初心者だが、たいへん熱心にプレーした。 小西／南出(2001:2234)

(120) The team lost. It was a good game, *though*.

チームは負けた。けれど、いい試合だった。 小西／南出(2001:2234)

(121) *The team lost. It was a good game, *although*. 小西／南出(2001:2234)

英語の *though* は逆接、譲歩の機能を持つ従属接続詞である。Oxford(1997:1556)によれば *obwohl* や *aber*、*auch wenn*、*trotzdem* などの意味がある。(115)のように語と語を接続

したり、(116)のように文頭に、(117)のように文中に生起し、副文を導いたりすることができる。(118)のように *even* を伴って強意形を作ることがある。また(119)のように *all* の意味をもつ *al-*とつながった *although* という形態もあり、こちらは元来 *even* を伴うことができないとされていたが、最近ではよく用いられるようになってきた⁶⁵。さらに、*though* は(120)のように副詞的な用法も許容するが、*although* は(121)のように用いられない。これは *although* 自体の接続機能が強いことに起因すると推測される。

このように *though* の代表的な働きは接続機能であるが、ディスコースマーカ⁶⁶としての機能も併せ持つと主張する者もいる。Hopper/Traugott(2004:129)は(122)の例文を用いて以下のような説明をしている。これは話し手 S が自分の息子に従軍を拒否するようアドバイスした理由を説明した後、二番手の話し手 C が仲間への尊敬の念による拒否者の後ろめたい感情という副次的なトピックを持ち出しているところである。

(122) S: but if thIs kid makes a mistAke on THIS one, he may not have a CHANCE
to corrEct it.

C: hh uh LISten anOther factor *though* YOU brought up, ...

S:でももしこの子がこの件で失敗したら、それを正すチャンスはないのではなかしら。

C:うーん、他の理由も聞きなさい。お前が育てていると言ってもだね、...⁶⁷

Here *though* is more like a discourse marker that serves to manage the segments of the discourse than an adverbial particle meaning ‘however’ signaling a concessive relationship between two utterances. Barth-Weingarten and Couper-Kuhlen show that 11% of the occurrences of *though* have this unambiguous discourse-marking function. On the other hand, the purely concessive use was represented by only 14%.

⁶⁵ 小西／南出(2001)は、「*although* はそれ自体 *though* の強調形なので *even although* は誤りとされてきたが、最近ではよく用いられる」と記述している。

⁶⁶ Hopper/Traugott(2004:129)は“Discourse markers are a category of words that indicate how the listener is to relate the upcoming discourse to the previous discourse” 「ディスコースマーカとは聞き手が前の談話を次に行われる談話とどのように関連付けるべきかを表示する語群のことである」と述べている。

⁶⁷ 大文字部分は Hopper/Traugott によるもので、アクセントが置かれることを表している。日本語訳は筆者による。

The remaining 63% occupy a grey area between the concessive and the discourse-marking functions.

ここでの *though* は、二つの発言間にある譲歩関係の兆しとなるような‘however’の意味を持つ副詞的な不変化詞というよりもむしろ、発話の区切りを処理するために機能する談話標識である。Barth-Weingarten と Couper-Kuhlen は *though* の生起における 11%はこのようなまぎれもない談話標識機能であることを示している。これに対し、純粋な譲歩の用法はたった 14%にしか見られない。残りの 63%は譲歩と談話標識機能の間のグレーゾーンを占めているのである。⁶⁸

このように譲歩の意味が薄れて会話の区切れ目のような、つまりフィラー的な用法の *though* もあるという点で、*doch* の心態詞機能との類似を指摘することが可能ではなかろうか。ここで *though* は *doch* のように話し手 C にとっての聞き手（話し手 S）の発話に対する「対立・反駁」の感情マーカであるといえることができるのである。

4.3.2. Toch

ファン・ステルケンブルク(2005:802)によれば、*toch* の意味は「それでも、やはり、それにもかかわらず、しかし」、「確かに、本当に、全く」、「どっちみち、いずれにせよ、とにかく」、「一体」、「どうか、ぜひ」、「…ですね」である。以下挙げられている例を文タイプ別に観察していく。

まずは平叙文である。

(123) Je moest nu *toch* klaar zijn.⁶⁹

Du müsstest nun doch bereit sein.

もうそろそろ準備が済んでいて当然だ。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(124) Hij is *toch* wel knap.

Er ist doch wohl klug.

⁶⁸ 斜体は Hopper/Traugott によるもので、日本語訳は筆者による。

⁶⁹ (123)から(145)の日本語訳はファン・ステルケンブルクによるもので、斜体は筆者による。またドイツ語によるグロスも筆者による。

彼はやっぱり頭がさけるね[恰好がいいね]。ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(125) Hij komt *toch* niet.

Er kommt doch nicht.

彼はどうせ来ない。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(126) Het is *toch* te erg.

Das ist doch zu schlecht.

全くひどすぎるね。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(127) Het is *toch* al moeilijk.

Das ist doch wirklich schwer.

それだけでもう難しいのに。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(123)では話し手の想定が実現されているべきだという強い要求が表現されている。(124)では話し手の想定が否定される可能性を乗り越えて、やはり自分の考えが正しかったのだという確信が表現されている。(125)では来るべきところだが来ないであろうという想定の実現を予想している。(125)と(126)と(127)はあきらかに似た気持ちが表現されている。ところで(125)で「どうせ」という訳語が与えられているが、この点に関して Foolen(2013)は次のように述べている。

Auf der Ebene der Gebrauchsweisen haben wir gesehen, dass die Unterschiede hier größer sind. Diese Unterschiede bewegen sich aber hauptsächlich auf der Ebene der *Gebrauchskontexte*: Im Niederländischen wird *toch* in W-Fragen benutzt, wo Deutsch *doch* diesen Kontext meidet usw. Nur in zwei Fällen gab der Gebrauchsunterschied Anlass, eine Bedeutungsspezifizierung vorzunehmen, nämlich beim Gebrauch von N. *toch* in der Bedeutung *sowieso* und bei der konjunkionalen Gebrauchsweise von *doch* im Deutschen (und *toch* sofern es noch im Niederländischen als Konjunktion verwendet wird).

用法というレベルにおいて相違が大きいということを我々は確認した。しかしながら

この違いはとりわけ用いられるコンテキストのレベルで展開される。オランダ語において *toch* は補足疑問で用いられるが、ドイツ語の *doch* はこのようなコンテキストを避けようとするなどといったようなものである⁷⁰。用法の違いが意味の明確化を行う要因を与えるのは2つの場合のみであり、つまり *sowieso* の意味でオランダ語 *toch* が使用される場合とドイツ語の *doch* の接続用法（そして *toch* がオランダ語において接続詞として未だに用いられている限りにおいて）の場合のみである⁷¹。

Foolen(2013)は *sowieso*（どっちみち）の意味で用いられる *toch* の心態詞機能と *doch* の接続機能には明確な相違があると主張することによって、両者の心態詞機能において大きな差異がないことを指摘したいと推測する。はたして *doch* と *toch* には差異はないのだろうか。両者の作用領域については今後さらなる議論が必要であると思われる。

さて、次に確認疑問文における *doch* を観察する。

(128) Je bent *toch* ziek?

Du bist doch krank

君、病気だといったじゃないの。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(129) Je hebt er *toch* nog een?

Du hast das doch noch eins

もう一つ持ってるでしょ。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(130) Je komt *toch*?

Du kommst doch

もちろん来るでしょ。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(131) Hij doet *toch* zijn best?

Er macht doch sein Bestes

彼、よくがんばってるでしょ。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

⁷⁰ ドイツ語の *doch* は補足疑問文においても生起する。

⁷¹ 斜体は Foolen によるもので、日本語訳と下線は筆者による。

(128)では非難、(129)から(131)は同意を求める気持ちが表現されている。

次に補足疑問文を見てみる。

(132) Wat will hij *toch*?

Was will er doch

彼は一体どうしたいの。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(133) Wat mankeert hij *toch*?

Was los-ist er doch⁷²

彼一体どうしたの? ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(134) Wie kan het *toch* zijn?

Wer kann das doch sein

一体だれでしょう? ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(135) Welke Jan bedoel je *toch*?

Welchen Jan bedeutest du doch

どのヤンのこと言ってるの? ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(136) Hoe [waar, waarom, wanneer] *toch*?

Wie [wo, warum, wann] doch⁷³

一体どうして [どこに、なぜ、いつ]? ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(137) Waar zou hij *toch* zijn?

Wo sollte er doch sein⁷⁴

一体彼はどこにいるのだろう? ファン・ステルケンブルク(2005:802)

⁷² Was ist ihm doch los? 本文にはオランダ語に対応するドイツ語の単語を掲載し、ふさわしいと思われるドイツ語文が別の形となる場合は注に記す。

⁷³ Wie [wo, warum, wann] denn?

⁷⁴ Wo wird er doch sein?

このように *toch* は様々な疑問詞を用いた補足疑問文に生起することが可能である。またドイツ語の *doch* と同様、決定疑問文での用例は挙げられていなかった。

続いて要求文である。文字通り、話し手が想定する出来事の実現を要求している。

(138) Ga *toch* zitten!

Geh doch sitzen⁷⁵

どうぞおかけください; もう座りなさい。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(139) Neem *toch* nog een kop koffie.

Nimm doch noch eine Tasse Kaffee

まあコーヒーをもう 1 杯飲めよ。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(140) Wees *toch* stil!

Sei doch still

もう黙りなさい。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(141) Antwoord *toch* niet.

Antworte doch nicht

答えてやるな。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

Toch はさらに以下のように感嘆文でも用いられる。

(142) Wat is het *toch* jammer!

Was ist das doch schade

いかにも残念だ。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(143) Maar Thelma *toch*!

⁷⁵ Setz dich doch!

Aber Thelma doch⁷⁶

(同情など) まあ、テルマ、ほんとに！ ファン・ステルケンブルク(2005:802)

ここでも想定と現実の乖離が表出される。

最後に間投詞のような用法も見い出された。これはドイツ語の応答詞の機能と通じるところがあると思われる。

(144) Wij gaan morgen. – Nee *toch*?

Wir gehen morgen. – Nein doch

私たちは明日行くよ。ーえ、ほんとに？ ファン・ステルケンブルク(2005:802)

(145) Ja *toch*, nu herinner ik het me.

Ja doch, nun erinnere ich das mich⁷⁷

ああ、やっぱり。今思い出した。 ファン・ステルケンブルク(2005:802)

以上のように、オランダ語の *toch* はドイツ語の *doch* と同じ文タイプに生起することができ、心態詞としてはほぼ同様の機能を果たすことが観取できた。Foolen(2013)が「*toch* がオランダ語において接続詞として未だに用いられている限りにおいて」との断り書きをしていることと一致するように、ファン・ステルケンブルク(2005:802)に、接続詞として用いられている例は挙げられていなかった。よって、オランダ語の *toch* のほうが本来的な「対立」の意味の希薄化が進んでいる可能性があると言える。この点に留意しながら、次に同じテキストで両者がどのように機能しているかを、英語も含めて詳細に検討したいと思う。

4.4. 『星の王子さま』における *doch* とその対応語の比較対照

サンテグジュペリの『星の王子さま』は元来フランス語で書かれたものであるが、世界中で翻訳され親しまれている物語である。本稿では、この物語のドイツ語版、英語版、オランダ語版、日本語を用いて *doch* とその対応語について考察する。いずれの場合も *doch* やその対応物が必ずしも生起するとは限らないが、どのような表現が他の言語で同等の効果を

⁷⁶ ドイツ語においてこのような表現が可能かどうか不明である。

⁷⁷ Ja doch, nun erinnere ich mich daran.

生み出しているのかを観察することは個々の言語の特徴を理解するために有用といえよう。

4.4.1. 平叙文

まずは平叙文における *doch* とその対応物について考察する。

まずは接続副詞的機能について観察する。

(146) »Die Menschen bei dir zu Hause«, sagte der kleine Prinz, »züchten fünftausend Rosen in ein und demselben Garten... *und doch* finden sie dort nicht, was sie suchen...« (80)⁷⁸

“People where you live,” the little prince said, “grow five thousand roses in one garden...*yet* they don’t find what they’re looking for...” (71)

- Bij jou kweken de mensen vijfduizend rozen in één tuin, zei het prinsje, en ze vinden daarin niet wat ze zoeken.
- Nee, dat vinden ze niet, antwoordde ik.
- *En toch* zouden ze kunnen vinden wat ze zoeken in één enkele roos of in een beetje water. (77)

「きみの星の人たちは」と王子さまは言いました。「一つの花園で、五千本もの薔薇の花を栽培しているけれど……自分たちが何を求めているのかわからないんだね……」 (128)

(147) Ich schloss ihn fest in die Arme wie ein kleines Kind, *und doch* schien es mir, als stürzte er senkrecht in einen Abgrund, ohne dass ich imstande war, ihn zu rückzuhalten... (85)

I was holding him in my arms like a little child, *yet* it seemed to me that he was

⁷⁸ 以下、『星の王子さま』による例文中の斜体は特記のない限り、筆者による。また各言語の文の最後にある数字は、それぞれの版のページを表す。

dropping headlong into an abyss, and I could do nothing to hold him back. (76)

Ik voelde wel dat er iets wonderlijks aan het gebeuren was. Ik sloot hem vast in mijn armen als een klein kindje *en toch* was het alsof hij loodrecht weggleed in een afgrond zonder dat ik er iets aan kon doen ... (81)

ぼくは幼児を抱くように、彼を抱きしめました。それなのに、ぼくには引きとめるすべも無く、彼がまっ逆さまに深い淵のなかへおちていくような気がしたのです
…… (136)

(146)と(147)は典型的な接続詞的な使用の例である。いずれもドイツ語 *und doch* に対して英語 *yet*、オランダ語 *en toch* (*und doch* の意味) が対応しており、3 言語ともにこれらの表現で逆接接続が表出されている。また日本語においても接続表現によって逆接の意味が表されている。

続いて、ドイツ語に見られた *aber doch* というシンタグマと同類の表現がオランダ語にも見られる例を挙げる。

(148) Der kleine Prinz konnte sich nicht erklären, wozu man irgendwo im Himmel, auf einem Planeten ohne Haus und ohne Bewohner, eine Straßenlaterne und einen Laternenanzünder braucht. *Doch* sagte er sich:
Es kann ganz gut sein, dass dieser Mann ein bisschen verrückt ist. *Doch* ist er weniger verrückt als der König, der Eitle, der Geschäftsmann und der Säufer.
(51)

The little prince couldn't quite understand what use a street lamp and a lamplighter could be up there in the sky, on a planet without any people and not a single house. However, he said to himself, *It's quite possible that this man is absurd. But he's less absurd than the king, the very vain man, the businessman,*

*and the drunkard.*⁷⁹ (40)

De kleine prins begreep maar niet waarvoor een lantaarn en een opsteker wen konden dienen, ergens in het luchtruim op een planeet zonder his of bevolking. *Maar toch* zei hij tegen zichzelf:

«Die man is misschien wel dwaas, *maar toch* altijd minder dwaas dan de koning, de ijdelruit, de zakenman of de dronkaard. ...» (46)

王子さまは、宇宙のどこかにある、家も無いし住人もいない星の上で、街灯と点灯夫とがいったいどんな役に立つのか、よくわかりませんでした。それでも、心のなかで思いました。

《この人はちょっとおかしいのかもしれない。でも、王さまや見栄張り男や事業家や飲み助ほど、理屈にあわないわけではないな。・・・》 (77)

(148)には観察すべきところが2か所ある。一つ目はドイツ語 *doch* に対して英語 *however*、オランダ語 *maar toch* (*aber doch* に相当)が対応する点である。二つ目はドイツ語 *doch* に対して英語 *but*、オランダ語 *maar toch* が表れている点である。いずれの *doch* も文の第一位を占めていることから文肢性を持っており、逆接の接続副詞と認定することができる。英語の *however* と *but* も逆接、*maar toch* も逆接の接続詞として機能している。

また *doch* は生起していないが、(148)と同じく逆接が表される場合もある。

(149) *Aber* er verzaubertet dieses ganze Haus. Mein Haus barg ein Geheimnis auf dem Grunde seines Herzens...

»Ja«, sagte ich zum kleinen Prinzen, »ob es sich um das Haus, um die Sterne, oder um die Wüste handelt, was ihre Schönheit ausmacht, ist unsichtbar!« (77)

But it cast a spell over that whole house. My house hid s secret in the depths of

⁷⁹ 英語版では登場人物の独白箇所は斜体で表現されている。本稿において例文中の観察対象は斜体を用いてマーキングしていたが、このように元から斜体となっているところについては太字と下線を用いてマーキングすることとする。

its heart...

“Yes,” I said to the little prince, “whether it’s a house or the stars or the desert, what makes them beautiful invisible!” (68)

Maar toch betoverde hij het hele huis. Mijn huis verborg een geheim in de diepte van zijn hart.

- Ja, zei ik tegen het prinsje, of het nu een huis is, sterren of de woestijn – hun werkelijke schoonheid is onzichtbaar. (74)

「…でも、その宝物が家全体に魔法をかけていたのです。ぼくの家は、その奥の方に一つの秘密を隠していたのです……」

「そうなんだ。家でも星でも砂漠でも、その美しさを成り立たせているものは、目に見えないのさ」とぼくは王子さまに言いました。 (123)

(150) »Es sind nun Millionen Jahre, dass die Blumen Dornen hervorbringen. Es sind Millionen Jahre, dass die Schafe *trotzdem* die Blumen fressen. Und du findest es unwichtig, wenn man wissen möchte, warum sie sich so viel Mühe geben, Dornen hervorzubringen, die zu nichts nutz sind? ... « (28)

“For millions of years flowers have been producing thorns. For millions of years sheep have been eating them *all the same*. And it’s not serious, trying to understand why flowers go to such trouble to produce thorns that are good for nothing? ...” (20)

– Sinds miljoenen jaren krijgen de bloemen doornen. En sinds miljoenen jaren eten de schapen *toch* die bloemen op. En is het da geen serieuze bezigheid om te proberen te begrijpen, waarom ze zoveel moeite doen voor die doornen, die nooit enig nut hebben? ...⁸⁰ (27)

⁸⁰ この文章中の *toch* はもとから斜体で表記されている。

「何百万年も前から、花は棘を作っているし、何百万年も前から羊はそれでも花を食べている。花がなぜ、まったく役に立たない棘を作るのにあれほど苦勞しているのかを理解しようとするのが、大事じゃないというの？ …」(42)

(151) »Ich wollte ihn gerade holen, aber Sie sprachen mit mir!«

Dann hatte sie sich neuerlich zu ihrem Husten gezwungen, um ihm *trotzdem* Gewissensbisse aufzunötigen. (33)

“I was going to look for one, but you were speaking to me!”

Then she made herself cough again, in order to inflict a twinge of remorse on him *all the same*. (24)

– Ja, ja – ik wilde het net gaan halen maar u sprak nog tegen me.

Toen had ze haar kuch nog wat aangedikt om hem *toch* een beetje berouw te laten voelen. (31)

「それを取りに行こうとしたら、きみが話しかけてきたんじゃないか！」

すると彼女は、わざと咳払いをして、王子さまにすまない気持ちを起こさせて苦しめました。(49)

(152) Ich setzte meinen Weg zur Mauer fort. Ich sah und hörte niemanden.

Dennoch erwiderte der kleine Prinz von neuem: (83)

I continued walking toward the wall. I still could neither see nor hear anyone, *yet* the little prince answered again: (73)

Ik liep door, op de muur af. Nog altijd zag of hoorde ik niemand. *Toch* antwoordde de klein prins weer: (79)

ぼくは壁の方へ歩いて行きました。相変わらず誰ひとり見当たらないし、誰の声も聞こえませんでした。けれども、王子さまはまた言い返しました。 (132)

(153) Ich machte eine Gebärde der Hoffnungslosigkeit; es ist sinnlos, auf gut Glück in der Endlosigkeit der Wüste einen Brunnen zu suchen. *Dennoch* machten wir uns auf den Weg. (76)

I made an exasperated gesture. It is absurd looking for a well, at random, in the vastness of the desert. *But even so*, we started walking. (67)

Ik maakte een vermoeid gebaar: het was onzinnig om in het wilde weg een put te zoeken in de onmetelijke woestijn. *Maar* we gingen *toch* op stap. (73)

ぼくは気の無いそぶりをしました。果てしない砂漠のなかを、当てもなく井戸を探して彷徨うなんて、ばかげています。それでも、ぼくたちは歩き始めました。 (121)

(149)ではドイツ語 *aber*、英語 *but*、オランダ語 *maar toch* が表れている。そして(150)と(151)のいずれにおいても、ドイツ語 *trotzdem*、英語 *all the same*、オランダ語 *toch* が生起しており、これらの表現によって逆接的な接続が行われている。(152)ではドイツ語 *dennoch*、英語 *yet*、オランダ語 *toch*、(153)ではドイツ語 *dennoch*、英語 *but even so*、オランダ語 *maar toch* が用いられている。

これに対して中心的な意味が「対立・逆接」ではない語が対応する場合もある。

(154) Der, sagte sich der kleine Prinz, während er seine Reise fortsetzte, der wird von allen andern verachtet werden, vom König, vom Eitlen, vom Säufer, vom Geschäftsmann. *Dabei* ist er der Einzige, den ich nicht lächerlich finde. Vielleicht deswegen, weil er sich mit anderen Dingen beschäftigt statt mit sich selbst. (54)

Now that man, the little prince said to himself as he continued on his journey,

that man would be despised by all the others, by the king, by the very vain man, by the drunkard, by the businessman. Yet he's the only one who doesn't strike me as ridiculous. Perhaps it's because he's thinking of something besides himself. (43)

Terwijl het prinsje verder reisde bedacht hij, dat alle anderen op die lantaarnopsteker neer zouden kijken: de koning, de ijdelruit, de dronkaard en de zakenman. «*En toch* is hij de enige, die ik niet belachelijk vind. Misschien omdat hij zich met andere dingen dan met zichzelf bezighoudt.» (49)

この人は、ほかの人たちみんなから軽蔑されるだろうな、王さまからも、見栄張り男からも、飲み助からも、事業家からも、と王子さまは、さらに遠くへ旅をつづけながら思いました。でも、滑稽に見えないのはこの人だけだな。おそらくそれは、自分以外のことに一生懸命だからだろう。 (82)

(155) Auf dem ersten wohnte ein König.

Der König thronte in Purpur und Hermelin auf einem sehr einfachen *und dabei* sehr königlichen Thron. (37)

The first one was inhabited by a king. Wearing purple and ermine, he was sitting on a simple *yet* majestic throne. (28)

Op de eerste woonde een koning. Hij was in purper en hermelijn gekleed en zat op een eenvoudige *maar toch* heel statige troon. (34)

最初の惑星には、一人の王さまが住んでいました。その王さまは、真紅の服の上に白貂の毛皮を着て、たいへん簡素ですが威厳のある玉座に腰かけていました。(55)

(156) Und das ist wahr. Ich habe die Wüste immer geliebt. Man setzt sich auf eine Sanddüne. Man sieht nichts. Man hört nichts. *Und währenddessen* strahlt etwas

in der Stille. (77)

And it was true. I've always loved the desert. You sit down on a sand dune. You see nothing. You hear nothing. *And yet* something shines, something sings in that silence. ... (68)

En dat was waar. Ik heb altijd van de woestijn gehouden. Je gaat op een duin zitten. Je ziet niets en hoort niets. *En toch* straalt er iets in de stilte ... (74)

それは本当でした。ぼくはずっと砂漠が好きでした。砂山の上に腰をおろす。何も見えない。何も聞こえない。それなのに、何かがひそかに光を放っているのです…
… (122)

(157) Der da, sagte sich der kleine Prinz, denkt ein bisschen wie mein Säufer.

Indessen stellte er noch weitere Fragen:

»Wie kann man die Sterne besitzen?« (49)

The little prince said to himself, *This man argues a little like my drunkard.* *Nevertheless* he asked more questions. "How can someone own the stars?" (38)

– Dat is net zo'n redenering als van mijn vriend de dronkaard, zei het prinsje in zichzelf. *Maar* hij vroeg *toch* door:

- Hoe kun je sterren bezitten? (45)

この男は、あの飲み助みたいな理屈を言っている、と王子さまは心の中で思いました。

けれども、さらに質問をつづけました。

「どうすれば、星を所有することができるの」 (73)

上記はドイツ語では *doch* ではない副詞が表れているところで、英語、オランダ語では逆

接の接続詞が生起する例である。(154)においては、*dabei* というドイツ語に対して、英語では *yet*、オランダ語では *en toch* が用いられている。(155)においてはドイツ語の *und dabei* に対して、英語は *yet*、オランダ語は *maar toch* が表れている。(156)では *und währenddessen* に *and yet* と *en toch* が対応している。そして(157)では *Indessen*、*maar toch*、*nevertheless* が対応している。ここで興味深いのは、ドイツ語は *dabei* や *währenddessen* や *indessen* といった、本来的には逆接ではない、時間に関わる副詞が出現しているところで、英語とオランダ語においては接続詞による逆接接続がなされている点である。これらのドイツ語は今では「逆接・譲歩」の意味を持っているが、どのようにして「時間的意味」に「逆接・譲歩」が付加されたのであろうか。また *yet* や *toch* の逆接の意味が希薄して、単純な接続としての機能を果たしてきていると理解すべきなのであろうか。この点についてはいずれ論じるべき課題としたいと思う。

さらに、次のような例が見い出された。

(158) »Das ist möglich. *Doch* wenn die Moralität des Forschers gut zu sein schient, macht man eine Untersuchung übert seine Entdeckung.« (56)

“Possibly. *Well*, when the explorer’s moral character seems to be a good one, an investigation is made into his discovery.” (45)

- Dat is heel goed mogelijk. Dus als het gedrag van de ontdekkingsreiziger goed blijkt te zijn, stelt men een onderzoek naar zijn ontdekking in. (51)

「よくあることだ。だから、探検家が品行方正なときには、彼の発見したことを調査するのだ」 (86)

この(158)ではドイツ語の *doch* に、英語は *well*、オランダ語では *dus* (*deshalb* の意味) が対応している。また日本語でも順接の「だから」が用いられている。先ほどもでの例とは逆で *doch* の逆接の意味が薄れているとみられるような訳である。このように、翻訳の問題が介入するにせよ、異なる意味機能を持つ語が各言語で生起しているのは大変興味深い現象である。

さて次に心態詞の出現する場合についても取り上げたい。

(159) »Aber Ihr seid Geograf! – Und Städte und Flüsse und Wüsten?«

»Auch das kann ich nicht wissen.«

»Aber Ihr seid *doch* Geograf!« (56)

“And cities and rivers and deserts?”

“I couldn’t tell you that, either,” the geographer said.

“But you’re a geographer!” (44)

- En steden, rivieren en woestijnen?

- Dat kan ik ook niet weten, zei de aardrijkskundige.

- Maar u bent aardrijkskundige! (50)

「じゃあ、街や河や砂漠は？」

「それも分からない」と地理学者は言いました。

「だって、地理学者でしょう！」 (84)

(160) Er verlor ein bisschen den Mut. Aber er gab sich noch Mühe: (89)

He was a little disheartened now. But he made one more effort. (79)

Hij verloor de moed een beetje maar spande zich *toch* nog eens in. (84)

彼は少し落ち込んだ様子でしたが、また気を取り直してこう言いました。 (142)

(161) Gebt ihnen also den Rat, sich es auszurechnen. Sie beten die Zahlen an, das wird ihnen gefallen. Aber ihr sollt eure Zeit nicht damit verlieren. Es ist zwecklos. Ihr habt Vertrauen zu mir. (60)

So you should advise them to make their own calculations – they love numbers, and they’ll enjoy it. But don’t waste your time on this extra task. It’s unnecessary. Trust me. (49)

We zullen hun dus maar aanraden om het na te rekenen – ze zijn *toch* zo dom op cijfers: dat zullen ze heerlijk vinden. Maar verspil je tijd niet aan zulk monnikenwerk. Dat is niet nodig. Mij kun je echt geloven. (55)

だから、彼らに計算をするよう勧めてみてください。彼らは数字が大好きだから、きっとよろこぶでしょう。でも、そんなつまらないことに貴重な時間を費やしてはいけません。それは無駄なことです。ぼくの言うことを信用してください。 (92)

(162) »Du bist ungerecht, kleines Kerlchen, ich konnte nichts zeichnen als geschlossene und offene Riesenschlangen!«

»Oh! Es wird *schon* gehen«, sagte er, »die Kinder wissen *ja* Beschied.« (81)

“You’re being unfair, my little prince,” I said. “I never knew how to draw anything but boas from the inside and boas from the outside.”

“Oh, that’ll be all right,” he said. “Children understand.” (72)

- Je bent onredelijk, klein kereltje, ik heb *toch* nooit iets anders kunnen tekenen dan open boa’s en dichte boa’s.

- O, het zal best gaan, zei hij, de kinderen weten *wel* wat er bedoeld wordt. (78)

「それはないよ、坊や。中の見えないウワバミと中の見えるウワバミのほかには、何も描けなかったんだから」

「うん、まあ、いいよ。子供たちはわかってるから」 (130)

(159)ではドイツ語のみに心態詞 *doch* が表れており、(160)と(161)と(162)ではドイツ語には *doch* が出現していないが、オランダ語では *toch* が生起している。またこのような場

合に *toch* に対して副詞が用いられている文もある。

(163) Und der kleine Prinz machte sich davon.

Die Großen Leute sind *entschieden* sehr verwunderlich, stellte er auf seiner Reise fest. (45)

En toen ging hij weer verder.

«De grote mensen zijn *toch* wel wonderlijk,» zei hij tegen zichzelf, onder de reis. (42)

And the little prince went on his way.

“Grown-ups are *certainly* very strange,” he said to himself as he continued on his journey. (34)

《おとなって、本当に奇妙だな》と王子さまは、旅のあいだ、単純にそう思いました。 (67)

反対にドイツ語では *doch* が出現しているが、他の言語では副詞が出現している例が以下のものである。

(164) »Bewundern heißt erkennen, dass ich der schönste, der bestangezogene, der reichste und der intelligenteste Mensch des Planeten bin.«

»Aber du bist *doch* allein auf deinem Planeten!«

»Mach mir die Freude, bewundere mich trotzdem!« (45)

“To admire means to acknowledge that I am the handsomest, the best-dressed, the richest, and the most intelligent man on the planet.”

“But you’re the only man on your planet!”

“Do me this favor. Admire me all the same.” (34)

- Bewonderen betekent erkennen, dat ik de mooiste, de best geklede, de rijkste en de verstandigste man op de planeet ben.
- Maar je bent *helemaal* alleen op de planeet!
- Doe me een plezier en bewonder me toch! (41)

「褒めたたえるというのは、おれがこの星でいちばん美しく、いちばん身なりがよく、いちばん金持で、いちばん利口だと認めることさ」

「でも、この星にはきみひとりしかいないよ」

「おれを喜ばせておくれよ。たとえそうだとすると、褒めたたえておくれよ」 (66)

上例で明らかのように(163)ではドイツ語 *entschieden*、英語 *certainly*、オランダ語 *toch* が対応しており、(164)ではドイツ語 *doch*、英語は対応物なし、オランダ語は *helemaal* (「すっかり」の意味) が生起している。以上の例のように元来の「対立」という意味と言うよりむしろ単なる強調をするために機能している *doch* や *toch* も散見された。

続いて、*doch* と *toch* が英語の法助動詞と対応する例を挙げる。

(165) Aber das muss man *doch* schon nachsehen. Mein Freund hat mir nie Erklärungen gegeben. (19)

But here you'll have to forgive me. My friend never explained anything. (13)

Maar daar kan ik niets aan doen. Mijn vriend fag nooit uitleg. (19)

でも、その点は、多めに見ていただかなければなりません。ぼくの友だちは、一度だって説明してくれなかったのです。 (29)

(166) Ich gleiche *doch wohl schon* eher den großen Leuten. Ich musste *ja* im Laufe der Zeit älter werden. (20)

I *maybe* a little like the grown-ups. I *must* have grown old. (13)

Misschien lijkt ik een beetje op de grote mensen. Ik ben zeker oud geworden. (19)

ちょっとばかり、おとなの人たちみたいなのかも知れません。きっと歳をとってしまっただけでしょう。 (29)

(167) »Du weißt *doch*, wenn man recht traurig ist, liebt man die Sonnenuntergänge...«

»Am Tage mit den dreiundvierzig Mal warst du also besonders traurig?« (26)

And you *would* watch the twilight whenever you wanted to...

“One day I saw the sun set forty-four times!” And a little later you added, “You know, when you’re feeling very sad, sunsets are wonderful...” (19)

- Weet je, als je erg droevig bent, dan zie je graag de zon ondergaan...

- En was je die dag van drieënveertig keer dan erg droevig? (25)

「ねえ……ひどく悲しいときには、日の入りが好きになるものでしょう……」

「それじゃあ、四十四回も見た日は、よっぽど悲しかったんだね」 (38)

(168) So fragte ich mich: Was hat sich auf dem Planeten wohl ereignet? Vielleicht hat das Schaf *doch* die Blume gefressen... (91)

And then I wonder, *What’s happened there on his planet? Maybe the sheep has eaten the flower...* (81)

En nu vraag ik me af: «Wat zal er op de planeet gebeurd zijn? Misschien heeft het schaap de bloem wel opgegeten ... » (88)

そこでぼくは思うのです。《王子さまの惑星では、何が起こったんだろうか。ひょ

っとして、羊が花を食べてしまったんじゃないか……」 (148)

(169) Es wird so aussehen als wäre ich krank ... ein bisschen als stürbe ich. Das ist so. Komm nicht das anschauen, es ist nicht der Mühe ...«

»Ich werde dich nicht verlassen.« (87)

“It’ll look as if I’m suffering. It’ll look a little as if I’m dying. It’ll look that way. Don’t come to see that; it’s not worth the trouble.”

“I won’t leave you.” (78)

– Het zal zijn alsof ik pijn heb, een beetje alsof ik sterf. Zo is het nu eenmaal. Kom daar maar niet naar kijken. Het is de moeite niet waard ...

- Ik blijf *toch* bij je... (83)

「ぼく、病人みたいになるよ……少しだけ死んでいくみたいになるよ。こんなふう
にね。見に来ないでね。来なくていいからね……」

「ぼくはきみから離れないよ」 (141)

(165)では、ドイツ語において *müssen* で表現されている話し手の要求が英語では *will* を通じて表出されている。加えてドイツ語には *doch* も用いられている。オランダ語にはモダリティを表す語は用いられていない。(166)では *doch wohl schon* という連辞が生起しているのに対応して、英語では *may* が表れている⁸¹。オランダ語においては *misschien* (「おそらく」という意味) という副詞によって表出されていると推測される。(167)の *doch* は単独で機能していると言うよりは“*du weißt doch*”という挿入句のような形式で機能していると捉えるべきである。ここでは英語においては *would* が、オランダ語においては *weet* (*weten* (知る) の過去形) が、いずれも過去形となることでモダリティを表出している。(168)においては英語では *maybe*、オランダ語では *misschien* がモダリティの標識となっているが、それらはドイツ語の *vielleicht* に対応する語として表れているので、*doch* に相当

⁸¹ この *may* は *doch wohl schon* 全体に対応するのか、*wohl* のみに対応するのかは定かではない。

する語は見られない。(169)ではドイツ語 *werden*、英語 *will* という助動詞が話し手の意思を表しているのに対して、オランダ語は *toch* が生起している。

さらに興味深いのは、元来対応するとは考えられない心態詞が同様の場面に用いられていることである。

(170) Aber dann bemerkte er klugerweise:

»Bevor die Affenbrotbäume groß werden, fangen sie *ja* erst klein an.« (21)

But he observed perceptively:

“Before they grow big, baobabs start out by being little.” (14)

Maar toen merkte hij heel verstandig op:

- De apebroodbomen zijn *toch* eerst klein voordat ze gaan groeien. (21)

しかし、懸命にもこう気づきました。

「バオバブだって、大きくなる前は、初めは小さいんだよね」 (31)

この例では、ドイツ語で *ja* が表れているのに対し、オランダ語では *toch* が用いられている。これはドイツ語においては *ja* が同意を求めているのに対して、オランダ語では *toch* によって主張がなされているのである。また、日本語においては「だよね」というシンタグマが表れており、ドイツ語の *ja* は「ね」に、オランダ語の「よ」に対応する。このような対応の不完全さについては今後考察する必要がある。

4.4.2. 確認疑問文

続いて確認疑問文において *doch* とその対応語がどのように出現しているのかを観察する。

(171) Auch dies verdanke ich schließlich dem Schaf, denn unvermittelt fragte mich der kleine Prinz, als wäre er von einem schweren Zweifel geplagt:

»Es stimmt *doch*, dass Schafe Stauden fressen?« (20)

This time, too, I had the sheep to thank, for suddenly the little prince asked me a question, as if overcome by a grave doubt.

“Isn’t it true that sheep eat bushes?” (13)

Het schaap was alweer de aanleiding, want ineens vroeg de kleine prins me, alsof hij in grote onzekerheid verkeerde:

- Het is *toch* waar *hè*, dat schapen heesters eten? (20)

今度もまた、羊のおかげでした。というのは、王子さまが、深刻な心配にとりつかれてもしたように、突然ぼくにこう訊いたのです。」

「羊が低木を食べるって、本当なの？」 (30)

(172) Aber der kleine Prinz fügte hinzu:

»Dann fressen sie *doch* auch Affenbrotbäume?« (20)

But the little prince added:

“And therefore they eat baobabs, too?” (13)

Maar hij vervolgde:

- Dus dan eten ze ook apebroodbomen? (20)

しかし、王子さまは続けてこう言ったのです。

「それなら、バオバブも食べるんだね」 (30)

(173) Der kleine Prinz sagte noch, nach einem kurzen Schweigen:

»Du hast gutes Gift? Bist du sicher, dass du mich nicht lange leiden lässt?« (79)

Then the little prince said, after a silence, “Your poison is good? You’re sure it *won’t* make me suffer long?” (73)

De kleine prins sprak weer, na een stilte:

- Heb je wel goed vergif? Je zult me *toch* niet lang pijn doen? (79)

王子さまはしばらく黙り込んでから、こう言いました。

「良い毒、持っているんだろう？長いこと苦しまなくていいって、確かだね？」

(133)

(171)においてドイツ語とオランダ語は決定疑問文の形式をとっており、いずれも *doch* と *toch* が生起している。それに対して英語は否定疑問文を用いて話し手の怪訝な気持ちを表出している。(172)ではドイツ語文には *doch* があるが、英語とオランダ語の両者にはそれに対応するものは見当たらない。(173)ではドイツ語には心態詞によるモダリティの標識はない⁸²が、英語には *will*、オランダ語には *toch* が表れている。

4.4.3. 補足疑問文

補足疑問文に関しては次の例が見い出された。

(174) »... Du, du wirst Sterne haben, wie sie niemand hat ...«

»Was *willst* du sagen?« (87)

“... You, though, you’ll have stars like nobody else”

“What do you mean?” (77)

Jij zult sterren hebben zoals niemand anders ze heeft ...

- Wat bedoel je *toch*? (82)

「…だけど、きみ、きみは誰のものとも違う星を手に入れることになるんだ……」

「それ、どういう意味」 (139)

⁸² *Sicher* という形容詞にモダリティがあるとみなすことも可能である。

ここではオランダ語のみに *toch* が表れている。ドイツ語は *wollen* が意思を表すのに対応して、オランダ語では *toch* が出てきている。英語は命題そのものの文となっている。あるいは *mean* という動詞は「意図している」という意味であることから *wollen* に対応しているとみなすことも可能であろうか。

4.4.4. Wenn による条件文

さらに条件文においても次の例が見い出された。

(175) Dieser Vorshclag schien den kleinen Prinzen zu kränken:

»Anbinden? Was für eine komische Idee!«

»Aber wenn du es nicht anbindest, wird es *doch* weglaufen...«

Da brach mein Freund in ein neuerliches Gelächter aus:

»Aber wo soll es *denn* hinlaufen?«

»Irgendwohin. Geradeaus...« (15)

This proposition seemed to shock the little Prince.

“Tie him up? What a funny idea!”

“But if you don’t tie him up, he’ll wander off somewhere and get lost.”

My friend burst out laughing again. “Where *could* he go?”

“Anywhere. Straight ahead...” (8)

Dit vond hij blijkbaar een vreemd plan.

- Vast binden! Wat een gek idee.

- Maar als je hem niet vastbindt, loopt hij weg en verdwaalt...

Toen schaterde hij het weer uit.

- Maar waar moet hij heen?

- Zo maar ergens. Rechttuit... (14)

ぼくのこの提案に、王子さまはひどくショックを受けたようでした。

「羊をつないでおく？おかしな考えだね！」

「でも、つないでおかないと、どこへでも行っちゃうよ。そして、迷子になっちゃ
うよ……」

するとぼくの友だちは、またけらけらと笑いました。

「羊がいったいどこへ行くっていうの」

「どこへだってさ。前の方へまっすぐ……」 (23)

(176) Er fragte mich unvermittelt, ohne Umschweife, als pflückte er die Frucht eines
in langem Schweigen gereiften Problems:

»Wenn ein Schaf Sträucher frisst, so frisst es *doch* auch die Blumen?«

»Ein Schaf frisst alles, was ihm vors Maul kommt.«

»Auch die Blumen, die Dornen haben.«

»Ja. Auch die Blumen, die Dornen haben.« (26)

Abruptly, with no preamble, he asked me, as if it were the fruit of a problem
long pondered in silence:

“If a sheep eats bushes, does it eat flowers, too?”

“A sheep eats whatever it finds.”

“Yes. Even flowers that thorns?”

“Then what good are thorns?” (19)

Plotseling vroeg hij me, en het leek alsof hij er lang in stilte over had nagedacht:

- Als een schaap heesters eet, eet het *dan* ook bloemen?

- Een schaap eet alles wat het tegenkomt.

- Ook bloemen met doornen?

- Ja, ook bloemen met doornen.

- Maar waar dienen die doornen dan vor? (26)

黙って長いあいだ考えてきた問題が突然解けたかのように、王子さまは何の前触
れも無く、ぼくに訊いたのです。

「羊は、低木を食べるなら、花も食べるんじゃないの？」

「行き当たったもの、何でも食べるよ」

「棘のある花でも？」

「そうだよ。棘のある花でも」 (39)

(177) So auch, wenn ihr ihnen sagt: Der Beweis dafür, dass es den kleinen Prinzen wirklich gegeben hat, besteht darin, dass er entzückend war, dass er lachte und dass er ein Schaf haben wollte; denn wenn man sich ein Schaf wünscht, ist es *doch* ein Beweis dafür, dass man lebt, dann werden sie die Achseln zucken und euch wie Kinder behandeln. (18)

So if you tell them: “The proof of the little prince’s existence is that he was delightful, that he laughed, and that he wanted a sheep. When some wants a sheep, that proves he exists,” they shrug their shoulders and treat you like a child! (12)

En al net zo gaat he als je zegt: «Het bewijs dat de klein prins bestaan heeft, is dat hij er lief uitzag, dat hij lachte en een schaap wilde hebben. Als je graag een schaap wilt hebben is dat het bewijs dat je bestaat.» Ze zullen de schouders ophalen en je voor een klein kind uitmaken. (18)

そんなわけで、「王子さまが存在していたという証拠、それは、王子さまがすてきだった人だった、にこにこしていた、羊を欲しがっていたということだ。羊を欲しがれば、それがその人が存在していた証拠になる」などと、もし言おうものなら、彼らは肩をすくめてみなさんを子供扱いするでしょう！ (27)

(178) Von neuem errötete der kleine Prinz. Er antwortete nie auf die Fragen, aber wenn man errötet, so bedeutet das >ja<, *nicht wahr?* (82)

De kleine prins bloosde weer. Hij antwoordde nooit op vragen, maar als iemand

een kleur krijgt, betekent het *toch* «ja» *niet waar*? (78)

The little prince blushed once more. He never answered questions, but when someone blushes, doesn't that mean "yes"? (73)

王子さまはまた顔を赤らめました。彼は質問に答えたためしがありません。けれども顔を赤らめるのは、「そうです」ということを意味するのではないでしょうか。
(131)

(175)にはドイツ語 *doch*、英語 *will* が生起し、オランダ語にはモダリティの標識は見いだせない。(176)と(177)にはドイツ語 *doch*、(178)にはオランダ語 *toch* が表れている。

すべての文タイプを通じて言えることは *doch* と *though* と *toch* が対応する形で同時に出現するということはきわめてまれであるということである。今回の調査ではそのような対応を見出すことはできなかった。とはいえ、オランダ語の *toch* もドイツ語の *doch* と同じく心態詞の機能を果たすことは確認された。また英語においては法助動詞や文タイプによって心態詞が担うモダリティの表出がなされていることも理解できた。

4.4.5. 応答詞

最後に付加的ではあるが、応答詞とその強意現象についても観察しておきたい。どのような語が応答詞に付随するのを見ることは、それぞれの言語において元来の意味の希薄が起り得たのかを知る手がかりとなる可能性があるからである。

(179) Zweifellos antwortete ihm eine andere Stimme, da er erwiderte:

»*Doch! Doch!* Es ist wohl der Tag, aber nicht genau der Ort...« (82)

Another voice must have answered him then, for he replied, “*Oh yes*, it's the right day, but this isn't the place...” (73)

Een andere stem gaf zeker antwoord wanttoen zei hij weer:

- *Jawel*, 't is wèl de dag, maar niet de plek... (79)

おそらく、別の声がそれに答えたのでしょう、彼はまたこう言い返したのですから
……

「そう！そう！たしかにその日だけれど、場所はここじゃない……」 (132)

(179)においては、ドイツ語は **doch** を重ねることで強意表現となっており、英語では **Oh yes** という形の感嘆表現で **yes** を音声的に強めている。オランダ語ではドイツ語の **jawohl** に相当する **jawel** が生起しており、**ja** の強意形が用いられている。

以上、それぞれの言語における表現を対照してきたが、全体を通しての傾向は以下のようであった。ドイツ語で逆接関係が表現される際には **aber**、**dennoch** などが多用されるが、**doch** もそのような機能を果たしている場面があった。それに対して、オランダ語の接続機能には **maar** (**aber** に相当) が多用され、**toch** が生起する場合は **maar** と共起するケースが多いようであった。その理由としては、**toch** は **doch** に比べて元来の「対立」の意味機能がより希薄している可能性を示唆することが可能である。したがってオランダ語の **toch** は主に心態詞や強調詞としての機能が中心となっていると考えられる。また英語においてはドイツ語・オランダ語とは表現様式がきわめて異なっていた。英語では **though** が文の区切れ目のディスコースマーカースとして機能することがあるとはいえ、**doch** や **toch** のような心態詞的な機能を表出するための標識としては用いられていなかった。そのような機能は英語では法助動詞や副詞を用いたり、否定疑問文などの文タイプを用いたりすることで表現されていた。

以上の観察ではこのような結果が得られたが、とはいえ、使用したテキストはいずれもフランス語からの翻訳であるため、本来は独英蘭の対応ではなく、フランス語をも考慮した考察がなされるべきであり、それは今後の課題としたい。

5. 日本語との比較対照

これまでドイツ語 *doch*、またそれに相当する語英語とオランダ語の表現について観察してきた。ここでは翻って日本語についても考察していきたい。我々の母語である日本語においてはどのようにして話し手の心的態度が表出されるであろうか。心的態度の表現は様々なものがあるが、そのうち終助詞は心態詞と類似の機能を果たしていると考えられる。終助詞の有無、またどの終助詞を用いるのかによって、話し手が聞き手の想定に対してどのような認識を持っているかが表出される。そのため、話し手の発話に対して聞き手が受けとる印象が大きく異なるので、一種のモダリティを表出していると考えられるのである。以下では、日本語の終助詞の問題について考察する。

日本語の終助詞研究は神尾(1996)や益岡(2001)などによって詳細に行われている。益岡(2001:30)はモダリティを「主観性の言語化されたもの」であり、「判断し、表現する主体に直接関わる事柄を表す形式」と規定し、日本語は「判断・表現主体の主観的側面が高度に文法化された言語」と述べている。さらに言い換えて、日本語は『対人的機能』に敏感な言語である」という池上(1989)を引用して、日本語のモダリティ研究の重要性を示唆し⁸³、情報と表現類型の関連から終助詞のモダリティ機能について考察している。また神尾の「なわ張り理論」では、話し手と聞き手の情報の保有度と文の表現の関わりが論じられ、その際、終助詞の使用が情報の保有度と関連することが主張されている。

このことから、本章ではこのような立場を出発点とし、助動詞「だ」と終助詞「よ」「ね」という3つの形式機能をそれぞれ確認した上で、その結合のパターンを考察する。

5.1. 日本語の助動詞「だ」

まずは命題の陳述に用いられる助動詞「だ」の例を挙げる。

(180) 泉州の特産は水ナスだ。

(181) 私は日本人だ。 金田一(1997:148)

(182) 彼はいじわるだ。

(183) 今日は晴れだ。

(184) ノートをとらないのは、全校に君ばかりだ。なぜノートをとらないか (三

⁸³ 益岡(2001:92)参照。

金田一(1997:147-153)は助動詞「だ」の用法について、(180)のように「そのものとイコールの関係にあることを表わす」、(181)のように「そのものの一員である、つまりそのものに属することを表わす」、(182)のように「そういう属性をもっていることを表わす」、(183)のように「そういう状態にあることを表わす」という4つを「標準的な意味」としている。また「だ」はしばしば断定を表すとされるが、断定の意味が生じるのは言い切り形の時にも当てはまり、助動詞「だ」が伴われるときだけではないと述べている。このように助動詞「だ」が「断定」の意味機能を有するという見解を取らず、まずはコピュラの機能を果たしているとする金田一の主張には大いに首肯することができる。つまり、終助詞を伴う文の場合とは異なり、助動詞「だ」で終わる文は、(180)のように事実を陳述するために用いられ、そこに話し手の何らかの感情的主張を含意せずに用いられることも可能であり、また(184)のように強意された断定が表れる場合には話し手の心情が含まれるのである。

ちなみに「雨だ!」という文によって、「あれは雨だ」と「雨が降って来た」を簡潔に表現しているとの三尾(1958)の説もあるが、これはモダリティとは直接関連しない事例であり、ここでは考察を行わない。

5.2. 日本語の終助詞「よ」

益岡(2001:92-107)によれば、日本語の終助詞「よ」の生起においては、「話し手と聞き手の情報、判断の食い違いを前提としているという特徴」があり、「相手が自分と違う判断をくだしていると知って、それに反論する用法」、「聞き手が忘れていたようなことを指摘し、思い出させるような用法」、「聞き手が気がついていないこと、知らないことを伝える用法」がある。また、話し手と聞き手の判断、情報の不一致を補正しようという話し手の欲求から、命令・禁止文と依頼文で生起することができる。

(185) 明日は定休日ですよ。

(186) 「あたし、あなたの教室にチョークを借りにやるから、まあその子を見てよ。勉

強はそれほどできないけれど、それはかわいいんだから」 (『石ころのうた』

P.82)

(185)や(186)のように、話し手の知識と聞き手の知識の間にずれがあり、その意味で両者が「対立」的な関係にあると判断される場合、話し手は聞き手との情報の距離を縮めたいと思うのが当然であり、そのような話し手の態度を明確に示すのが終助詞「よ」の役割だといえる。

5.3. 日本語の終助詞「ね」

益岡(2001:92-107)によれば、日本語の終助詞「ね」の生起は話し手と聞き手の情報・判断の一致が前提となり、その際、以下の用法が許容される。

(187) 「明日の 13 時でしたね。」

(188) 「あら、よくあなたに拾われるわね」 (『石ころのうた』 P.94)

(189) 「ステキなバッグね。」

(190) 「川島の様子は、どうだったね？」 (西村京太郎『五能線誘拐ルート』 P.239)

(191) 「いつ、帰国するんだね？」 (西村京太郎『特急ゆふいんの森殺人事件』 P.214)

(192) 「その男の似顔絵が、欲しいんですがね」 (『五能線誘拐ルート』 P.59)

「演述型」⁸⁴の発話において、(187)のような「確認を求める用法」、(188)のような「同意を求める用法」、(189)のような「聞き手の領域に属するものについてのコメントをする場合の用法」、(190)のような疑問文形式で「話し手が自分の不確かな知識を聞き手の情報によって補おうとする場合」がある。疑問文の場合には、「聞き手に知識の妥当性を問いかける用法」と、(191)のような『～のだ(んだ)』の形式を伴う疑問文での「聞き手に行為要求の表現力を和らげる効果」がある。他方、(192)のような「訴え型」の発話においても、話し手と聞き手の意向の一致が前提であることから、話し手は「聞き手に同意を得られることを期待して発言して」おり、それゆえ命令・禁止文になじまず、「聞き手の意向を尊重した」依頼文や勧誘文に生起すると主張されている。

このように終助詞「ね」は話し手と聞き手の情報に対立していることを想定せずに「一致」を信じる話し手の態度が含意される。

⁸⁴ 自分の意見や思想を述べるためのものである。

5.4. 日本語の終助詞の連辞について

ドイツ語の心態詞においてシンタグマが見出されたのと同様に、日本語の助動詞・終助詞にも共起関係が観察される。以下の例をもとに日本語の終助詞の連結について論じる。

(193) ドイツの首都はベルリンだ。

(194) ドイツの首都はベルリンだよ。

(195) ドイツの首都はベルリンだね。

(196) ドイツの首都はベルリンだよね。

(197) *ドイツの首都はベルリンだねよ。

これまで、助動詞「だ」と終助詞「よ」「ね」の個々の機能を観察してきた。ここでそれをまとめておきたい。「だ」を伴う(193)の文は単なる事実の断言であるが、(194)は聞き手が自分と対立する意見を持っていて、話し手が自分の意見を主張する際に使用され、(195)は聞き手が自分と対立しない意見を持っており、話し手が聞き手の同意を得られることを前提に発言している場合に用いられると分析することができた。では二つ以上の接尾辞が付加される場合に(196)の文は許容されるものの、(197)の文は非文となるのはなぜだろうか。これには個々の終助詞の内在的意味が関連していると推察することができる。つまり、(196)の文は「対立型」の「よ」という終助詞によって、話し手は聞き手に対して対立する主張を行うが、「一致型」の「ね」が付加されることによって、話し手は自分の意向が聞き手に受け入れられ、最終的に一致した見解となることを強く期待していると考えられる。このような話し手の欲求は互いに理解し合い、意見をすり合わせていくというコミュニケーションの基本原則に適っており、それによって、「よね」という語順が許容されるのである。一方、(197)の文においては、(196)と逆の「ねよ」という終助詞の語順によって、「一致」から「対立」への移行が表現されてしまい、会話のストラテジーとして不自然である。そのために(197)が発話として成立しないと考えられる。つまり、日本語の終助詞が連結される条件は終助詞同士の内在的意味の移行における相性、つまり「よ」という「対立型」から「ね」という「一致型」への一定の流れに起因すると言える。ただし、本稿では「よ」と「ね」以外の終助詞のコンビネーションについて検討することはできていない。他の場合においてもこのような方向性でシンタグマが構成されるのかどうかについては、今後の考察が必要である。

6. 文法化

文法化(Grammatikalisierung / grammaticalization)とは Meillet(1912:131)が「自立語から文法要素の役割への移行」⁸⁵と述べたものである。しかしそれ以前にフンボルトなどがすでにその構想を抱いていたようである⁸⁶。

本章ではまず文法化現象とは何であるかを概観する。その際に近年の Traugott による一連の意義深い研究を紹介する。そのうえで、ドイツ語の *doch* における文法化について論じたい。

6.1. Traugott

Traugott(1982)は、文法化においてはより具体的なものから具体性の少ないものへ、またしばしば空間的から時間的なものへ、またさらに論理的な関係を表すものへ変化すると主張している。また文法化の過程で、ある表現の意味変化が起こるとすれば、それは *less personal > more personal* でその逆はないとされる。さらに、ある機能・意味領域から他の意味領域への移行があるとすれば、「命題的(*propositional*) > テキスト的(*textual*) > 感情表出的(*expressive*)」という移行であり、その逆はないとしている。

また Traugott(1988)では、文法化のメカニズムとして語用論的推論(*pragmatic inference*)が挙げられ、外的に描写された状況(*external described situation*)からテキスト的な状況(*textual situation*)への移行を引き起こすメタファーと、情報量の強化、話者の主観的判断への移行を引き起こすメトニミーが考察されている。

Traugott(1989)では、本動詞から *premodal* な状態となり、義務的(*deontic*)意味から弱い認識的あるいは習慣的・予言的・未来的な意味を表すようになり、強い認識の意味を表す表現へと変化を遂げた意味機能の変化が論じられている。その際のメカニズムとして、命題の妥当性に対する話し手の評価（語用論的強化）が重要視されている。

Hopper and Traugott(1993)⁸⁷では、文法化の過程での内容項目(*content item*)から文法項目(*grammatical word*)、さらに接語(*clitic*)を経て屈折辞(*inflectional affix*)へと至る一連の

⁸⁵ Meillet(1912:131): le passage d'un mot autonome au rôle d'élément grammatical.

ホッパー／トラウゴット(2003:25)より引用。

⁸⁶ ホッパー／トラウゴット(2003:26f.)によると、フンボルトは実質的意味と文法的意味の関係を4つの段階を通じて捉えているという。

⁸⁷ Hopper and Traugott(1993)は”Grammaticalization”初版のことであり、日野による訳書『文法化』のもとになっている。同じタイトルの Hopper and Traugott(2003)は第二版となり、修正、加筆されている。

意味機能の変化が主張されている。

しかし、Traugott(1995)は(1982)で主張されたような一方向性を修正する。命題的語彙(propositional material)はテキスト的な意味を持つ表現や、態度を表す表現へと談話の中で展開していくとし、その際のプロセスとして「主観化」(subjectification)を挙げている。ここでは話し手には伝えたい情報量を増やそうとする認知的必要性和丁寧度を上げようとする社会的必要性があり、聞き手には命題内容を超えて解釈しようとする認知的必要性があることが関係している。そしてこのような枠組みの中で、命題機能(propositional function)から談話機能(discourse function)、客観的意味(objective meaning)から主観的意味(subjective meaning)、非認識的モダリティ(non-epistemic modality)から認識的モダリティ(epistemic modality)、非統語的主語(non-syntactic subject)から統語的主語(syntactic subject)、完全で自由な形式(full, free form)から制限された形式(bonded form)への変化が論じられている。

これらの研究を経て、Traugott(1999)は主観化(subjectification)に加えて「間主観化(intersubjectification)の発達」を提唱し、聞き手による主体的な談話理解に注意を向けている。

これらの一連の考察によって、文法化研究は言語を使用する人間が主導的に言語の意味を変化させるプロセスや、それによって生じた言語実態を理論化していく分野であると理解することができる⁸⁸。

では、以下にドイツ語における文法化について考察してみたい。

6.2. sich

再帰代名詞 sich については小川(1999、2000、2001)などが言及している。小川(2001:169)は「再帰代名詞の本来の意味は「自分」であるが、それが自立的意味を失うにともなって、文法的特徴に変化が生じる」として以下の例を挙げている。

(198) Er tadelt sich.

彼は自分を非難する。 小川(2001:169)

⁸⁸ Traugott の文法化に関する研究は秋本(2001)の中で概説されており、本章ではそれを参考にした。

(199) Sich (selbst) tadelt er.

(自分自身) を非難する。 小川(2001:169)

(200) Das Tor öffnet sich.

門があく (←門が自らをあける) 小川(2001:169)

(201) *Sich öffnet das Tor.

小川によると「ドイツ語の文頭位置は通常、トピック（話題）位置であり、自立的な意味をもたない要素はそこに現れることはできない」⁸⁹。つまり再帰動詞の一部と化している *sich* には自立語としての役割はなくなってしまっており、そのために(201)の文において *sich* は文頭位置を占めることができないのである。ドイツ語の場合以上に語順の制限がある言語としてフランス語を挙げることができる。

(202) dass sich das Tor plötzlich öffnet 小川(2001:169)⁹⁰

(203) dass das Tor sich plötzlich öffnet 小川(2001:169)

(204) dass das Tor plötzlich sich öffnet 小川(2001:169)

(205) *que se la porte ouvre tout à coup 小川(2001:169)

小川はまた上記のような例を挙げ、ドイツ語の再帰代名詞 *sich* は「(文頭以外で) 比較的自由な語順をとれるのに対して、フランス語の再帰代名詞 *se* はいわゆる接語(clitic)位置に固定されている」⁹¹ことを指摘している。

このように再帰代名詞には元来「自分」を表していた *sich* が動詞の一部となり、その意味が希薄化した用法があり、これは文法化の一例であると考えられる。

⁸⁹ 小川(2001:169)参照。

⁹⁰ (202)から(205)はいずれも「門があくこと」という意味である。

⁹¹ この位置にしか *se* が生起できないという意味である。

ところで *sich* にはその強意形として *sich selbst* という表現がある。

(206) Sie liebt *sich*.

彼女は自分を愛している。

(207) Die Tür öffnet *sich*.

ドアが開く。

(208) Er hat *sich selbst* sein Grab gegraben.

彼は自分自身のために墓を掘った。

(206)の *sich* は対格目的語として「自分自身」という意味を保持しているが、(207)では既述のように再帰代名詞による他動詞の自動詞化によって「自ら」という意味が薄れている。(208)では他の誰でもなく「彼自身のために」という意味が強調されている。これは(207)とは逆に *sich* の意味を強めているので、このようなタイプは文法化することはないと考えられる。

このような *sich* と *sich selbst* の関係とまさしく平行するものとして、*doch* と *jedoch* の関係が挙げられる。前述のように *jedoch* には *doch* の逆接機能をより明確にし、強める働きがあることを観察した。また同様に他の語の融合を通じて特定の意味が明確にされて用いられる語が他にも挙げられる⁹²。

例えば、*jeder* は *je* と *weder* から成り立ち、「どんな状況においても両者のどちらか」という意味から「いずれの、各々の」という意味になっている。同様に *jedermann* は *je weder man*⁹³に由来し、「どんな状況においてもいずれの人物のどちらか」という意味から「どの人も、誰もが」となっている。*Jemand* は *je ein man* に由来し、「どんな状況においてもある人」から「不特定の誰か、ある人」を意味するようになった。*Jedennoch* は *je* と *dennoch* から成り立っている。*Dennoch* は元々は「その時でもなお」という意味の *dannoch* であったが、そこから「それでもなお、にもかかわらず」と転じた。そこに *je* が付加され、さらに逆接と譲歩の意味が強まっている。また *je* の古い形である *ie* という形態が残る合成語と

⁹² 相良 (1992: 58ff.) の造語についての詳細な記述を参照した。

⁹³ 中世ドイツ語の綴りに従って、*man* と記している。

しては否定詞 **nie** が挙げられる。ゴート語においては **ni aiw** と分かち書きされていたが、古高ドイツ語で **nio**、中高ドイツ語で **nie** となり、現在でもそのままの形を保ち、強意の否定としてに用いられる。

以上のように **je** は合成語を作る際に多用されている。いずれの場合も、合成語中の **je** に後続する要素の意味を明確化することで当該語彙の意味に輪郭を与え、語の意味を明確にしている。

さらに **je** 以外の語を用いた造語の例も挙げる。

指示的語幹を造る子音 **d** が元である **der** からは **derjenige** や **derselbe** が生まれている。**Derjenige** は元々 **der** と **jener** を一緒に用いた **der jene** という形に派生語尾 **-ig** が付加されて一語に纏まったものである⁹⁴。初期新高ドイツ語には **der jene** という形が現れ、15 世紀には **derjenige** という形が登場した。また **der** と **selbe** との合成語には **derselbe** や **derselbig** がある。**Ja** を強意している **jawohl** は肯定の答えの強調、さらにはそこから転じた命令に対する応答として用いられている⁹⁵。

このように、**Je** 以外を用いた拡大造語も、本来保持している意味を強調したり、復活させたりしている⁹⁶ことを以上から確認することができた。このように、形式が拡張することによって意味が明確化されるという事実⁹⁷はドイツ語に限ったことではなく、他言語においても観察される。例えば、**doch** と同じ語源を持つ英語の **though** も同様の方法で拡大され、強意された造語である **although** を生み出している。**Although** は、中期英語においては「**al** が **though** の強意副詞として分かち書きされる場合もあったが、やがてその独立性と強意性を失って弱音化し、一語として書かれるに至った」⁹⁸のである。

6.3. bekommen-Passiv

⁹⁴ **jeniger** という形も存在した。

⁹⁵ 井口(2000:109)によれば、**wohl** は肯定の応答詞として用いられることがある。例えば、**Kommst du mit? – Wohl.**や **Können Sie bitte etwas Salz bringen? – Sehr wohl.**などの用例である。したがって、同じく肯定の応答詞である **ja** を後ろから強意する形式で造語が行われていると推測される。

⁹⁶ **Sich selbst** は希薄化しつつある **sich** の意味を本来のものに戻していると捉えることも可能ではないかと推測した。

⁹⁷ 例えば、**Schule** よりも **Grundschule** ほうが、電話より携帯電話のほうが意味が明確化することからも明らかである。

⁹⁸ 寺澤(1997:35)

つづいて *bekommen* 受動⁹⁹という現象を取り上げる。一般にドイツ語の受動態は *werden*+過去分詞で表される動作受動と、*sein*+過去分詞で表される状態受動があるが、それ以外に受動態の迂言法が存在する。このような受動態の書き換えに用いられる動詞についてヘンチェル／ヴァイト(1996:128)は「これらの動詞形は能動形であるが、その意味するところは受動的である¹⁰⁰。またこれらはそれぞれ対応する受動態に変換することができる。大部分の迂言法には、話法的要素が付け加えられる」と述べている。そして話法要素のないものとして「*kriegen*、*bekommen*、*erhalten*+過去分詞」を挙げ、話法的要素を持つものとして「*gehören*+過去分詞、*sein*+*zu*+不定詞」を挙げている。ここでは話法的要素のないものとして挙げられている *bekommen*+過去分詞について取り上げる。

(209) *Wir bekommen das Buch geschenkt.*

私たちは本をプレゼントしてもらう。 ヘンチェル／ヴァイト(1996:128)

(209)の文は„*Uns wird das Buch geschenkt.*“または„*Wir werden mit dem Buch beschenkt.*“と同等の意味を持つ。

(210) *Er bekommt vom Arzt den Verband abgemacht.*

彼は医者に包帯を外してもらう。

(210)は„*Der Arzt macht ihm den Verband ab.*“の受動文である。このような *bekommen* 受動に関して Diewald(1997:40)は以下のように言及している。

Zusammenfassend kann man sagen, daß die Verben *bekommen*, *erhalten*, *kriegen* gemeinsam mit *werden* als Auxiliare zum Ausdruck der Geschehensperspektive in Opposition zum Aktiv stehen und in das Paradigma der verbalen Diathesen integriert sind. Diese paradigmatische Kohäsion ist, wie im letzten Abschnitt

⁹⁹ Diewald(1997:30)によれば、与格受動(Dativpassiv)、受容者受動(Rezipientenpassiv)、受取人受動(Adressatenpassiv)などとも呼ばれる。

¹⁰⁰ 以下に挙げられている *kriegen*、*bekommen*、*erhalten* はいずれも「得る」という意味を持つが、そこには「与えられる」というニュアンスも含まれると推測される。

gezeigt, ein sehr deutlicher Hinweis auf starke Grammatikalisierung. Das Aktiv als unmarkierte Diathese realisiert die Handlungsperspektive (und gegebenenfalls ein Agens), die beiden Passivkonstruktionen realisieren jeweils die Geschehenperspektive unter Verdrängung des ursprünglich vorhandenen Agens: das *werden*-Passiv erhebt das Patient zur Ergänzung im Nominativ, das *bekommen*-Passiv die Zielrolle, so daß eine Analogie entsteht zwischen zwei Arten von Ergänzungen in obliquen Kasus (Objekten) und zwei Arten von Passivkonstruktionen.

要約すると、*bekommen* や *erhalten* や *kriegen* という動詞はいずれも出来事の視点を表現するための助動詞として、*werden* とともに能動態と対立している。そして動詞の態のパラダイムに統合されているということになる。このようなパラダイムの結束性は前章でも示したように、強く文法化していることをはっきりと示すものである。無標の態としての能動態は行為の視点（場合によっては動作主）を実現するのに対し、両方の受動態構造は本来存在する動作主の排除のもと、その都度出来事の視点を実現するのである。*Werden* 受動は被動主格を主格の補足語へと昇格し、*bekommen* 受動は目的格を昇格させる。その結果類推作用が、2つの斜格の補足語と2つの受動態構造の間に発生するのである。

つまり、動詞 *bekommen* は元来「受け取る、得る」などの意味を持つものであるが、そこから転じて「「対象物」の受容から「行為・出来事」の受容へ、という *bekommen* 受動の意味的な拡がり」¹⁰¹が見られるという。このような機能変容が *bekommen* 受動における文法化と考えられるのである。

6.4. 不変化詞 *doch* の文法化

不変化詞 *doch* に多様な意味機能があるのも文法化の結果であると推測される。Diewald(1997:90)は *doch* について以下のように述べている。

Die Bedeutung von Äußerungen mit *doch* wird allgemein als 'Widerspruch', als

¹⁰¹ 大藪(1996:162)参照。

adversatives Verhältnis, erkannt... Die relationale Grundbedeutung entspricht also in etwa derjenigen von *aber*.

Doch を伴う発話の意味は一般的に「反論」、「相反する関係」として知られている…関係を示す基本的な意味は *aber* のそれとほぼ一致する。

このように *doch* と *aber* は接続機能においては概ね対応しているにも関わらず、心態詞としての機能に違いがあるのはなぜであろうか。この点に関して Diewald(1997:90)は次のように述べている。

Der Bedeutungsunterschied zwischen *doch* und *aber* läßt sich in dem Schema, das ja nur die relationale Basisstruktur verdeutlichen soll, nicht wiedergeben. Er besteht darin, daß bei der Modalpartikel *doch* zusätzlich eine einräumende Komponente vorliegt. Der Sprecher verweist also nicht nur auf einen Gegensatz zwischen pragmatischem Prätext und relevanter Situation, sondern er behauptet etwas *trotz* einer entgegenstehenden Vorgabe. Eine Paraphrase für Satz (84)¹⁰², die diesen Aspekt erfaßt, ist: “Selbst wenn jemand denkt, daß wir nächste Woche da sind, so denke ich, daß wir nächste Woche nicht da sind“. Die Partikelbedeutung ist also die ‘Indizierung der konzessiven Relation zwischen dem pragmatischen Prätext und der in der Äußerung dargestellten Situation’.

Doch と *aber* の意味の違いは、関連する基本構造のみを明示するような図式では明らかにならない。その違いは、心態詞 *doch* の場合にはさらに容認の要素があるということにある。つまり、話し手は語用論的な先行テキストと関連する状況の間にある対立を指示するのみならず、対立する条件にも関わらず何かを主張するのである。このような側面を捉えた(84)の書き換えは「私たちが来週そこにいると誰かが思っているとしても、それでも私は、私たちはそこにはいないと思っている」のようなものである。つまり不変化詞の意味は「語用論的な先行テキストとその発話の中で描写される状況の間にある譲歩関係の表示」なのである。

¹⁰² „Wir sind doch nächste Woche nicht da.“という例が挙げられている。

以上のように Diewald(1997:90)は、**doch** と **aber** にはその共通の内在的意味として逆接(Adversativität)があり、その点で類似しているが、**doch** には譲歩(Konzessivität)も関係し、そこが違いとなっていると主張している。「雨が降っているが、出かける」という命題内容の対立のみを示されるのが逆接で、「たとえ雨が降ろうとも、それでも出かける」と何らかの前提条件を含むようなニュアンスを保持するものが譲歩である。この点が「やっぱり」や「それでもなお」という訳語を与えられる **doch** 特有の内在的意味となるのである。

6.5. その他の語彙の文法化

さて、**doch** 以外の不変化詞はどのような道筋をたどって現在の用法を獲得したのであるうか。そのいくつかを例に観察したい。

まず **ja** についてである。これまでに論述してきたように **ja** は **doch** と隣接する領域に存在する。**Doch** は対比を断言する一方、**ja** は一致を表し、**aber** のような反復的な要素や強調による連辞は「確認」を意味するものとなり、**ja** は「語用論的な先行テキストと発話に表わされる状況における確認関係の一致を指示するものである¹⁰³」。**Hentschel(1986)**によれば、心態詞と類似する **ja** の用法はすでに古高ドイツ語や中高ドイツ語に見られ、新高ドイツ語に翻訳したときに、その **ja** は明確で疑う余地のないニュアンスを表現するものとなっている。また **Diewald(1986:96)**は、応答詞の **ja** は先行するテキストに常に関連し、新しい情報を導く一方、心態詞の **ja** は前提とされる命題の単なる強意表出を示すと述べている。つまり **ja** は「一致」が内在的意味であり、そこから一致を求める「確認」的な用法が出てきたと推測される。

さらに **aber** について述べると、**aber** はゴート語においては **hinter** や **nach** といった場所に関する意味を持つ前置詞であった。そして時折、**nachher** や **später** といった意味で時を表す副詞としても用いられた。古高ドイツ語では **wieder**、**wiederum**、**abermals** といった反復を表す副詞としても存在し、これはゴート語には存在したものの古高ドイツ語期には見られなくなった時間副詞の意味が前提となっている。そしてこの反復を表す副詞は 18 世紀まで続いていった。また古高ドイツ語においては **doch**、**jedoch**、**allein**、**indessen** といった意味を持つ、逆接の接続詞として用法も見られるようになる。つまり、場所から時間を経て反復、逆接へと意味が展開した。さらに心態詞としての用法は、**doch** の対立性が心

¹⁰³ Diewald(1997:95)参照。

態詞の意味基盤となっていたことと同様に、逆接の接続詞から派生したと推測される。

なお、全ての心態詞が接続詞、接続副詞、応答詞から派生しているわけではない。例えば、様態副詞や時間関係を表す副詞なども場合によっては心態詞機能を担うようになることがある。例えば、*„Komm ruhig herein!“*という文における *ruhig* は元来、「静かな、穏やかな」という意味の様態副詞である。ところがこの文において *ruhig* は「静かに入ってください」という様態副詞としての解釈はなされず、「どうぞお入りなさい」という「安心して、問題なく」を表す心態詞としての解釈がなされる。ここで *ruhig* は「静かな、穏やかな」という意味から「安心して、問題なく」という意味にメトニミー的あるいはメタファー的な拡張が起こっている。聞き手の中にある懸念や遠慮を打ち消して、その心的態度が「静まり、穏やか」であるということは、「安心して、問題ない」状態であると解釈することが可能であると思われる。

また、*„Wie hieß er schnell?“*という文は「彼の名前は何かだったっけ？」という意味での解釈がなされる。したがって、ここで用いられている *schnell* は様態副詞として「速く」の意味で用いられているわけではない。ただし、自分自身に早く思い出せという要求をつきつけていると見なすこともできる。これらの例から考えられるのは、元来、命題オペレーターではなかったものもメタファー的・メトニミー的な拡張が行われることで、命題に作用する形になることができれば、心態詞になりうるのではないかということである。つまりメタファー的・メトニミー的拡張が難しいものは心態詞になりえないのである。このことは Traugott and Hopper(2003:96)で述べられている比喩的過程(*metaphorical process*)と一致する部分であると推測される。彼らは比喩という概念については「特にある種のものを別のものを照し合せて理解したり経験したりすること、基礎的で具体的な意味からより抽象的な意味へ移動する」ものだと主張している。そのプロセスは「概念的な境界を越えた推論の過程であり、ある領域から別の領域への『マッピング』とか『連想的飛躍(*associative leaps*)』と言われる」という。上述した *ruhig* と *schnell* の意味変容もこのようなプロセスを経て、語彙的要素から機能的要素へと展開したように見受けられるのである。

つまり、不変化詞や形容詞などの語彙が心態詞の機能を持つにいたるには文法化という過程を経ており、そのプロセスには意味漂白や比喩的過程などのパターンがあった。そして文法化の過程では、命題内容に含まれていたものが、命題に関して何らかの作用を及ぼすものへと変容するのである。

7. 結論

これまで不変化詞 **doch** の意味機能を巡って、周辺領域にある語との比較も交えて論じてきた。

第1章においては、**doch** には逆接の接続詞、逆接の接続副詞、応答詞、心態詞があることを確認した。接続詞と接続副詞は単に語順による区別のみで、逆接・譲歩のいずれの用法においても先行文との「対立」を表している。応答詞は先行する会話中の「否定」に対する「対立」を一語で示しており、接続詞・接続副詞よりもその対立性と独立性が強いとすることができる。また先行する発話に否定詞が含まれていない場合でも、会話の相手に想定される否定的な考えに反論する際に用いられることがあることから、その対立性の強さは明白である。

一方、心態詞の意味機能は性質を異にする。心態詞としての **doch** は様々な文タイプと結びつき、反論・反駁・要求・確認をしたい気持ち、怪訝、驚き、怒り、不満などの話者の心的態度を表したり、強調したりすることが可能であった。このような心態詞としての用法の場合、接続機能や応答機能に見られたような明確な「対立性」を見い出すことは一見不可能であるように思われる。しかしながら、**doch** が表現しうるこのような心的態度にも元来の意味機能である逆接・譲歩に現れていた「対立性」との意味的な関連が見いだされるのである。

Doch の心態詞機能をそれぞれの文タイプに分けて観察することで判明したのは、自分の想定と異なる状況に対して、話し手が心的態度の表出を行っており、その心的態度がそれぞれの用法に共通しているということである。つまり、心態詞としての使用においても想定内容との「対立」を表しているのだと考えれば、心態詞にも接続詞・接続副詞、応答詞と共通する意味基盤があると見なしうる。「逆接・譲歩」の意味が「先行する発話や場面との対立」の標識へと展開したと考えられるのである。「対立性」が希薄化するに伴って、心的態度に関わる「話法性」の標識としての機能を持つように至ったと推測される。

また、逆接および譲歩の接続詞・接続副詞と、先行する「否定」を覆そうとする応答詞と、話法性のマーカーである心態詞の三者には対立性の強弱が見いだされ、心態詞は多くの場合、それ以外の用法とは異なって文アクセントを保持しない。**Doch** に文アクセントが置かれる場合は **doch** の対立性が強められることから、話し手が逆接や譲歩の接続関係を明確に表現したい場合である。一方、**doch** に文アクセントが無い場合はその対立性も弱められて、単なるモダリティ標識として機能するのである。さらに心態詞としての **doch** には文肢性が

なく、文頭では用いられない点もその他の機能を担う場合の **doch** と異なる点である。心態詞の **doch** は対立性を弱めると同時に、その独立性を失ってしまったと言える。

このような意味機能の変容を探るため、第 2 章では **doch** の歴史的変遷を考察した。ゴート語では、比較の標識(**als, wie**)、二者択一(**oder**)、決定疑問文における **denn** のようなニュアンス、条件文に後続する副文における接続副詞としての機能などがあった。古高ドイツ語では、**dennoch** や **obwohl** のような譲歩の機能や、現代語における **entweder-oder**、**selbst** や **sogar** に相当する意味を持っていた。また、願望文、目的文、命令文においては心態詞のような機能も果たしていた。中高ドイツ語では逆接接続として機能し、疑問文、命令文、願望文、不定関係文、関係文、主張文（主文）で心態詞としての機能が見られた。このような発展から、モダリティを表出する **doch** が生起しうる文タイプが通時的に拡張されていったことが確認された。

また第 3 章では **jedoch**、**aber**、**ja** との比較、またこれらの連辞表現を通じて **doch** の内在の意味を考察した。そこでは **doch** においては接続詞・接続副詞から応答詞や心態詞の用法が、**aber** においては接続詞・接続副詞から心態詞の用法が、**ja** においては応答詞から心態詞の用法が生み出されたことを主張した。

そして内在の意味が心態詞よりもさらに弱化して用いられている強調詞とも呼ぶべき不変化詞の用法も見受けられた。それは決定疑問文の答えになりうる **doch** と **ja** の前に **ja** や **doch** や **aber** が付加される場合である。このように応答詞が並列したり、心態詞と応答詞が隣接したりする場合、後者の応答詞が重点的な機能を果たすと推測される。というのは、応答詞ではない **aber** が応答詞の前に付加されているケースが確認されるからである。答えになりうるのは **aber** ではなく、**ja** や **doch** であり、また逆の形式である **ja aber** や **doch aber** の用例が確認できなかったことから、二つの応答詞が直接並べられる場合や不変化詞と応答詞が連辞を成して機能する場合は、後者が主要な役割を果たし、前者は後者を補助的に強調する機能を担うと解釈できる。加えて、二つの応答詞が連辞を成して生起する際に、その意味機能を主役的に果たすものと補助的に果たすものに区別できるという点は、プロソディ的な特性を考慮すると明らかである。通常、応答詞はそれ一語で疑問文への返答として機能することが可能であることから常用的に重要な役割を持ち、発音する際に強いアクセントが付与される。しかし応答詞が二つ並んだ場合、後者のほうがより強いアクセントを持つ。そこでは直接隣り合う二語に共に強いアクセントが付与されることが回避されるためだと考えられる。つまり、前述のように、二つの応答詞が連辞を成す際、補助－主要という機能

の順序で配置されていることが、アクセントの弱－強という順序と対応しているとするのが妥当であろう。

また一つの文に心熊詞が複数見られることがあり、その際、心熊詞は直接並んだり、中域で離れて現れたりする。心熊詞の結合の際にも応答詞の結合の場合と同じ理由でアクセントの強弱が与えられると推測される。つまり、ドイツ語の応答詞と心熊詞のそれぞれの連結には、アクセントに段階的な差が生じるという点で共通性が見られるのである。応答詞は本来強いアクセントを持つが、二つの応答詞が連結した場合は前者が比較的弱い発音となる。心熊詞は本来アクセントを持たないが、二つの心熊詞が連結した場合は後者には多少のアクセントが付与される。つまり不変化詞が連結した場合、多くの研究に見られる主張とは異なり、強弱が明確でない、中間的なアクセントを持つ可能性があるのである。この点は「以前は文の中で強く発音されない（文アクセントを持たない）ものが心熊詞とされたが、現在では文アクセントを持っていた心熊詞とされることが多い」¹⁰⁴という考えに通じるところがある。アクセントの有無はその意味機能を明らかにする役割を持つ。連辞を成す場合にはアクセントが比較的弱められた応答詞、アクセントが比較的強められた心熊詞の存在が認められる。このような心熊詞の生起がシンタグラマを成す場合に限定された問題ではないのは、心熊詞としての *ja* においてアクセントの有無によってその機能が異なることが確認されていることから明らかである。また、心熊詞の結合に見られたような先行する心熊詞のアクセントのさらなる弱化現象から、心熊詞よりもさらに意味機能が漂白(Bleaching)された単なる強調詞のような存在も推測された。以上のことから従来のアクセントの有無による品詞分類については再検討が必要であり、アクセントの強弱をさらに細分化した上で再考が求められよう。Thurmair(1989)が「特に書き言葉の使用例においては、どの程度まで *doch* が結合においてアクセントが付与されるのかという決定は難しい」と述べているように、アクセントの有無には流動的な部分が多くあり、この点は他の不変化詞においてもさらに調査・分析を行い、考察する必要がある。とはいえ、意味機能の複合化とアクセントの流動化には強い関係があることは明らかである。すなわち、先行するアクセントが弱い不変化詞が補助的な機能を果たし、後続するアクセントの強い不変化詞が中心的な機能を担うのである。

また *doch* と *jedoch* を比較することで、後者では本来持っていた意味が明確化され、逆

¹⁰⁴ 井口(2000:122)参照。

接機能のみを表す語がいわば「再生産」されたことも明らかになった。元々あった語彙が合成語となることで、その意味機能の変化を可能にしたと解釈できるのである。つまり **doch** は、「逆接の接続機能」に特化された **jedoch** を生み出すことで、それ以外の意味機能を拡張させることができたのではないか。**Doch** は一方では、接続機能を有する表現から、対立性のみを表す独立した応答詞へと発達し、他方では「対立」という本来の語義がほとんど薄れてしまった心態詞の機能を拡張させていったのである。

ドイツ語の不変化詞の結合においては、内在的意味が単純に組み合わせられるのではなく、先行する不変化詞が補助的に強意機能を果たし、後続する不変化詞が主要の意味機能を果たすことが確認された。**Doch ja** という「対立」から「一致」という日本語における終助詞の連辞の場合と同様の形態は周遍的現象である。**Ja doch** という語順は「一致」から「対立」へとという一見矛盾した語順に見えるが、前者 **ja** が後者 **doch** の「対立性」を強めるといふ内在的な意味拡大であると考えられる。つまりドイツ語においては内在的意味の移行が不変化詞の範列に影響を及ぼすことはなかったと言える。

続いて第4章ではドイツ語と同語派族である英語とオランダ語における **doch** の相当語について観察した。英語においては心態詞のようなカテゴリーはなく、副詞や法助動詞がモダリティの表出に貢献していた。とはいえ、譲歩の従属接続詞 **though** にも「逆接」というよりは、発話の区切りを示す標識のような役割をしている場合が見られ、英語の接続詞にも文法化が起こっている可能性が示唆された。オランダ語の **toch** に関しては **doch** 以上に逆接の意味が希薄化していると思われる例文が多く見られた。逆接接続の際に **aber** に相当する **maar** との共起が頻出していたからである。また心態詞機能については **doch** が生起しない場面でも **toch** が用いられていたこともあり、機能の範囲の相違が看取された。さらに、時間副詞と接続詞・接続副詞が対応する文も散見された。時間副詞の含意する意味については今後の考察が必要であると思われる。

第5章では日本語の問題について取り組んだ。助動詞「だ」終助詞「よ」「ね」に関して神尾の「情報のなわ張り理論」を用いて説明した。「よ」は命題が聞き手のなわ張りにないと話し手が想定している会話に、「ね」は命題が聞き手のなわ張りの中にある可能性を排除せずに話し手が発言する際に使用される。対立型の **doch** と「よ」、一致型の **ja** と「ね」がそれぞれ類似した機能を果たしていることが確認された。

最後に第6章では、文法化(*Grammatikalisierung*)について論じた。再帰代名詞 **sich** と **bekommen-Passiv** を用いてドイツ語における文法化現象の一端を示したあと、**doch** の文

これまで論じてきた心熊詞の機能は本来の意味機能が文法化して出現したもの、あるいは心熊詞機能が文法化というプロセスを経て変容していったもの¹⁰⁵と考えられる。

また **aber** や **ja** の文法化についても概観した。不変化詞 **aber** は **doch** と同様、逆接の接続詞、接続副詞として、不変化詞 **ja** は応答詞として機能する。接続詞と接続副詞はいずれも命題と命題をつなぎ合わせる機能を果たしている。応答詞はそれ一語で文相当語句であるので、それ自身に命題が含意されている。それゆえに、この三つの品詞は命題を対象に操作する言語単位であるということができよう。つまり心態詞へ文法化することで、命題のオペレーターとしての機能がその基盤となったと推測される。

強 ←———— アクセント —————→ 弱

Konzessivität

まず und doch というシンタグマについての疑問が残されている。岩崎(2013:1632-1655)も「単に先行する発話との違いを示すためだけならば、und doch ではなく、並列接続詞の aber や doch でも事足りるはずである」と述べている。岩崎は und doch に対して「しかしだ」という断定の助動詞をつけた表現、あるいは「それなのに」などの表現が語

108

感としてふさわしいとしている一方で、**doch** と **und doch**、**wenn** と **und wenn** などの **und** が「どういう〈はたらき〉をしているのかがはなはだ分かりにくい、いや、さっぱり分からない」と述べている。このような一見存在価値が分かりづらい語があえて生起する現象についても、今後考察してみたい。

また、**indessen**、**währenddessen**、**dabei** などの時間副詞に逆接性が付与される場合があるが、その意味機能の変容のメカニズムについても今後検討していきたい。

最後にドイツ語教育について一言したい。心態詞はとりわけ非母語者にとっては習得が困難な文法カテゴリーである。筆者自身がドイツ語を学習し始めた際には、心態詞として機能する不変化詞をどのように日本語に移し替えたらいのか大変苦心した。今でも書き言葉における不変化詞が本来の意味で用いられているのか、それとも心態詞として機能しているのかを区別することは容易ではない。アクセントの有無というマーカーが欠落しているからである。また、ドイツ語の授業を担当するようになり、学生に心態詞について説明することは容易ではない。しかし、コミュニケーションな外国語学習を目指す近年のドイツ語教科書には心態詞を含む会話文が豊富に掲載されている。ただし心態詞に対する説明は多くの場合示されていない。ドイツ語の自然な発話には心態詞が多く出現するが、それゆえに、それをどのように習得していくべきかについて検討する必要がある。今後は DaF（ドイツ語教授法）との関連も含めて、心態詞研究を続けていきたい。

参考文献

- 秋本実治 編 (2001):『文法化：研究と課題』英潮社
- 朝倉純孝 (1983):『オランダ語文典』大学書林
- 天羽均 他 編 (2003):『クラウン仏和辞典』第5版、三省堂
- 池上嘉彦 (1989):「日本語のテキストとコミュニケーション」『日本文法小事典』大修館書店
- 伊東泰治 他 (2001):『新訂・中高ドイツ語小辞典』同学社
- 井口靖 (2000):『副詞』〈ドイツ語文法シリーズ5〉大学書林
- 岩崎英二郎、小野寺和夫 共編 (1994):『ドイツ語不変化詞辞典』白水社
- 岩崎英二郎 (1998):『ドイツ語副詞辞典』白水社
- 岩崎英二郎 (2013):『ドイツ語の副詞・心態詞研究－読解力の向上を求めて－』同学社
- 大藁正彦 (1996):「bekommen 受動をめぐる諸問題」東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編『DER KEIM』20号、pp.61-72
- 岡本順治 (2013):「心態詞」岡本順治、吉田光演編『ドイツ語の文法論』〈講座ドイツ言語学第1巻〉第11章 pp.243-264 ひつじ書房
- 小川曉夫 (1997):「二重目的語の文法と意味」日本独文学会編『ドイツ文学』99号、pp.134-144
- 小川曉夫 (2000):「機能類型論と認知言語学－ドイツ語研究の観点から－」日本独文学会編『ドイツ文学』104号、pp.90-101
- 小川曉夫 (2001):「ドイツ語と言語類型論」吉田光演他著『現代ドイツ言語学入門』大修館書店
- 乙政潤 (2003):『入門ドイツ語学研究』大学書林
- 河上誓作 (1996):『認知言語学の基礎』研究社出版
- 神尾昭雄 (1996):『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 神尾昭雄、高見健一 (1998):『談話と情報構造』〈日英語比較選書2〉研究社出版
- 神尾昭雄 (2002):『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- 金田一春彦 (1997):『日本語 新版 (下)』岩波新書
- 工藤康弘、藤代幸一 (1994):『初期新高ドイツ語』大学書林
- クレインス桂子 他 (2005):『オランダ語の基礎』白水社
- 小泉保 (1998):『音声学入門』大学書林

- 幸田薫 (1985):「心態詞 doch と日本語の対応表現」東京学芸大学紀要 2 部門 36 号、pp.123-132
- 古賀允洋 (1997):『中高ドイツ語』大学書林
- 小西友七、南出康世 編 (2001):『ジーニアス英和大辞典』大修館書店
- 相良守峯 (1992):『ドイツ語学概論』博友社
- 澤田治美 (2006):『モダリティ』開拓社
- サンテグジュペリ 著、小島俊明 訳 (2006):『星の王子さま』中公文庫
- W.シュミット (西本美彦他訳) (2004):『ドイツ語の歴史』朝日出版社
- J.シルト (1999):『図説 ドイツ語の歴史』大修館書店
- 高橋健二 (1984):『グリム兄弟・童話と生涯』小学館
- 高橋健二 (2000):『グリム兄弟』新潮文庫
- 津山朝子 (2005):「不変化詞の機能とその範列の可能性について」関西学院大学文学部ドイツ文学研究室年報 XLVI、pp.75-99
- 津山朝子 (2006):「Doch と jedoch の比較対照－歴史的外観も含めて－」関西学院大学人文学会『人文論究』第 55 巻第 4 号、pp119-130
- 寺澤芳雄 編 (1997):『英語語源辞典』研究社
- 浜崎長寿、乙政潤、野入逸彦 (2000):『ドイツ語文法研究概論』大学書林
- P.G.J.ファン・ステルケンブルグ 他 (2005):『講談社オランダ語辞典』講談社
- ヘルビヒ, G./ブッシャ, J. (1998):『新・ドイツ語ハンドブック』在間進・洞沢伸 共訳、第三書房
- ヘンチェル, E./ヴァイト, H. 著、西本美彦 他 訳 (1996):『ハンドブック 現代ドイツ語文法の解説』同学社
- ホッパー, P.J./トラウゴット, E.C. 著、日野資成 訳 (2003):『文法化』九州大学出版会
- 三尾砂 (1958):『話しことばの文法』法政大学出版会
- 益岡隆志 (2001):『モダリティの文法』くろしお出版
- 村上重子 (2005):『接続詞』大学書林
- 村上春樹 (2013):『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』上・下巻、新潮文庫
- 吉田光演 (1987):「ドイツ語心態詞の組み合わせについて」琉球大学法文学部 Ryudai Review of Language & Literature No.32、pp.198-213
- ロックウッド, W.B. 著、永野芳郎 訳 (1993):『比較言語学入門』大修館書店

- Abraham, Werner (1981): „Partikeln und Konjunktionen – Versuch einer kontrastiven Typologie Deutsch-Niederländisch“ In: Weydt, Harald (hrsg.): *Partikeln und Deutschunterricht*. Heidelberg: J. Groos. 168-188.
- Behaghel, Otto (1924): *Deutsche Syntax*. Bd. 2. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
- Diewald, Gabriele (1997): *Grammatikalisierung. Eine Einführung in Sein und Werden grammatischer Formen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Duden (1988): *Das Stilwörterbuch*. 7. Aufl.. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag.
- Duden (1996): *Deutsches Universal Wörterbuch*. 3., neu bearbeitete Aufl.. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag.
- Duden (1998): *Die Grammatik*. 6. Aufl.. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag.
- Foolen, Ad (2013): Niederländisch *toch* und Deutsch *doch*: Gleich oder doch nicht ganz? [*] In: *Linguistik online* 13, 1/03. http://linguistik-online.org/13_01/foolen.html
- Grimm, Jacob und Grimm, Wilhelm (1984): *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm*. 3 Bde.. Insel Taschenbuch. Baden-Baden: Insel Verlag.
- Grimm, Jacob (1992): *Kleinere Schriften* 8. In: *Jacob Grimm und Wilhelm Grimm Werke. Forschungsausgabe* Abteilung I. Band 8, 1. Hildesheim, Zürich, New York: Olms-Weidmann.
- Grimm, Jacob und Grimm, Wilhelm (2004): *Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Der digitale Grimm*. Frankfurt am Main: Zweitausendeins.
- Hentschel, Elke (1986): *Funktion und Geschichte deutscher Partikeln. Ja, doch, hat und eben*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Hentschel, Elke und Weydt, Harald (1994): *Handbuch der deutschen Grammatik*. 2. Aufl.. Berlin/New York: de Gruyter.
- Helbig, Gerhard (1990): *Lexikon deutscher Partikeln*. 2. unveränd. Aufl.. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.
- Helbig, Gerhard und Buscha, Joachim (1999): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. 19. Aufl.. Leipzig, Berlin, München: Langenscheidt - Verlag Enzyklopädie.

- Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs (1993): *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth Closs (2003): *Grammaticalization*. 2. ed.. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kluge, Friedrich (1989): *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. 22. Aufl.. Berlin, New York: de Gruyter.
- Lehmann, Christian (1995): *Thoughts on Grammaticalization*. München, Newcastle: Lincom Europa.
- Murakami, Haruki (2007): *Hard-boiled Wonderland und das Ende der Welt*. München: btb Verlag.
- Oxford University Press (2008): *Oxford German Dictionary. German-Engisch*. Digital.
- Paul, Hermann (2002): *Das Deutsche Wörterbuch: Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*. 10. überarb. und erw. Aufl.. Tübingen: Max Niemeyer.
- Saint-Exupéry, Antoine de (Autor) / Richard Howard (Übersetzer) (2000): *The Little Prince*. San Diego, New York, London: A Harvest Book Harcourt, Inc.
- Saint-Exupéry, Antoine de (Autor) / Laetitia de Beaufort-van Hamel (Übersetzer) (2003): *De Kleine Prins*. Rotterdam: Ad. Donker.
- Saint-Exupéry, Antoine de (Autor) / Grete und Josef Leitgeb (Übersetzer) (2005): *Der Kleine Prinz*. Düsseldorf: Karl Rauch Verlag.
- Sweetser, Eve (1988): "Grammaticalization and Semantic Bleaching" In: *BLS* 14. Berkeley: Berkeley Linguistics Society. 389-405.
- Thurmair, Maria (1989): *Modalpartikeln und ihre Kombinationen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Traugott, Elizabeth Closs (1982): "From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization". In: Winfred P. Lehmann and Yakov, Malkiel (ed.) *Perspectives on Historical Linguistics* Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins. 245-271.
- Traugott, Elizabeth Closs (1988): "Pragmatic strengthening and grammaticalization" In: *BLS* 14. Berkeley: Berkeley Linguistics Society. 406-416.
- Traugott, Elizabeth Closs (1989): "On the rise of epistemic meanings in English: An

- example of subjectification in semantic change". In: *Language* 65. Washington: Linguistic Society of America. 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs (1995): "Subjectification in grammaticalization". In: Stein, Dieter and Wright, Susan (ed.) *Subjectivity and Subjectivisation*. Cambridge: Cambridge University Press. 31-54.
- Traugott, Elizabeth Closs (1999): "The Role of pragmatics in a theory of semantic change". In: Verschueren, Jef (ed.) *Pragmatics in 1998: Selected Papers from the 6th International Pragmatics Conference*, vol.2. Antwerp: International Pragmatics Association. 93-102.
- Van J. V. Zambon (hrsg.) (2008a): *Van Dale Pocketwoordenboek Duits-Nederlands*. Utrecht, Antwerpen: Van Dale Lexicografie
- Van J. V. Zambon (hrsg.) (2008b): *Van Dale Pocketwoordenboek Nederlands-Duits*. Utrecht, Antwerpen: Van Dale Lexicografie
- Wenzel, Veronika (2002): *Relationelle Strategien in der Fremdsprache. Pragmatische und interkulturelle Aspekte der niederländischen Lernersprache von Deutschen*. Münster: Agenda Verlag.
- Weydt, Harald (1969): *Abtönungspartikel. Die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen*. Bad Homburg, Berlin, Zürich: Verlag Gehlen.